

県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

つき やま い せき よん
築山遺跡 IV

2009年3月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会



築山1～4号填全景



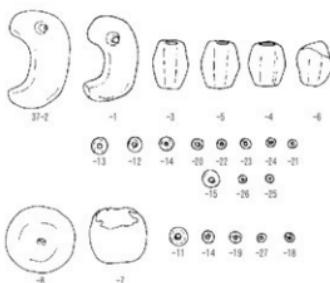
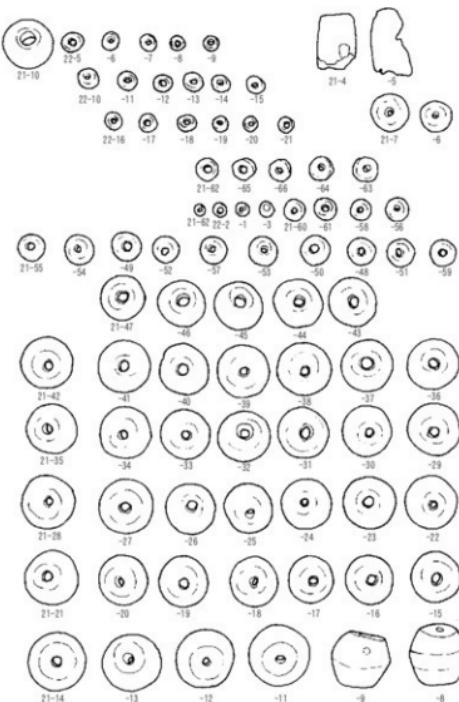
築山1号墳出土土器



築山2号墳出土土器



築山4号墳出土土器





1



2

1 築山2号墳出土玉類

2 築山4号墳出土玉類

序

出雲市教育委員会では、島根県出雲県土整備事務所（前　島根県出雲土木建築事務所）からの委託を受け、平成15年度から県道今市古志線並びに県道出雲三刀屋線の改良事業予定地において築山遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもちまして終了する運びとなりました。本書は、このうち平成18・19年度の発掘調査の成果をまとめたものです。

築山遺跡周辺には、国史跡上塩治築山古墳をはじめとする古墳、横穴墓、集落跡などの遺跡密集地帯であり、数多くの歴史的文化遺産が残っています。

今回の調査では、今まで単独墳と考えられていた上塩治築山古墳が実は群集墳の中の一つであったことが判明しました。この成果は、出雲地方の大形古墳のあり方を考える上でも、大変貴重な資料になると思われます。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご支援ご協力をいただきました島根県出雲県土整備事務所をはじめ、関係の皆様に対して心からお礼申し上げます。

平成21年(2009)3月

出雲市教育委員会
教育長 黒目俊策

例　　言

1. 本書は、島根県出雲県土整備事務所の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成18年度（2006）と平成19年度（2007）に実施した、県道今市古志線改良事業に伴う築山遺跡（島根県遺跡番号：W24、出雲市遺跡番号：F23）の埋蔵文化財発掘調査の記録である。

現地調査は、平成15年度（2003）から平成19年度（2007）の5ヵ年実施した。このうち、平成15年度調査分については『築山遺跡』I・IIとして報告し、平成16年度から平成18年度分については『築山遺跡』IIIとして報告している。

2. 調査は、用地取得の進捗状況に応じて実施したことから、調査地の順序は連続していない。

このため、本報告の整理段階で、調査区の名称を東から西に振り直すこととし、東から西に3 A区、3 B区、3 C区、3 D区、3 E区とした。

調査区名と、旧調査区名、面積、所在、発掘調査期間は次のとおりである。（gr：グリッド）

3 A区　　H18 3区 1-9gr 600m²、出雲市上塩治町1690-1ほか
平成18年9月7日から平成18年10月31日まで

3 B区　　H18 3区 10-24gr 700m²、出雲市上塩治町281, 282, 283-1, 290, 291-1ほか
平成18年11月1日から平成19年3月31日まで

H19 3区 10-24gr 1,125m²、出雲市上塩治町281, 282, 283-1, 290, 291-1ほか
平成19年4月9日から平成19年8月6日まで

H19 3区 25-36gr 1,500m²、出雲市上塩治町271, 272-9, 278-1, 280-3
平成19年4月11日から平成19年12月14日まで

3 C区　　H19 3区 37-48gr 1,500m²、出雲市上塩治町276-5, 277-1, 304-1ほか
平成19年11月2日から平成20年3月5日まで

3 D区　　H19 3区 A51-A58gr 200m²、出雲市上塩治町4080ほか
平成17年8月20日から平成19年9月30日まで

3 E区　　H19 3区 E50-E54gr 70m²、出雲市塩治神前5丁目2
平成19年10月1日から平成19年10月31日まで

3. 調査は、道路のセンター杭を基準に用い、5mグリッドとした。グリッド杭の番号は、東西はアラビア数字とし、東から西に向かってふった。南北はアルファベットとし、北から南に向かってふった。グリッド名は、北東角の杭番号で呼ぶこととした。

4. 遺構番号は、3区東辺から3D・3E区西辺に向かって3000番からの通し番号とした。

また、遺構の種別を記号をもちいてあらわした。

SA 墓・柵 SB 建物 SD 溝 SE 井戸 SK 土坑 SX その他
SP 柱穴

5. 調査体制

平成18年(2006)度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会(教育長 黒目俊策)

調査指導 渡辺貞幸(島根大学法文学部教授)

田中義昭(島根考古学会会長)

勝部智明(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)

守岡正司(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)

事務局 石飛幸治(出雲市文化企画部 文化財課長)

花谷 浩(同 学芸調整官)

川上 稔(同 主査)

調査員 三原一将(同 主事)

米田美江子(同 嘴託員)

調査補助員 板根健悦、高橋誠二、成相幸子(以上 出雲市 文化財課 臨時職員)

整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子、永田節子

発掘作業員 奥田利晃、小村恒利、川上靖夫、公田悦朗、小玉順子、来間達夫、
上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、高根常代、高橋イキコ、
塚原立之、長島節子、成相吉隆、森口大輔、米田 建

平成19年(2007)度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会(教育長 黒目俊策)

調査指導 渡辺貞幸(島根大学法文学部教授)

田中義昭(島根考古学会会長)

勝部智明(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)

守岡正司(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)

事務局 花谷 浩(出雲市文化企画部 次長 兼 文化財課 学芸調整官)

石飛幸治(出雲市文化企画部 文化財課長)

川上 稔(同 主査)

景山真二(同 埋蔵文化財係 係長)

調査員 三原一将(同 主事)

米田美江子(同 嘴託員)

高橋誠二(同 嘴託員)

調査補助員 児玉達也、高橋 周、和田みゆき（同 臨時職員）
整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子
発掘作業員 青木 孝、奥田利晃、小村恒利、川上靖夫、小玉順子、来間達夫、
上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、高根常代、高根 豊、
高橋イキコ、塚原立之、土肥源市、長島節子、成相吉隆、星野篤史、
森口大輔

平成20年(2008)度 報告書作成

調査主体 出雲市教育委員会(教育長 黒目俊策)
調査指導 西尾克己(島根県古代文化センター専門研究員)
守岡正司(島根県教育庁文化財課世界遺産室専門研究員)
角田徳幸(島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員)
大谷晃二(島根県立矢上高等学校 教諭)
山根正明(松江市教育委員会文化財課史料編纂係専門官)
大賀克彦(前・島根県古代文化センター 特別研究員)
事務局 花谷 浩(出雲市文化企画部 次長 兼 文化財課 学芸調整官)
石飛幸治(出雲市文化企画部 文化財課長)
景山真二(同 埋蔵文化財係 係長)
調査員 原 俊二(同 主任)
米田美江子(同 瞠託員)
高橋誠二(同 瞠託員)
調査補助員 児玉達也、高橋 周、和田みゆき（同 臨時職員）
整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子、加藤恰美
調査協力 三原一将(出雲市 文化財課 出雲弥生博物館創設準備室 主任)

6. 発掘調査、室内整理及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関からご指導、ご協力を賜った。

記して謝意を表しておきたい。(敬称略)

今岡 清(出雲塩冶誌編集委員会編集長)

中村一郎(独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所)

山田康弘(島根大学 法文学部 准教授)

山本 崇(独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所)

7. 本書の編集は原と高橋誠二が協議して行い、執筆は、花谷、三原、米田、高橋誠二、高橋周が行った。分担は目次に示したが、第3章第2節については、本文中に詳細を記した。

8. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナの大きさは、L540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋は

大がL380mm×W260mm、中がL250mm×W150mm、小がL140mm×W100mmである。

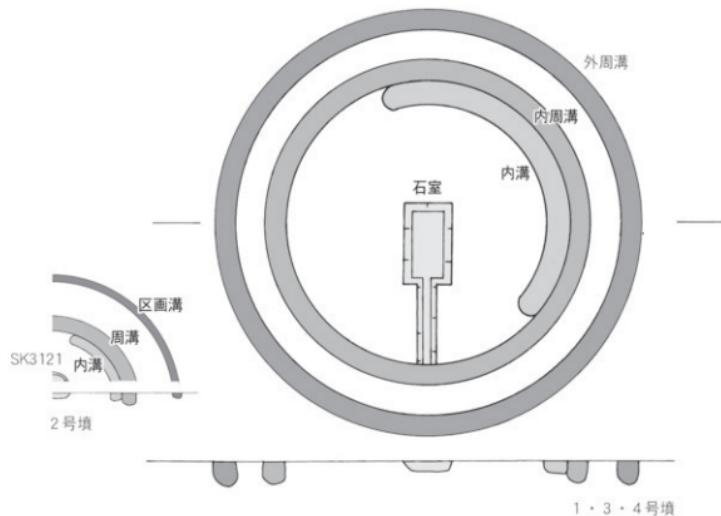
9. 本書で使用した測地系は世界測地系で、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。
10. 自然科学分析については、株式会社文化財調査コンサルタントに委託した。また、¹⁴C年代測定は、国立歴史民俗博物館年代測定研究グループに資料提供し、分析していただいた。それぞれの結果については第4章に掲載した。
11. 本書に掲載した写真の撮影については、遺物写真の一部を西大寺フォト（杉本和樹）に、航空写真を株式会社大隆設計、株式会社藤井基礎設計事務所に委託し、その他は調査員が行った。
12. 遺物実測については、調査員、調査補助員のほか、次の者が従事した。
井上喜代女、岩谷雅美 （以上 いなか舎）
13. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。
14. 調査年度・地区名及び報告書との対応関係は、下記のとおりである。

調査年度	地区名	報告書名(刊行年)
平成15年度 (2003)	1 A区・1 B区	『築山遺跡』I (平成17年(2005)12月)
	2 区	『築山遺跡』II (平成19年(2007)3月)
平成16年度 (2004)	4 B区・4 D区	
平成17年度 (2005)	4 A区・4 B東区・4 C区・5 A区	『築山遺跡』III (平成21年(2009)3月)
平成18年度 (2006)	5 B区	
	3 B区	『築山遺跡』IV (平成21年(2009)3月)
平成19年度 (2007)	3 A区・3 B区・3 C区・3 D区・3 E区	



I 築山遺跡調査全体図 (1 : 4,000)

15. 本書で用いた古墳の部分名称は以下のとおりである。



II 古墳の名称模式図

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	三原一将	1
第1節 道路計画の概要		1
第2節 発掘調査の経過		1
第3節 報告書の作成		2
第2章 遺跡の位置と環境	高橋誠二	5
第1節 遺跡の位置と歴史的環境		5
第3章 3区の調査成果		8
第1節 調査の概要	高橋誠二	8
第2節 古墳時代の遺構と遺物	高橋誠二・花谷 浩	16
I 築山1号墳		16
II 築山2号墳		26
III 築山3号墳		37
IV 築山4号墳		44
V 築山7号墳		64
VI 包含層の遺物		67
第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物	米田美江子	71
I 遺構出土の遺物		71
II 包含層の遺物		73
第4節 古代・中世の遺構と遺物	高橋 周	101
I 遺構出土の遺物		101
II 包含層の遺物		132
第4章 自然科学分析		157
第1節 築山遺跡3C区(平成19年度)発掘調査にかかる花粉分析	波辺正巳	157
第2節 出雲市築山遺跡出土資料の ¹⁴ C年代測定	小林謙一・坂本 稔	162
第5章 まとめ		166
第1節 築山1~4号墳について	高橋誠二	166
第2節 上塩冶築山古墳と築山遺跡の円墳群について	花谷 浩	170
第3節 古代・中世における築山遺跡の諸様相	高橋 周	175

挿図目次

I 築山遺跡調査全体図(1:4,000)

II 古墳の名称模式図

- 第1図 築山遺跡(●)と出雲平野の主要遺跡(1:100,000)
第2図 築山遺跡と周辺の道路(1:20,000)
第3図 3区土層断面模式図(1:80)
第4図 3区全体図(1:2,000)
第5図 3D・3E区遺構図(1:200)
第6図 3B・3C・3D・3E区遺構図(1:200)
第7図 3B・3C区遺構図(1:200)
第8図 3B区遺構図(1:200)
第9図 3A・3B区遺構図(1:200)
第10図 3A区遺構図(1:200)
第11図 1号埴平面図(1:200)及び土層断面図(1:80)
第12図 1号埴周溝内遺物出土状況図(平面図1:200
土器1:6)
第13図 1号埴横穴式石室関係実測図(平面図1:80
遺物1:6)
a 石室石材出土状況
b 石室擾乱土坑実測図
c 遺物出土状況図
第14図 1号埴装身具・出土金属器(1=1:1
2~10=1:2)
第15図 1号埴周溝出土須恵器1(1:3)
第16図 1号埴周溝出土須恵器2(1:3)
第17図 1号埴周溝出土土師器(1:3)
第18図 2号埴平面図(1:200)及び土層断面図(1:80)
第19図 2号埴周溝出土遺物状況図
(上段1:20 下段1:200 土器1:6)
第20図 SK3120平面図・土層断面図(1:40)
第21図 2号埴出土装身具1(1:1)
第22図 2号埴出土装身具2・金属器(1~21=1:1
22~42=1:2)
第23図 2号埴周溝出土須恵器1(1:3)
第24図 2号埴周溝出土須恵器2(1:3)
第25図 3号埴平面図(1:200)及び土層断面図(1:80)
第26図 3号埴石室平面図(1:80)及び遺物出土状況図
(平面図1:80 遺物1:6)
第27図 3号埴周溝遺物出土状況図(平面図1:200
第29図1・4=1:6 第29図6=1:20)
第28図 3号埴出土装身具・金属器
(1・2=1:1 3~28=1:2)
第29図 3号埴周溝出土須恵器
(1~5=1:3、6=1:8)
第30図 4号埴平面図(1:200)及び土層断面図(1:80)
第31図 4号埴周溝出土須恵器範囲図(1:200)
第32図 4号埴周溝A区出土遺物状況図(平面図1:40
第41図71・73=1:8 その他1:6)
第33図 4号埴周溝B区出土遺物状況図(平面図1:40
第43図86=1:6 第43図87=1:16
第39図53=1:6)
第34図 4号埴周溝C区出土遺物状況図
(平面図1:40 土器1:8)
第35図 4号埴横穴式石室関係実測図1(1:80)
a 石室搅乱土坑実測図
b 石室床石・抜取り痕検出状況図
第36図 4号埴石室出土遺物状況図(平面図1:60
金属器1:2 玉1:1)
第37図 4号埴出土装身具・金属器(1~27・51=1:1
11~55=1:2)
第38図 4号埴周溝・外周溝出土須恵器1(1:3)
第39図 4号埴周溝出土須恵器2(1:3)
第40図 4号埴周溝出土須恵器3(1:3)
第41図 4号埴周溝出土須恵器4(1:4)
第42図 4号埴周溝出土須恵器5(1:4)
第43図 4号埴周溝出土須恵器6(84~88=1:4
87=1:8 89~91=1:6)
第44図 4号埴周溝出土土師器(1:3)
第45図 7号埴平面図(1:200)及び周溝・外周溝出土須
恵器(1=1:6 2~4=1:3)
第46図 包含層出土須恵器1(1:6)
第47図 包含層出土須恵器2・埴輪
(8~10=1:6 11~18=1:4)
第48図 SX3198遺構図(1:60)
第49図 SX3198出土遺物1(1:3)
第50図 SX3198出土遺物2
(18~19=1:2、20~22=1:3)
第51図 包含層出土绳文土器1(1:3)
第52図 包含層出土绳文土器2(1:3)
第53図 包含層出土绳文土器3(1:3)
第54図 包含層出土绳文土器4(1:3)
第55図 包含層出土绳文土器5(1:3)

- 第56図 包含層出土縄文土器6(1:3)
- 第57図 包含層出土縄文土器7(1:3)
- 第58図 包含層出土縄文土器8(1:3)
- 第59図 包含層出土縄文土器9(1:3)
- 第60図 包含層出土縄文土器10(1:3)
- 第61図 包含層出土縄文土器11(1:3)
- 第62図 包含層出土縄文土器12(1:3)
- 第63図 包含層出土縄文土器13(1:3)
- 第64図 包含層出土縄文土器14(1:3)
- 第65図 包含層出土縄文土器15(1:3)
- 第66図 包含層出土弥生土器(1:3)
- 第67図 包含層出土縄文・弥生石器1
(1~14=1:2、15~16=1:3)
- 第68図 包含層出土縄文・弥生石器2(1:3)
- 第69図 包含層出土縄文・弥生石器3(1:3)
- 第70図 包含層出土縄文・弥生石器4(1:3)
- 第71図 包含層出土縄文・弥生石器5(1:3)
- 第72図 SB3030の遺構とその遺物
(遺構1:80 遺物1:3)
- 第73図 SB30416の遺構とその遺物
(遺構1:80 遺物1=1:3、2=2:1)
- 第74図 SB3067の遺構とその遺物
(遺構1:80 遺物1:3)
- 第75図 SA3080・SB3081・SB3082・SD3084・SD3085の
遺構とその遺物(遺構1:80 遺物1~4=1:3、
5=1:6)
- 第76図 SB3157の遺構とその遺物(遺構1:80
遺物1:3)
- 第77図 SA3158・SA3147の遺構(1:80)
- 第78図 SK3002・SK3004の遺構とその遺物(遺構1:60
遺物1~15、18=1:3、16~17=1:6)
- 第79図 SK3032・SK3039・SK3057・SK3137の遺構と
その遺物(遺構1:60 遺物1~11=1:3、
12~14=1:6)
- 第80図 SK3133の遺構とその遺物(遺構1:60
遺物1=1:3、2~7=1:8)
- 第81図 SK3136の遺構とその遺物(遺構1:60
遺物1:3)
- 第82図 SK3143・SK3144・SK3148の遺構とその遺物
(遺構1:60 遺物1:3)
- 第83図 SK3145・SK3155・SK3161の遺構とその遺物
(遺構1:60 遺物1:3)
- 第84図 SE3164・SE3166・SX3167・SE3168の遺構と
その遺物(遺構1:60 遺物1:3)
- 第85図 SD3139・SD3141の遺構
(平面図1:200 土層断面図1:60)
- 第86図 SD3139・SD3141の出土遺物(1:3)
- 第87図 SD3154の遺構とその遺物(平面図1:200
土層断面図1:60 遺物1:3)
- 第88図 SD3163の遺構
(平面図1:200 土層断面図1:80)
- 第89図 SD3163出土遺物1(1:3)
- 第90図 SD3163出土遺物2(1:3)
- 第91図 SX3131・SP3025・SP3041の遺構とその遺物
(遺構1:60 遺物1~11=1:3、12~
16=1:4)
- 第92図 包含層出土遺物1(須恵器 1:3)
- 第93図 包含層出土遺物2(須恵器 1:3)
- 第94図 包含層出土遺物3(須恵器 1:3)
- 第95図 包含層出土遺物4(須恵器 1:3)
- 第96図 包含層出土遺物5(須恵器 1:3)
- 第97図 包含層出土遺物6(須恵器 1:3)
- 第98図 赤彩土師器グリッド別包含層出土分布図
- 第99図 包含層出土遺物7(赤彩土師器 1:3)
- 第100図 包含層出土遺物8(赤彩土師器 1:3)
- 第101図 包含層出土遺物9(墨書き土器 1:3)
- 第102図 墨書き土器グリッド別包含層出土分布図
- 第103図 包含層出土遺物10(製塙土器・土鍤 1:3)
- 第104図 製塙土器グリッド別包含層出土分布図
- 第105図 包含層出土遺物11(土師器・土師質土器 1:3)
- 第106図 包含層出土遺物12(黒色土器・土師器甕 1:3)
- 第107図 包含層出土遺物13(土師器甕 1:3)
- 第108図 包含層出土遺物14(土師器甕 1:3)
- 第109図 包含層出土遺物15
(中世須恵器・瓦質土器・土師質土器 1:3)
- 第110図 包含層出土遺物16
(縄輪陶器・国内陶器・貿易陶磁器 1:3)
- 第111図 包含層出土遺物17(鉄器・銅錢
357~373=1:3、374~377=1:1)
- 第112図 包含層出土遺物18(鉄滓・鐵治関連遺物
378~388=1:6、389~394=1:3)
- 第113図 試料採取地点(1:300)
- 第114図 築山遺跡H19-3 C区の花粉ダイアグラム
- 第115図 較正年代確率分布図
- 第116図 築山古墳群全体図(1:2,000)
- 第117図 築山1~7号墳と円形周溝1の平面図
(1:600)
- 第118図 築山遺跡3区及びその周辺の遺構と
方格地割想定ライン(1:2,000)
- 第119図 築山遺跡4~5 A区の構状遺構と
方格地割想定ライン(1:2,000)

表目次

- 表1 微化石調査結果
表2 測定資料と測定結果
表3 築山遺跡古墳関係遺構・遺物一覧表
表4 築山遺跡及びその周辺所在遺跡の主な溝状遺構主軸方位一覧表

図版目次

カラー図版

1 築山1～4号墳全景	4 築山4号墳出土土器
2 築山1号墳出土土器	5-1 築山2号墳出土玉類
3 築山2号墳出土土器	5-2 築山4号墳出土玉類
図版1-1 築山遺跡3区全景調査前(東から)	図版15-1 4号墳周溝土層断面(南から)
-2 築山遺跡3区全景調査前(真上から)	-2 4号墳周溝土層断面(南西から)
図版2-1 1号墳調査前(南側)(西から)	-3 4号墳外周溝土層断面(南から)
-2 1号墳調査前(北側)(北西から)	図版16-1 4号墳周溝遺物出土状況(南西から)
図版3-1 1号墳石室調査前(北から)	-2 4号墳周溝遺物出土状況(南西から)
-2 1号墳石室調査前(南西から)	-3 4号墳周溝遺物出土状況(南西から)
図版4 1号墳完掘後(東から)	-4 4号墳周溝遺物出土状況(西から)
図版5-1 1号墳石室完掘後(南西から)	図版17-1 4号墳周溝遺物出土状況(南から)
-2 1号墳周溝遺物出土状況(西から)	-2 4号墳周溝遺物出土状況(北東から)
-3 1号墳石室遺物出土状況(南西から)	-3 4号墳周溝(南西から)
-4 1号墳石室遺物出土状況(南西から)	図版18-1 4号墳石室(南西から)
図版6-1 2号墳調査前(西北から)	-2 4号墳石室上層断面(南東から)
-2 2号墳調査前(北から)	-3 4号墳石室上層断面(南西から)
図版7-1 2号墳周溝遺物出土状況(北から)	図版19-1 4号墳石室(南西から)
-2 2号墳周溝遺物出土状況(西から)	-2 4号墳石室床面(南西から)
図版8-1 2号墳内溝(北から)	-3 4号墳石室完掘後(南東から)
-2 2号墳完掘後(北東から)	図版20-1 7号墳外周溝(2区)(真上から)
図版9-1 3号墳調査前(中央)(北から)	-2 7号墳周溝(3A区)(東から)
-2 3号墳調査前(西側)(北西から)	図版21 1号墳出土装身具・金属器 1号墳周溝出土須恵器1
-3 3号墳調査前(東側)(北から)	1号墳周溝出土須恵器2
図版10-1 3号墳周溝石室石材出土状況(南西から)	1号墳周溝出土須恵器3
-2 3号墳石室(西から)	1号墳周溝出土土師器
図版11-1 3号墳石室(南西から)	2号墳出土装身具・金属器
-2 3号墳完掘後(南東から)	2号墳周溝出土須恵器1
図版12-1 4号墳調査前(東側)(南東から)	2号墳周溝出土須恵器2
-2 4号墳調査前(西側)(南西から)	2号墳周溝出土須恵器3
図版13-1 4号墳完掘後(東から)	2号墳周溝出土須恵器4
-2 4号墳周溝・外周溝(南西から) 後方の杜は上塗冶築山古墳	3号墳出土装身具・金属器 3号墳周溝出土須恵器1
図版14-1 4号墳完掘後(東から)	3号墳周溝出土須恵器2
-2 4号墳調査風景(北から)	4号墳出土装身具・金属器
-3 4号墳調査風景(南西から)	

図版33	4号墳周溝出土須恵器1	図版58-1	包含層出土弥生土器
図版34	4号墳周溝出土須恵器2	-2	包含層出土人面付土器
図版35	4号墳周溝出土須恵器3	-3~7	包含層出土石器1
図版36	4号墳周溝出土須恵器4	図版59-1	包含層出土石器2
図版37	4号墳周溝出土須恵器5	-2	包含層出土石器3
図版38	4号墳周溝出土須恵器6	図版60	包含層出土石器4
図版39	4号墳周溝出土須恵器7	図版61-1	SA3080・SB3081・SB3082(西から)
図版40	4号墳周溝出土須恵器8	-2	SB3157(東から)
図版41	4号墳周溝出土須恵器9	図版62-1	SK3002(北から)
図版42	4号墳周溝出土須恵器10	-2	SK3004(北から)
図版43	4号墳周溝出土土師器	-3	SK3057(南から)
図版44	包含層出土須恵器	-4	SK3032(南から)
図版45-1	3E区谷地形(東から)	-5	SK3039(南から)
-2	3D区谷地形(東から)	-6	SK3137(北から)
-3	SX3198最終検出遺物出土状況(西から)	-7	SK3136(北から)
図版46	SX3198出土遺物	-8	SK3133(北から)
-1・2	弥生土器	図版63-1	SK3145(東から)
-3	石器	-2	SE3168(東から)
-4	石鐵	-3	SK3161(南から)
-5	石錐	-4	SK3155(東から)
図版47-1	包含層出土縄文土器1外面	-5	土師器甕(包含層第106図313)出土状況 (南から)
-2	包含層出土縄文土器1内面	-6	SP3025(南から)
図版48-1	包含層出土縄文土器2外面	-7	SP3041(南から)
-2	包含層出土縄文土器2内面	図版64-1	SD3141(南から)
図版49-1	包含層出土縄文土器3	-2	SD3154(東から)
-2	包含層出土縄文土器4	-3	SD3163(北から)
図版50-1	包含層出土縄文土器5	図版65	遺構出土遺物1
-2	包含層出土縄文土器6	図版66	遺構出土遺物2
図版51-1	包含層出土縄文土器7	図版67	遺構出土遺物3
-2	包含層出土縄文土器8	図版68	包含層出土遺物1
図版52-1	包含層出土縄文土器9	図版69	包含層出土遺物2
-2	包含層出土縄文土器10	図版70	包含層出土遺物3
図版53-1	包含層出土縄文土器11	図版71	包含層出土遺物4
-2	包含層出土縄文土器12	図版72	包含層出土遺物5
図版54-1	包含層出土縄文土器13	図版73	包含層出土遺物6
-2	包含層出土縄文土器14	図版74	遺構出土遺物4・包含層出土遺物7
図版55-1	包含層出土縄文土器15	図版75	包含層出土遺物8
-2	包含層出土縄文土器16	図版76	包含層出土遺物9
図版56-1	包含層出土縄文土器17	図版77	墨書き土器1〔赤外線写真〕
-2	包含層出土縄文土器18	図版78	墨書き土器2・墨書き五輪塔〔赤外線写真〕
図版57-1	包含層出土縄文土器19		
-2	包含層出土縄文土器20		

附図目次

- 附図 1 3 B 区全体図（1：400）
- 附図 2 築山遺跡トレンチ調査配置図（1：1000）
- 附図 3 築山遺跡周辺の方格地割想定図（1：5000）

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 道路計画の概要

都市計画道路である県道今市古志線は、出雲市街地の環状道路の一部をなす4車線の主要幹線街路であり、山陰自動車道とリンクし、出雲市の骨格となる街路として山陰自動車道の整備及び市街地内の他道路の整備に合わせ、島根県出雲県土整備事務所（以下、県土整備事務所という。）によって計画され設置が進められている延長1.15kmの道路である。

第2節 発掘調査の経過

平成15年度発掘調査以前

この道路は上塩治町から今市町に及ぶ間で計画されているが、特に上塩治町地内は史跡上塩治築山古墳（以下、築山古墳といふ。）などが存在する遺跡の密集地である。このため県土整備事務所は平成14年（2002）7月23日付で、当該事業予定地内の埋蔵文化財について出雲市あて協議書を提出し、出雲市はこれに対し7月30日付で試掘調査が必要な旨を回答した。その後、出雲市は11月25日、26日に試掘調査を行い事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地を概ね確定し、この調査結果を11月28日付で、県土整備事務所あて報告した。

平成15年度

これを受けた県土整備事務所は平成15年（2003）4月1日付で、県道今市古志線と同時に計画されていた県道出雲三刀屋線の兩事業用地のうち、用地買取などが済んでおり発掘調査可能な範囲について、出雲市あてに埋蔵文化財発掘調査を依頼し、同日付で委託契約を交わした。

これに基づき、出雲市は同年6月4日から11月30日まで県道出雲三刀屋線用地内の現地発掘調査（1区及び11号区画道路部）を実施した後、12月1日から平成16年（2004）3月31日まで県道今市古志線予定地内の発掘調査（2区）を実施した。

なお、これらの発掘調査の報告書は平成17年12月及び平成19年3月にそれぞれ発刊済みである。

平成16年度

平成16年度は県土整備事務所と平成16年4月1日付で交わした委託契約に基づき、出雲市が塩治神社参道から南に延びる道路予定地である4D区・築山遺跡南区（1-8gr）の発掘調査を4月26日から8月2日まで行った。また、塩治神社参道以北の道路予定地で、平成14年には用地買取の都合等で試掘調査ができなかった箇所について、県土整備事務所が7月23日及び10月15日付で出雲市へ試掘調査の依頼を行った。これを受けた出雲市が試掘調査を行った結果は、8月23日及び平成17年2月23日付で県土整備事務所へ報告された。特に8月23日付けの報告では新たに発掘調査が必要となる箇所が指摘されていたため、県土整備事務所は10月15日付で出雲市に追加で本調査の依頼をした。このため両者は10月28日付で変更契約を締結し、出雲市は塩治神社参道以北の調査区である4B区・築山遺跡北区（19-6gr）の発掘調査を10月28日から平成17年2月14日まで実施した。

平成17年度

平成17年3月22日に出雲市ほか1市4町は合併した。このため、平成17年度当初の委託契約は出雲市の暫定予算内での締結となった。しかし、県土整備事務所と出雲市は6月28日に変更契約することで通年の発掘調査に対応することとした。これにより、出雲市は4月25日から10月21日まで4A・4B東・4C区・築山遺跡北区(29-19、18-12、6-1gr)、10月6日から平成18年3月20日まで5A区・築山遺跡南区(21-32gr)の発掘調査を実施した。

平成18年度

平成18年度は県土整備事務所と平成18年4月1日付けで交わした委託契約に基づき、出雲市は5B区・築山遺跡南区(34-55gr)の発掘調査を4月13日から10月20日まで行った。また、新たな調査区である3A～3E区・築山遺跡3区(CD01-CD24gr)の発掘調査を9月7日から平成19年3月31日まで実施した。

平成19年度

平成18年度の調査区であった3B区・築山遺跡3区(CD11-CD24gr)からは円墳が3基発見された。この箇所は調査後埋め戻し、進入路として利用する予定であった。しかし、円墳の発見に伴い平成19年度も継続して調査を行うこととなった。平成19年度は県道今市古志線の東西線部分の予定地である3B区・3C区・3D区・3E区・築山遺跡3区(10-58gr)である。出雲市は県土整備事務所との受託契約を締結し、4月1日から平成20年3月5日まで現地発掘調査を実施した。なお、平成19年度の発掘調査をもって、平成15年度から継続して実施してきた当該工事予定地の現地発掘調査は全て終了した。

本書は上記の平成18年度から平成19年度にかけて実施した、3A区・3B区・3C区・3D区・3E区・築山遺跡3区(01gr-58gr)の発掘調査成果について報告するものである。

第3節 報告書の作成

5年度にわたって発掘調査を実施してきたが、既刊の報告書は平成15年度発掘調査分の2冊(報告I・II)のみであった。

県道は平成20年度中に竣工し、共用開始する予定であったことから、一連の埋蔵文化財調査も同年度中に完了しなければならない状態であった。そのため、平成20年度に残り4年度分の調査成果をまとめて刊行することとなった。

整理作業は基本基本的に各年度の発掘調査と平行しながら現地事務所で進めてきたが、未整理・未着手の内容も多々あり、作業は難航した。

しかし、年度末には調査成果を2冊(報告III・IV)の報告書としてまとめ、刊行する運びとなった。

関係する主な文書

平成18年(2006)

4月1日 「今市古志線地方道路交付金(街路)事業 埋蔵文化財調査委託契約」県土整備事務所と出雲市

4月1日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

- 11月1日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区1～9gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 11月1日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区1～9gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から鳥県教委へ
- 11月1日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡3区1～9gr分）県教委から市教委へ
- 11月7日 「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡3区1～9gr分）市教委から出雲警察署へ
- 11月7日 「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡3区1～9gr分）市教委から県教委へ
- 11月15日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡3区1～9gr分）県教委から市教委へ
- 平成19年（2007）
- 3月31日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区CD11～24gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 4月1日 「今市古志線地方道路交付金（街路）事業 埋蔵文化財調査委託契約」県土整備事務所と出雲市
- 4月5日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 4月6日 「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡3区CD11～CD24gr分）市教委から出雲警察署へ
- 4月6日 「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡3区CD11～CD24gr分）市教委から県教委へ
- 4月17日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡3区CD11～CD24gr分）県教委から市教委へ
- 8月6日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区10～24gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 8月6日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区10～24gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から鳥県教委へ
- 8月7日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡3区10～24gr分）県教委から市教委へ
- 8月9日 「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡3区10～24gr分）市教委から出雲警察署へ
- 8月9日 「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡3区10～24gr分）市教委から県教委へ
- 8月31日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡3区10～24gr分）県教委から市教委へ
- 10月1日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区A51～A58gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 10月1日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区A51～A58gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から鳥県教委へ
- 10月2日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡3区51～58gr分）県教委から市教委へ
- 10月5日 「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡3区A51～A58gr分）市教委から出雲警察署へ
- 10月5日 「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡3区A51～A58gr分）市教委から県教委へ
- 10月19日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡3区A51～A58gr分）県教委から市教委へ
- 10月31日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区E50～E54gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 10月31日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡3区E50～E54gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から鳥県教委へ

- 10月31日 「遺跡の取り扱いについて(回答)」(築山遺跡3区E50～E54gr分)県教委から市教委へ
- 11月 6 日 「埋蔵文化財発見届」(築山遺跡3区E50～E54gr分)市教委から出雲警察署へ
- 11月 6 日 「埋蔵文化財保管証」(築山遺跡3区E50～E54gr分)市教委から県教委へ
- 12月17日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財(築山遺跡3区25～36gr)発掘調査の概報の提出について(報告)」市教委から県教委へ
- 12月17日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財(築山遺跡3区25～36gr)発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて(協議)」市教委から鳥県教委へ
- 12月20日 「遺跡の取り扱いについて(回答)」(築山遺跡3区25～36gr分)県教委から市教委へ
- 12月20日 「埋蔵文化財発見届」(築山遺跡3区25～36gr分)市教委から出雲警察署へ
- 12月20日 「埋蔵文化財保管証」(築山遺跡3区25～36gr分)市教委から県教委へ
- 12月25日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について(通知)」(築山遺跡3区E50～E54gr分)県教委から市教委へ
平成20年(2008)
- 1月 8 日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について(通知)」(築山遺跡3区25～36gr分)県教委から市教委へ
- 2月 1 日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財(築山遺跡3区AB37～AB48gr)発掘調査の概報の提出について(報告)」市教委から県教委へ
- 2月 1 日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財(築山遺跡3区AB37～AB48gr)発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて(協議)」市教委から鳥県教委へ
- 2月 4 日 「遺跡の取り扱いについて(回答)」(築山遺跡3区AB37～AB48gr分)県教委から市教委へ
- 2月 5 日 「埋蔵文化財発見届」(築山遺跡3区AB37～AB48gr分)市教委から出雲警察署へ
- 2月 5 日 「埋蔵文化財保管証」(築山遺跡3区AB37～AB48gr分)市教委から県教委へ
- 2月18日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について(通知)」(築山遺跡3区AB37～AB48gr分)県教委から市教委へ
- 3月 5 日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財(築山遺跡3区CD37～CD48gr)発掘調査の概報の提出について(報告)」市教委から県教委へ
- 3月 5 日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財(築山遺跡3区CD37～CD48gr)発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて(協議)」市教委から鳥県教委へ
- 3月10日 「遺跡の取り扱いについて(回答)」(築山遺跡3区CD37～CD48gr分)県教委から市教委へ
- 3月10日 「埋蔵文化財発見届」(築山遺跡3区CD37～CD48gr分)市教委から出雲警察署へ
- 3月10日 「埋蔵文化財保管証」(築山遺跡3区CD37～CD48gr分)市教委から県教委へ
- 3月24日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について(通知)」(築山遺跡3区CD37～CD48gr分)県教委から市教委へ

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

出雲平野は、南北を中国山地と島根半島に挟まれ、中国山地から流れ出る神戸川と斐伊川の沖積作用によって形成された。

築山遺跡は、神戸川右岸の微高地に位置する。この微高地は、南側の丘陵裾から北側の水田面に向かって緩やかに低くなっている。東西の水田面との比高差は、東側の水田面とは差がほとんどないのに対し、西側の水田面とは約1.5mもの差がある。また、この微高地上には南から北へ築山遺跡、角田遺跡、宮松遺跡が広がっている。

以下、築山遺跡とその周辺の歴史的概要をみる(第1・2図)。

築山遺跡からは縄文時代後期から弥生時代前期までの土器・石器が出土している。主要な出土遺物としては弥生時代前期の入面付き土器がある。築山遺跡周辺で見つかっている当該期の遺跡としては三田谷I遺跡(38)がある。この遺跡は築山遺跡の南側丘陵を越えたところに位置し、直線距離で約1kmである。ここからは縄文時代後期の丸木船が見つかっている。

弥生時代中期～古墳時代中期の遺物は、築山遺跡からはほとんど出土していない。

弥生時代中期から後期にかけて入海「神門水海」周辺には古志本郷遺跡(45)や下古志遺跡(48)といった集落遺跡が次々と出現しているが、古墳時代前期には廃絶したり、規模が縮小したりしている。

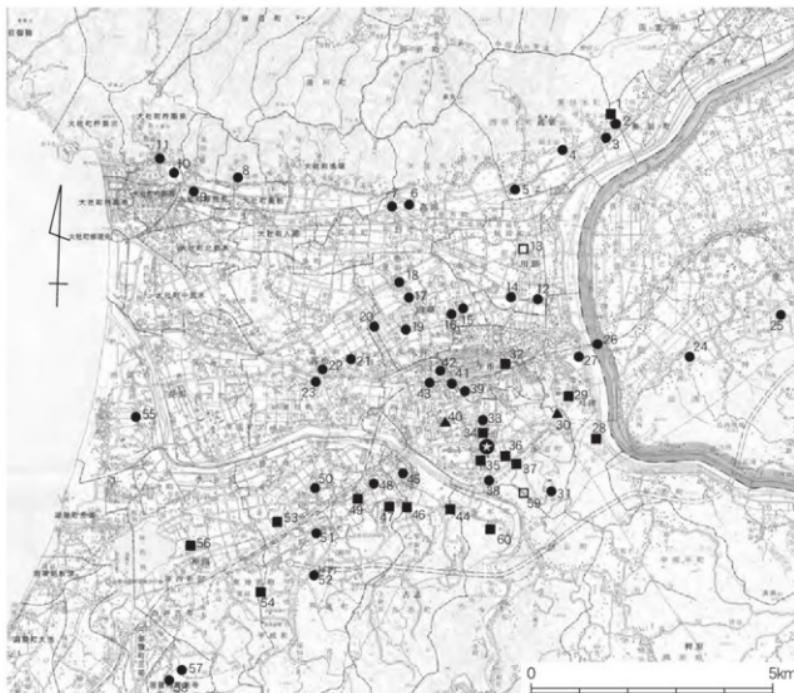
古墳時代後期になると築山遺跡周辺には上塙治築山古墳(34)と上塙治横穴墓群(37)が造られている。従来、上塙治築山古墳は1基のみ築造されたと考えられてきたが、今回周辺から7基の古墳が見つかり、本来は群集墳であったことが分かった。また、上塙治横穴墓群の第34支群は、古墳群とほぼ同時期のもので、これ以後、連綿と造墓活動が続いている。同時期に2種類の埋葬方法が存在することは、当時の社会構成を考える上で注目される。

古代においては、8世紀に編纂された『出雲国風土記』に当時の様子がえがかれている。それによれば築山遺跡は神門郡の日置郷にあたる場所と推定される。塙治神社周辺に日置郷庁があったとする考えもあるが、発掘調査範囲内では郷庁と判断できる遺構は見つからなかった。

しかし、「佛」と書かれた墨書き土器や、鉄鉢形土器などが出土しており、さらに、8世紀頃の須恵器蓋環に火葬骨を入れて埋葬している土坑墓が見つかっていることなどから、調査地周辺に宗教に関する施設や役所などの公的な施設が存在した可能性も考えられる。なお、神門郡の朝山郷の新造院と見られている神門寺境内廃寺は、調査地の西約850mの地点である。

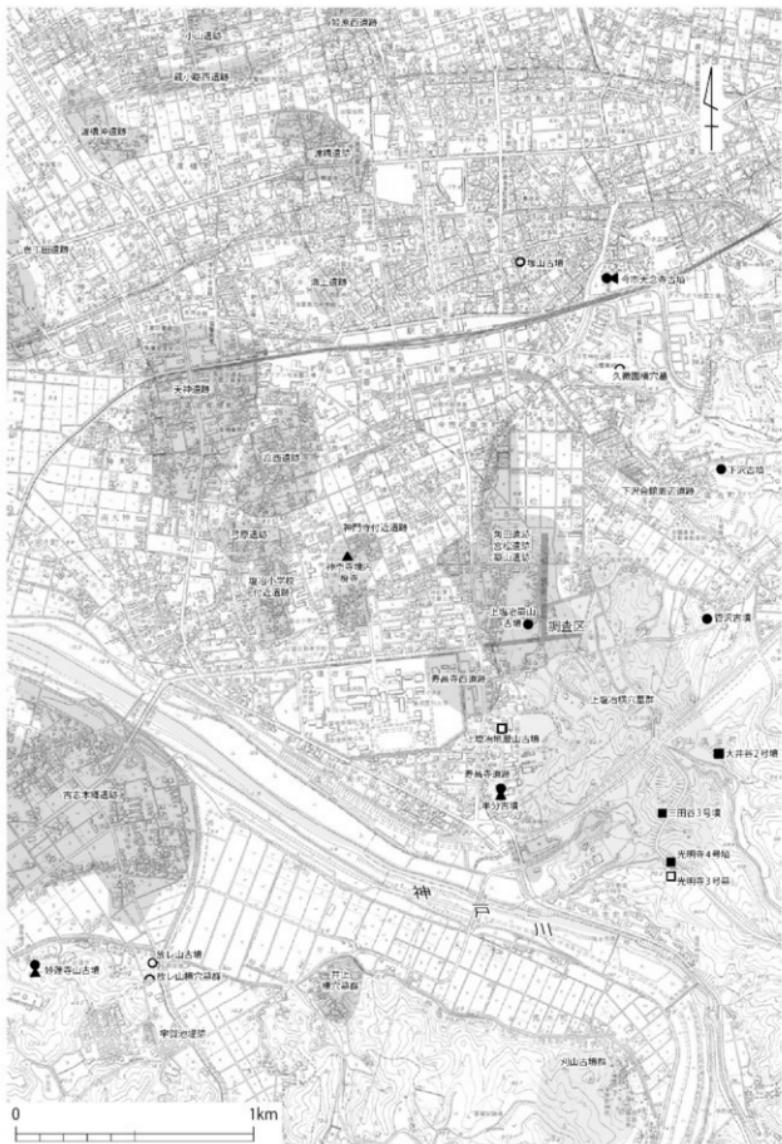
中世には掘立柱建物跡や方形の区画溝が見つかっている。出雲平野の中世の建物跡は、蔵小路西遺跡(16)、天神遺跡(43)、渡橋沖遺跡(19)などがある。築山遺跡の主な出土遺物としては大量の輸入陶磁器がある。出雲平野において、輸入陶磁器の出土量は蔵小路西遺跡に次ぐ量であり注目される。また、塙治判官館跡の堀に推定されていた場所も今回調査地内であったが、堀などの館に関する遺構は見つからなかった。

このように、築山遺跡は出雲平野の南東部側の主要な遺跡として注目される存在である。



第1図 築山遺跡(●)と出雲平野の主要遺跡(1:100,000)

1. 大寺古墳
2. 大寺三藏遺跡
3. 青木遺跡
4. 門前遺跡
5. 山持遺跡
6. 里方八方原遺跡
7. 高浜II遺跡
8. 菱根遺跡
9. 原山遺跡
10. 五反配遺跡
11. 出雲大社境内遺跡
12. 中野清水遺跡
13. 荻杼古墓
14. 中野美保遺跡
15. 姫原西遺跡
16. 蔗小路西遺跡
17. 小山遺跡
18. 矢野遺跡
19. 渡橋沖遺跡
20. 白枝荒神遺跡
21. 壱丁田遺跡
22. 白枝本郷遺跡
23. 余小路遺跡
24. 後谷遺跡
25. 三井II遺跡
26. 斐伊川鉄橋遺跡
27. 石土手遺跡
28. 権現山古墳
29. 西谷墳墓群
30. 長者原庵寺
31. 大井谷II遺跡
32. 今市大念寺古墳
33. 角田遺跡
34. 上塙治築山古墳
35. 上塙治地蔵山古墳
36. 池田古墳
37. 上塙治横穴墓群
38. 三田谷工遺跡
39. 藤ヶ森南遺跡
40. 神門寺境内庵寺
41. 善行寺遺跡
42. 海上遺跡
43. 天神遺跡
44. 井上横穴墓群
45. 古志本郷遺跡
46. 放レ山古墳
47. 妙蓮寺山古墳
48. 下古志遺跡
49. 宝塚古墳
50. 多聞院遺跡
51. 浅柄遺跡
52. 保知石遺跡
53. 神門横穴墓群
54. 北光寺古墳
55. 上長浜貝塚
56. 山地古墳
57. 三部竹崎遺跡
58. 御領田遺跡
59. 光明寺3号墓
60. 刘山古墳群



第2図 築山遺跡と周辺の遺跡 (1:20,000)

第3章 3区の調査成果

第1節 調査の概要

今回の調査区は国史跡上塙治築山古墳の南側に位置する。調査区名は東から西に向かって「3 A区」「3 B区」「3 C区」「3 D区」「3 E区」とした(図版1)。

いずれの調査区も、耕作土は重機掘削を行い、遺物包含層以下は手掘りによって調査を行った。

3 A区は平成18年度に調査を行った。東西50m、南北12m、面積は約600m²である。

調査区東端から築山7号墳の周溝を確認した。西側は古城山の裾にあたり、遺構は存在しなかった。

3 B区は平成18・19年度に調査を行なった。東西133m、南北25m、面積は約3,325m²である。ほぼ全面から古墳4基を確認した。発見順に東から2号墳、1号墳、3号墳、4号墳とした。

3 C区は平成19年度に調査を行った。東西60m、南北25m、面積は約1,500m²である。東側には南北に延びる古代～中世の大溝を確認した。西側は後世の搅乱が著しい。

3 D区は平成19年度に調査を行った。東西41m、南北4～8m、面積は約200m²である。微高地の西端に位置する。縄文土器・弥生土器が出土した。特筆すべきものに、人面付土器がある。

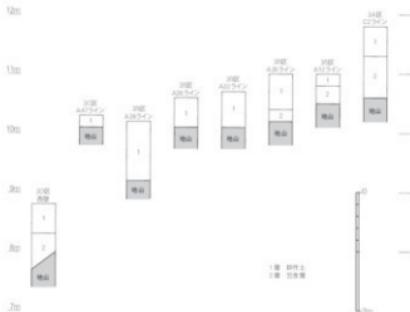
3 E区は平成19年度に調査を行った。東西23m、南北3m、面積約70m²である。微高地の西端に位置する。縄文土器・弥生土器が出土した。縄文時代の土坑を確認した。

基本層序(第3図) 本調査区での土層堆積状況は、上から1層が耕作土、2層が遺物包含層、3層が地山の黄褐色砂層。

2層には弥生時代から近世までの遺物が含まれていたが、時代ごとに分層することはできなかった。3層は第1ハイカ相当層(三瓶太平山降下火山灰)である。遺構は基本的にこの層の上面で検出した。

地山としている第3層は、調査区の東から西に向かってゆるやかに傾斜している。東端の3 A区C2ライン付近では標高が10.6mであるが、西約170mの3 B区A36ライン付近では標高10.1mとさがる。

3 C区では南北方向の大溝(SD3163)の両側付近で地山が低くなる。東側のA38ライン付近では標高9.2mである。西側のA47ライン付近では標高が再び10.1mと高くなる。しかし、3 D・3 E区になると、地山が急激に下がり標高7.7m以下となる。傾斜変換ラインは、北西から東南方向にはしる。

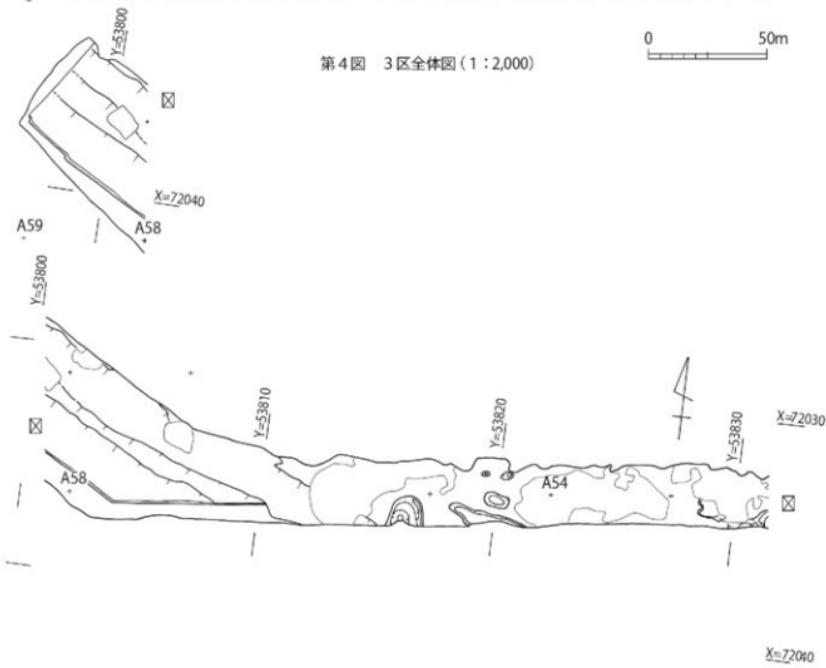


第3図 3区土層断面模式図 (1:80)



第4図 3区全体図 (1:2,000)

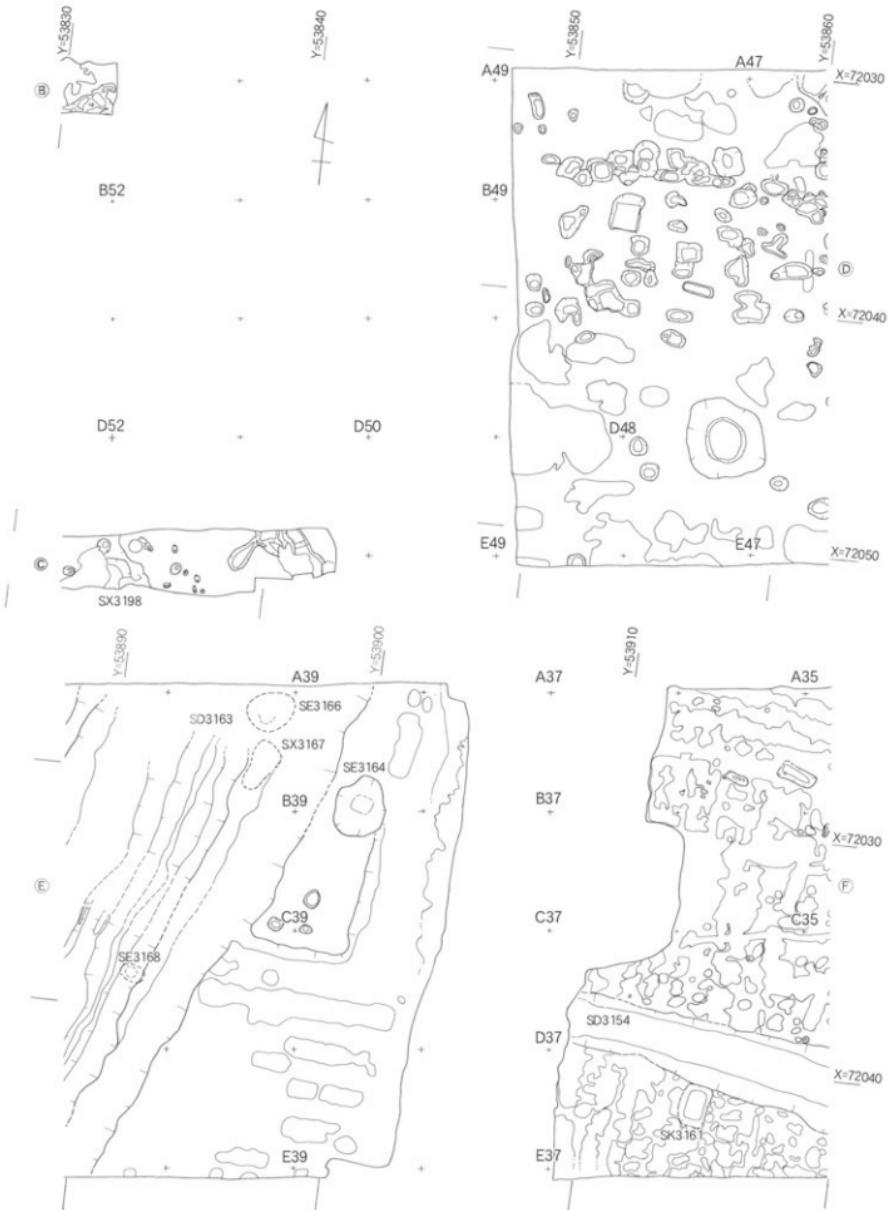
0 50m



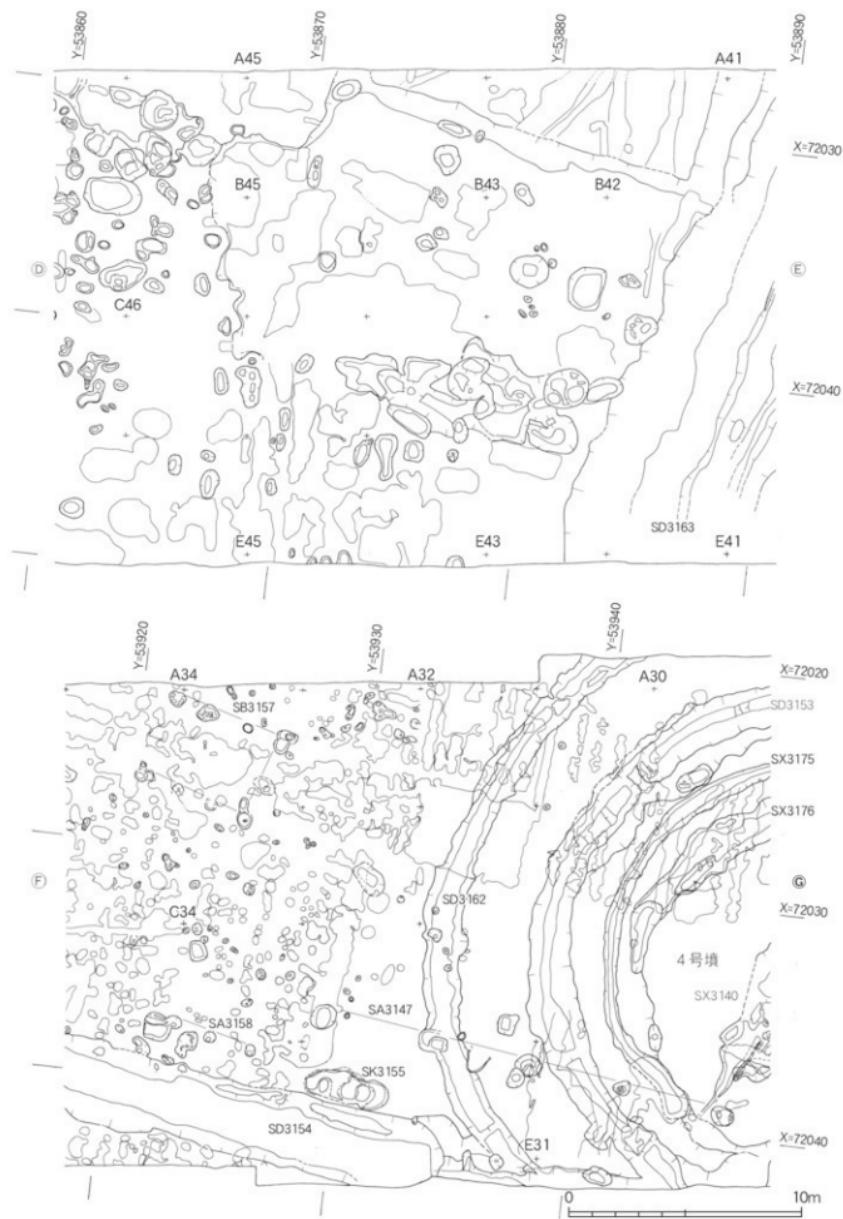
0 10m



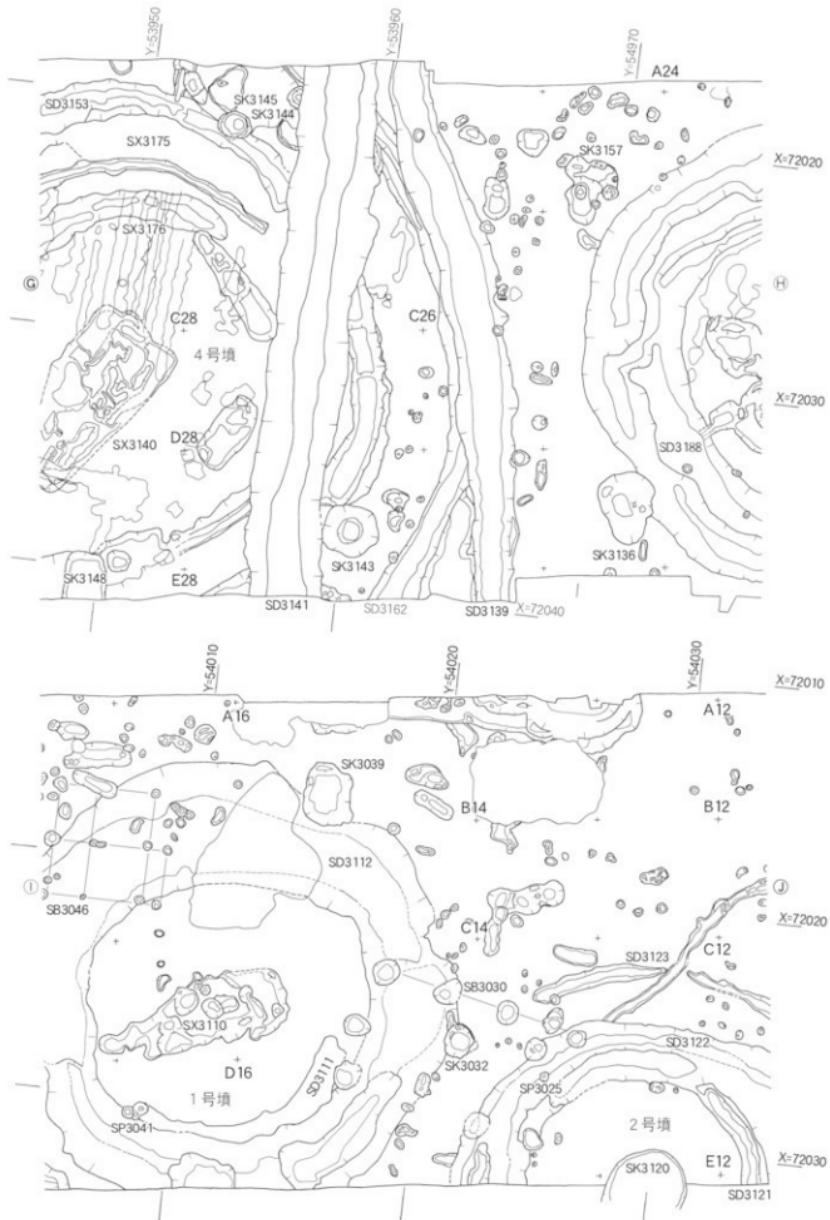
第5図 3D・3E区縦横図 (1:200)



第6図 3B・3C・3D・3E区遺構図 (1:200)



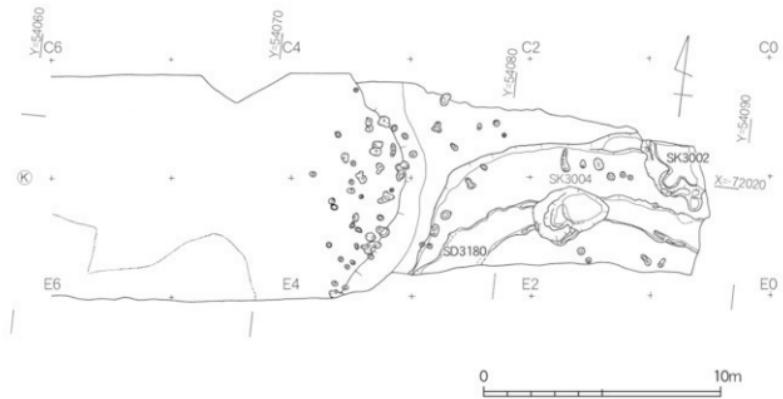
第7図 3B・3C区遺構図(1:200)



第8図 3B区遺構図 (1:200)



第9図 3A・3B区遺構図 (1:200)



第10図 3 A区遺構図 (1 : 200)

第2節 古墳時代の遺構と遺物

築山遺跡1～4号墳は、上塙治築山古墳の約50m南側、3B区でみつかった。いずれも墳丘が削平されて地表に痕跡を残していないかったが、遺存した周溝の形態からみて4基すべて円墳と判明した。築山遺跡7号墳は、3A区でその周溝の一部が確認された。3B区に並ぶ1～4号墳とは、「古城山」とよばれる小丘陵を隔てた東約40mの地点にある。3A区に隣接する2区および1B区(『築山I・II』で報告済み)でも周溝の一部が確認されている。7号墳も円墳である。

以下、各古墳の内容を記す。

I 築山1号墳

築山1号墳は3B区の中央やや東に位置し、その東側2.8mには2号墳、西側15mには3号墳がある。1号墳は、地表下約1～1.2mで確認された。標高は約10.4m。

1 墳丘と周溝 (第11・12図 図版2・4)

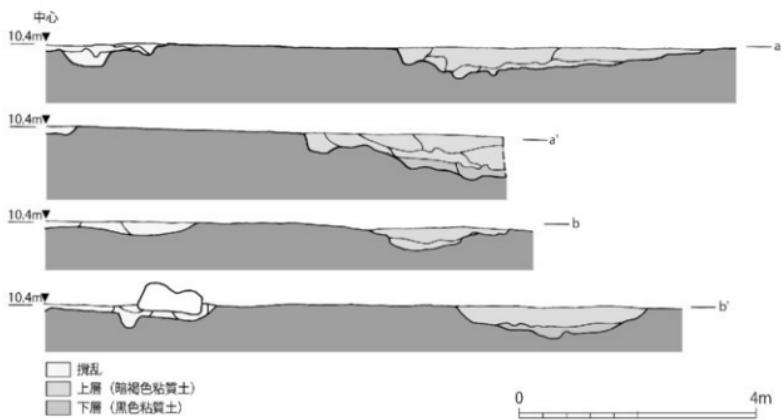
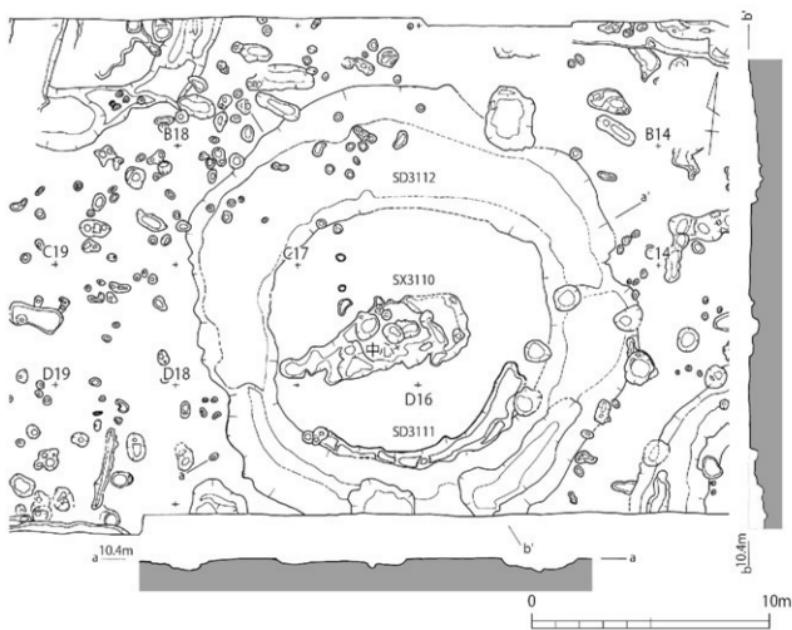
墳丘盛土はまったく残らないが、円形にめぐる周溝(SD3112)を確認した。よって1号墳は円墳である。周溝底内側の立ち上がりではかると、1号墳の墳丘径は12.5～13.8m。周溝の外径は17.2～18.9m。周溝は、南端部が調査区外にある以外、ほぼ全体を確認した。上幅は2.0～5.2m、下幅は0.5～3.0mあり、北側で広く、南側で狭い。深さは0.35～0.85mで、北側が浅く南側が深い。

周溝の埋土は大きく上下2層に分かれた。上層は暗褐色粘質土で、古代末から中世期の堆積層である。下層は黒色粘質土で部分的にしかみつからず、また、堆積時期を確定できる遺物に乏しかった。上下層からは、ともに1号墳にともなう須恵器・土師器や副葬品の一部が出土した。特に、周溝の西南部の下層からは須恵器蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・翫と、土師器高杯がまとまっていた(第12図、図版5)。

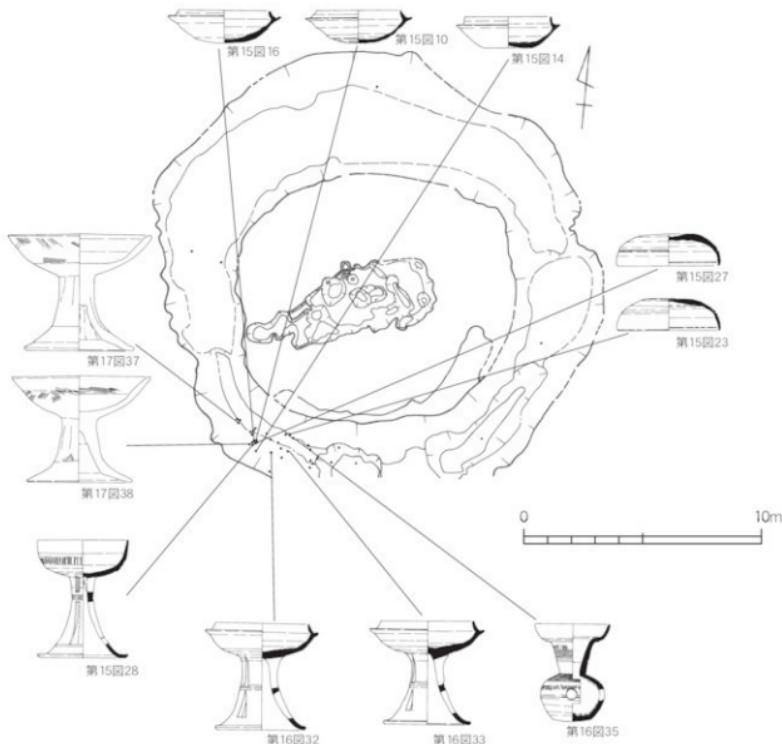
南側の周溝の内側に接して細い墳丘内溝(SD3111)がある。上幅0.4～1.3m、下幅0.2～0.9m、深さは0.15～0.3mである。埋土は黒色粘質土の1層である。周溝の埋土と重複しており、周溝埋没以前の溝とわかる。出土遺物はなかった。

2 横穴式石室 (第13図 図版3・5)

石室の構造と規模 1号墳墳丘のほぼ中央には南西～北東方向に長い土坑があった。横穴式石室にかかる遺構と考えて精査した結果、ほとんどが石室を破壊搅乱した土坑(SX3110)と判明した。土坑の上面には、最大107×103cmほどの凝灰質砂岩の石材があり、その表面には加工痕が確認された。ただし、調査の結果、これらの石材は搅乱土に包含されていることが確認され、石室石材が移動させられたもの一部と判明した。また、SX3110の北側には中世期のものと推定される大型土坑SK3113があつて、この中に大量の石室石材が投棄されていた。これらから判断すると、1号墳の横穴式石室、凝灰質砂岩の加工石材を側壁に積み上げ、大型の自然石を天井に架構した石室だったらしい。搅乱土から大量の玉砂利が発見されたので、石室床面は玉砂利敷きだったであろう。



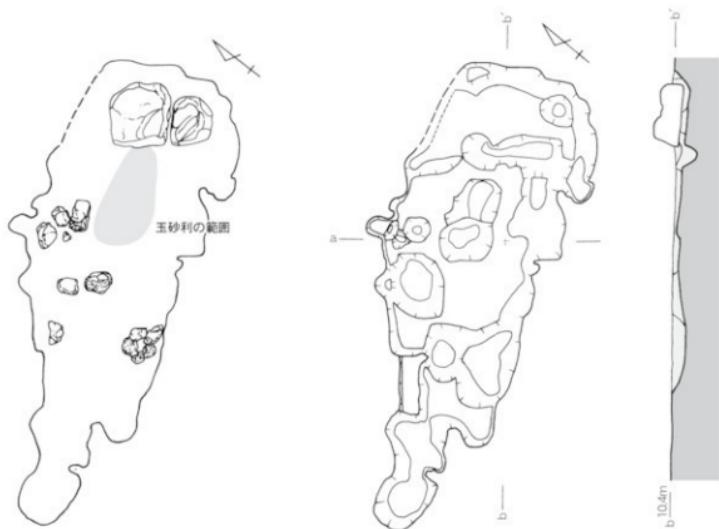
第11図 1号墳平面図(1:200)及び土層断面図(1:80)



第12図 1号墳周溝内遺物出土状況図 (平面図 1:200 土器 1:6)

土坑SX3110の東北部には、横穴式石室奥壁の抜取り痕と思われる土坑SX3174があり、さらに西北部には、横穴式石室の石室袖部から羨道部にかけての掘形がわずかに残存していた。これらから1号墳の横穴式石室主軸を推定すると、N-52°-Eとなる。土坑SX3174から袖部掘形までの距離は約3mであり、石室石材の厚み等を勘案しても玄室の長さはおよそこの数値に近いものであったと思われる。

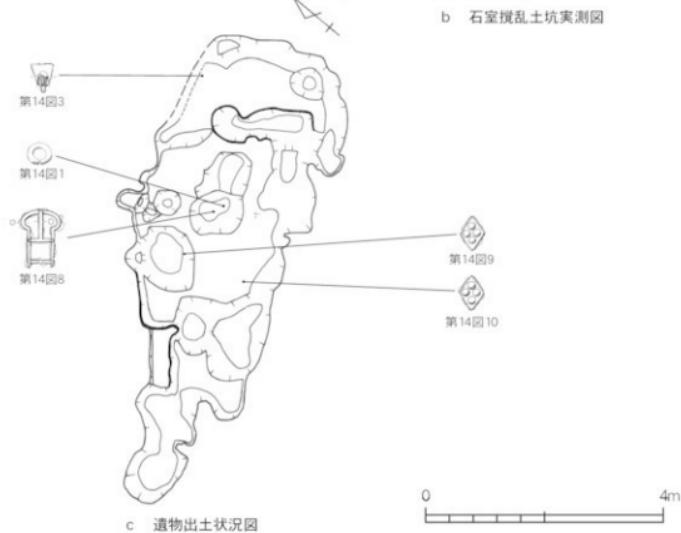
遺物の出土状況 横穴式石室搅乱土坑SX3110からは、銀環、鉄鎌、馬具などが出土したが、副葬位置をとどめるものはなく、散乱した状況であった。
(高橋)



a 石室石材出土状況

a 10m

b 石室搅乱土坑実測図



c 遺物出土状況図

第13図 1号墳横穴式石室関係実測図(平面図 1:80 遺物 1:6)

3 出土遺物

1号墳にともなう遺物には、装身具、武器、馬具と土器がある。その内訳を示し個別に記す。

装身具	馬 具
銀 環	1点
武 器	
金銅製鐔	1点(破片)
鐵 鎌	2点
須恵器	土師器
杯 身	16点
杯 蓋	11点
有蓋高杯蓋	1点
有蓋高杯	5点
無蓋高杯	1点
翫	2点

a 装身具

銀 環(第14図1 図版21) 銅芯に銀薄板を巻き付けた銀環が1点出土した。やや大型で、外径は32×29mm、わずかに左右径が大きい。環体の断面は円形をしており、7.3×7.0mmの太さである。開き部が銅鍍で覆われているため端面の詳細を観察できないが、X線写真から判断すると端面はややふくらむようである(村上隆分類の「端面形状b」(村上2001))。現重量15.7g。SX3110出土。

金銅製鐔(第14図2 図版21) 金銅製鐔の小破片が1点ある。長辺で2cmほどしかないが、外周は両面に縁があり断面T字状である。表面の鍍金がよく残っている。C18グリッド包含層出土。

b 武 器

鐵 鎌(第14図3・4 図版21) 逆台形をした平根方頭の鉄鎌が2点ある。3は、刃幅・全長とも28mm、基部に長さ8mmほどの茎がある。鎌身部の両面には、剣先形の木製根挾の痕跡がある。石室搅乱土坑SX3110出土。

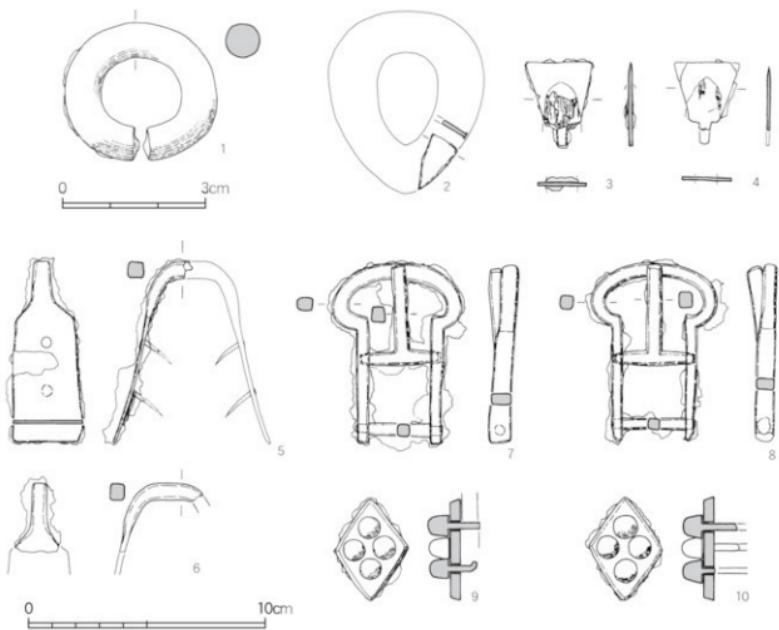
4も同形で、復元全長30mm、復元刃幅27mmである。やはり、鎌身部に木製根挾の痕跡をとどめる。周溝SD3112出土。

c 馬 具

鉄製鎧吊金具(第14図5・6 図版21) 木製壺鐘の吊手部に取り付けられた吊金具片が2点ある。5は、ほぼ1/2が残っており、長さ6cm・幅2.5~3cmの矩形板状の脚部に2本の鉄釘が打たれていたことがわかる。復元すると、全高7.5cm、幅5.5cmほどの大きさとなる。

6は、かなり変形しているが同様の形状をしており、かつ5と接合しないので、一対をなしていたものであろう。5・6ともD17グリッド包含層出土。

鉄製鎧軸用鉸具(第14図7・8 図版21) 同形の大型鉸具が2点ある。凸字形の輪金にT字形の刺金



第14図 1号墳装身具・出土金属器 (1 = 1:1 2~10 = 1:2)

を挟み込み、基部に渡した鉄棒をかしめて固定されている。刺金の基部両端は輪金の中におさまっている。7 の全長7.6cm、幅5.6cm。8 の全長7.5cm、幅5.4cm。7 はC15区包含層、8 は石室搅乱土坑SX3110出土。

鉄製菱形飾金具(第14図9・10 図版21) 菱形の飾金具が2点ある。ともに4.2×3cmの大きさで4本の鉄鎖が打たれている。9は鎖の軸が残り、裏面に当てられた革帶(2枚分か)の厚さが8mmほどであったことが推測できる。2点とも金銅装や銀装の痕跡はない。9・10とも石室搅乱土坑SX3110出土。

(花谷)

d 須恵器

蓋 杯(第15図1~27 図版21・22) 扁球形をした通有の蓋杯。杯身の受部径は12.5~14.1cm、立ち上がり高は0.7~1.3cmである。立ち上がりは多くが直線的に内傾するが、内湾するもの(5)や直立するもの(14)もある。底部は基本的に1/2ほどの範囲をヘラケズリで調整されるが、底部中央にヘラケズリが及ばないもの(2・13)がある。

杯蓋は、口径12.2~13.2cm。口縁部と天井部との境には、2条の凹線をめぐらせたものが多い。なかに片方の凹線が全周しないもの(18)や、凹線が1条のもの(17・19・21・24)がある。口縁端部の内面には凹線をめぐらせるもの(20・22・25~27)と、凹線を入れた後に先端を薄くするもの(17・21・23)、そして凹線をいれないもの(18・19・24)がある。天井部は基本的にヘラケズリ調整だが、24と27はそれがなくヘラ切りのままである。

無蓋高杯(第15図28 図版23) やや扁平な半球形の杯部に高い脚部がついた高杯。杯部外面には櫛描き列点文がめぐる。脚部には2段3方向に長方形の透かしがある。さらに、上下の透かしの間に2条、下段の透かしの下に1条の凹線がはいる。

有蓋高杯(第15図29~31・第16図32~34 図版23) 蓋杯にやや高い脚部がついた形の高杯。蓋(29)は杯蓋とほぼ同様の形態だが、天井部と口縁部とがやや明瞭に屈折しており、その境にある2条の凹線で区切られた突帯も明瞭である。天井部のヘラケズリ調整が丁寧な点でも杯蓋とは区別できる。口縁端部内面には浅い凹線がめぐる。

有蓋高杯も脚部に2段3方向の透かしがあるが、透かしの形は上下とも三角形(31~33)と、上段が三角形で下段が長方形(30・34)の2種類がある。透かしの間には2条の凹線がある。脚部は30が高さ10.3cmで最も高く、それ以外は9cm前後でほぼ同じ高さである。

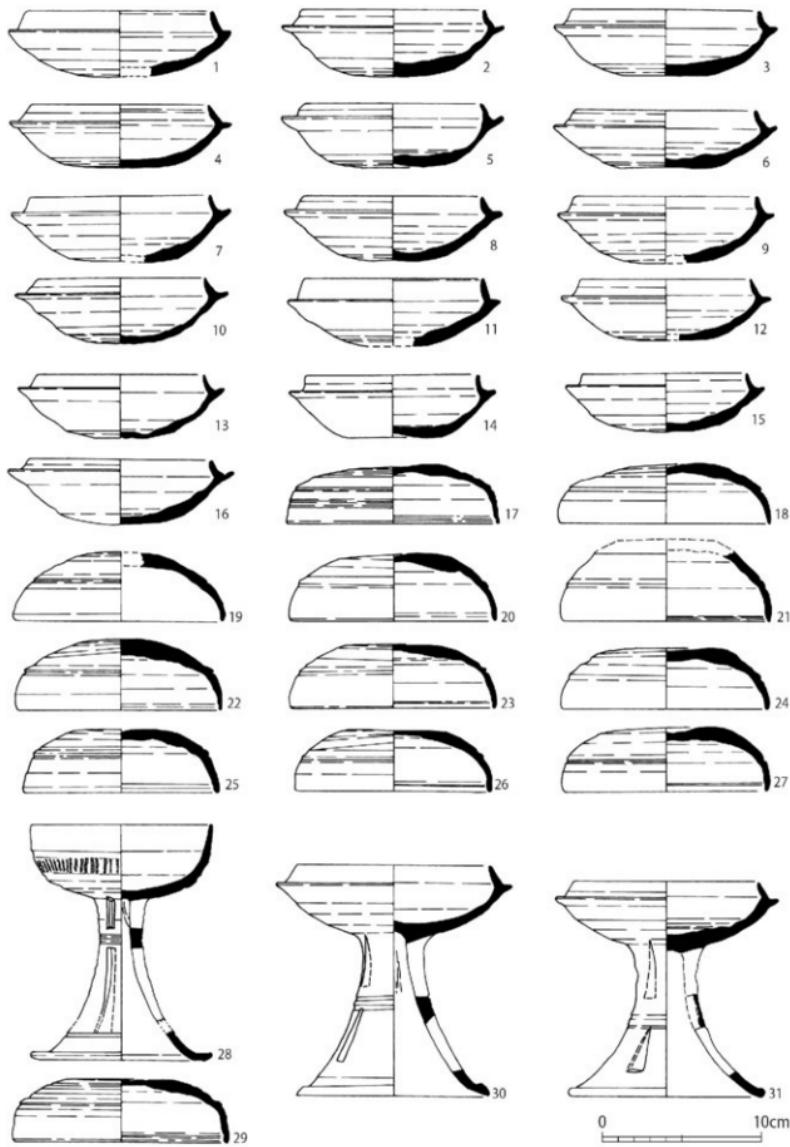
頸(第16図35・36 図版24) 口頸部が高くななく、かつあまり開かない頸。35の口縁部はやや内湾する。35・36とも頸部には波状文と凹線1条があり、体部には2条の凹線と櫛描き列点文がある。35の肩部にはカキ目調整がある。

e 土師器

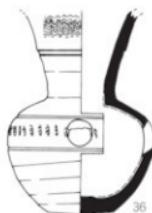
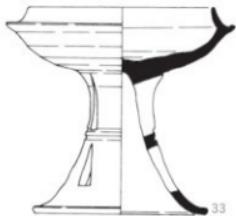
高 杯(第17図37~45 図版24) わずかに屈折して大きく開いた杯部をもつもの(37~39・41)と、内湾するやや小ぶりな杯部をもつもの(42~45)がある。40は前者の脚部であろう。後者のほうの器高がやや小さい。いずれの個体も、杯部の内外面と脚部の外面に赤色顔料が塗られている。

39と40は別個体だが、39の脚柱部内面には脚部の剥離痕跡があり、40は同じ部位で剥離した脚部である。おそらく、この2点のように杯部と脚部を別々に製作し、両者を接合したと推測される。

(高橋)

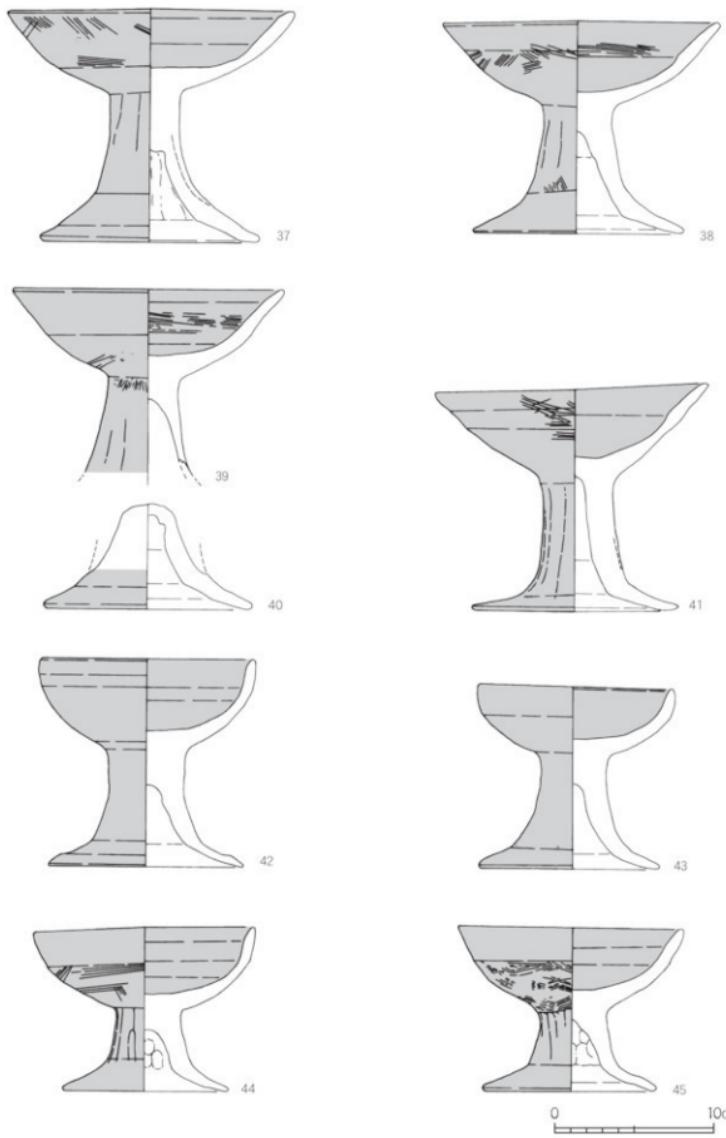


第15図 1号墳周溝出土須恵器 1 (1 : 3)



0 10cm

第16図 1号墳周溝出土須恵器 2 (1:3)



第17図 1号墳周溝出土土師器 (1:3)

II 築山2号墳

築山2号墳は3B区の東端に位置する。調査区の制約で調査できたのは古墳のおよそ半分だけで、南側半分は調査区外にある。2号墳は地表下約0.7m、標高10.2mで確認された。

1 墳丘と周溝(第18・19図 図版6～8)

2号墳も墳丘盛土は残っておらず、円形の周溝(SD3122)などを確認したにとどまるが、横穴式石室を内蔵していたと推定できる円墳である。周溝底の内側の立ち上がりで計測して、その墳丘径は11.8～12.2m。周溝の外径は13.6～16.2m。

周溝SD3122は、上幅2.3～4.3m、下幅0.3～2.0m、深さは約0.6m。埋土は大きくは上下2層にわかれ。上層は明黑色粘質土であり、出土遺物から古代から中世期の堆積層と判断した。下層は黒色粘質土で、1号墳とはちがって周溝内の全体でその堆積を確認したが、堆積時期を確定できる遺物に乏しかった。

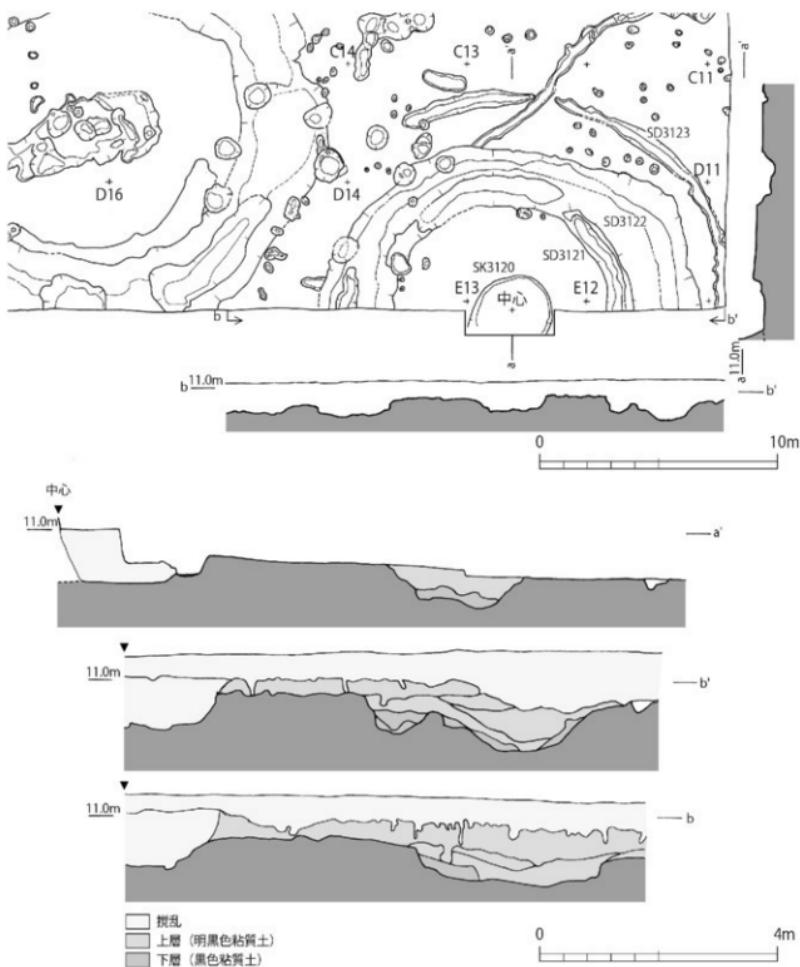
周溝西側の下層上面からは須恵器蓋杯・有蓋高杯が出土している(第19図 図版26～29)。須恵器は3群(A～Cグループ)に分かれ、Aグループは杯身8点・杯蓋9点、Bグループは有蓋高杯9点、Cグループは杯身4点・杯蓋4点と器種ごとに分かれていることと、9点出土している有蓋高杯のうち、1点が正位の状態で出土していることから、意図的に周溝内へ置いたものと考えられる。

東側の周溝の内側に接して細い墳丘内溝(SD3121)がある。上幅0.8～1.2m、下幅0.2～0.4m、深さは約0.6mである。埋土は黒色粘質土の1層である。周溝の埋土と重複しており、周溝埋没以前の溝とわかる。出土遺物はなかった。

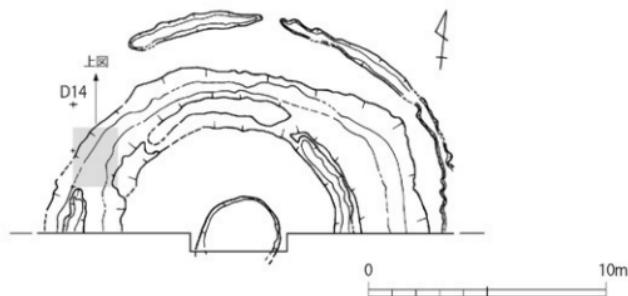
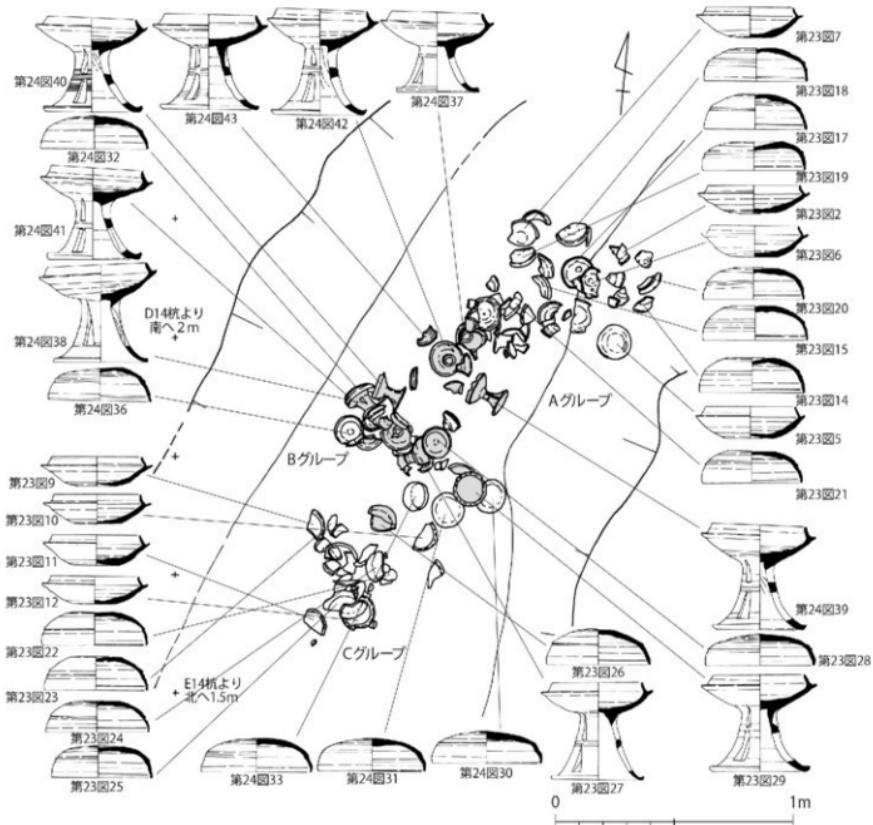
周溝の北側に周溝と同心円を描く区画溝(SD3123)がある。上幅0.4～0.7m、下幅0.2～0.4m、深さは5～20cmである。埋土は黒褐色粘質土の1層である。出土遺物はなかった。

2 横穴式石室(第20図)

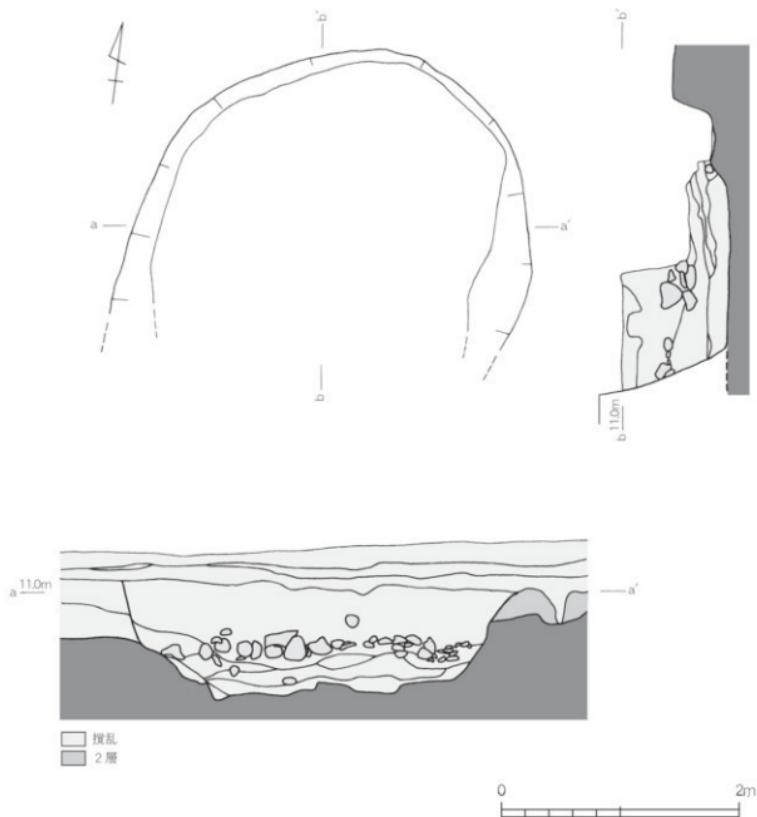
石室の構造と規模 2号墳墳丘のほぼ中央には土抗(SK3120)があった。この土抗は2層の遺物包含層から掘られているが、加工痕のある凝灰質砂岩の石材が搅乱土に包含されていることと、玉類や馬具といった古墳の副葬品が出土していることより、石室を破壊搅乱した土抗と考えられる。東西(長径)2m、南北(短径)2m、深さ2m。(高橋)



第18図 2号墳平面図(1:200)及び土層断面図(1:80)



第19図 2号埴周溝出土遺物状況図 (上段1:20 下段1:200 土器1:6)



第20図 SK3120平面図・土層断面図(1:40)

3 出土遺物

2号墳の副葬品（装身具・武器・馬具）は、すべて土坑SK3120から出土した。須恵器は周溝出土である。その内訳を示す¹⁾。

装身具

金 環	1点	瑪瑙丸玉	2点
金銅製楕円形環	1点	ガラス棗玉	2点
金銅製榧子玉	2点以上	ガラス丸玉	38点
琥珀棗玉	2点	ガラス小玉	40点
馬 具	須恵器		
杏葉片？	2点	杯身	12点以上
辻金具	2点以上	杯蓋	13点以上
爪形飾金具	4点	有蓋高杯	9点以上
鉸 具	1点		
武 器			
柄巻銀線断片	多数		
鉄 鎌	15点以上		

a 装身具

金 環（第21図1 図版25） 銅芯に金薄板を卷いた中実の金環。銅錆もなく保存状況は良好である。開き部はわずかにふくらんでいる（村上降分類「端面形状b」）が、小口に円形の金薄板をあてているようにみえる。端面には金薄板のしわがあるので、端面の作りは村上分類IとIIの中間的なものであろうか（村上2001）。直径35.6×32.1mmでやや左右径が大きい。左右内径は19.4mm。断面は8.5×8.2mmでほぼ円形である。現重量33.1g。

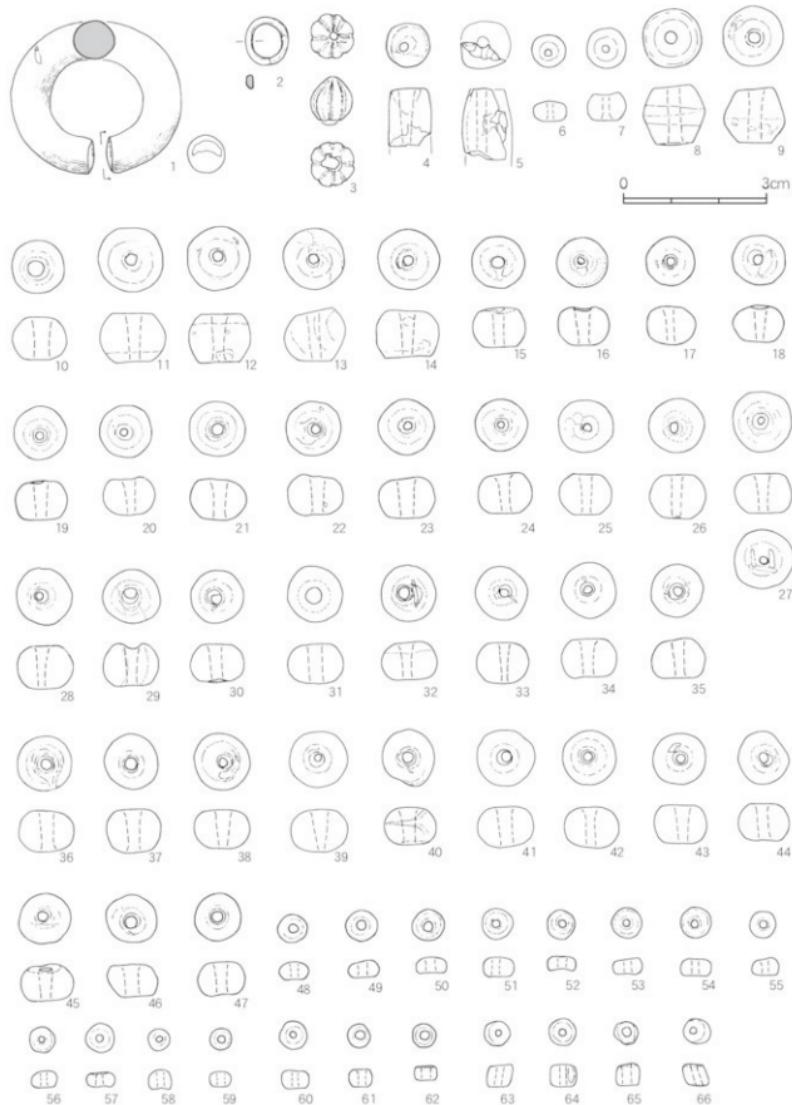
金銅製楕円形環（第21図2） 出土時点では大刀装具の足金具断片と推測したが、接合すると金屑の残る外周部分に欠損がみえないので、装身具の一種として報告する。銅芯に鍍金したものである。長径10mm×短径9mm、現重量0.26g。

金銅製榧子玉（第21図3 図版25） 楫子玉形の金銅空玉である。ほぼ形をとどめる1点を図示した。寸詰まりの紡錘形でタテ方向に9条の筋が入る。一端はわずかに欠損している。現状で、高さ9.1mm、直径9.6～9.8mm。この個体以外に小さい断片があるので、もとは複数あったらしい。

琥珀棗玉（第21図4・5） 2点出土したが、いずれも欠損がある。4は円柱状、5はやや紡錘形をしている。

瑪瑙丸玉（第21図6・7） 2点ある。いずれも明るいオレンジ色をしている。7は両面が浅くくぼんでいる。

ガラス棗玉（第21図8・9） 2点ある。ともに紺色。8は、側面のなかほどにゆるい稜線があつて算盤玉状である。8には明瞭な巻き付け痕跡がある。大賀分類BA型。



第21図 2号墳出土装身具1(1:1)

ガラス丸玉（第21図10～47） 透明な青緑色1点と紺色37点がある。青緑色丸玉は、孔が大きい。紺色の丸玉は、11～14の4点が上下面とも平坦で高さもやや大きい。大賀分類B A型（13は未設定）。15は巻き付け痕跡があるが、下面が平坦になっている。16～47は、上下とも平坦面がない。40は、引き伸ばされたガラスが側面に付着して正円形になっていない。15～47は、気泡が比較的散在する。大賀分類B W III型。

ガラス小玉（第21図48～66 第22図1～21） 小玉はすべて引き伸ばし製作による。

48～58は、透明な淡紺色の小玉。ソーダ石灰ガラス。築山分類B類（松本編1999、54～55頁）、大賀分類B D III型。

59～61は、紺色透明な小玉。ソーダ石灰ガラス。大賀分類B D III型。60・61はマンガンを含有するタイプである。

62～66は、62以外は最大厚が4.4mm以上あってやや柱状をした小玉。透明な紺色である。いずれもカリガラスと推定される。大賀分類B D I型。

第22図1～21は、すべてアルミソーダ石灰ガラスで、大賀分類B D II型。1～4は濃青色、5は緑味の強い淡青色、6～9は不透明な黄緑色、10～21は不透明な黄色。

b 武 器

柄巻銀線（図版25） 大刀本体と思しき鉄片はあるが、図化できるものはなかった。大刀装具の一部である銀線が出土した。すべて同じ作りで一本の大刀の柄間装具とみてよい²²。

扁平な三角形断面をした銀線で、幅1mm、厚さ1mmあり、頂部に1mmピッチで刻み目が入れてある。

鉄 鎌（第22図22～34 図版25） 鉄鎌はすべて断片となって出土した。破片数15点以上あるうちの、13点を図示した。いずれも長頸鎌である。

22は鎌身部が残る唯一例で、逆刺のない柳刃形ないし長三角形であろう。残存部分には刃は付けられていない。頸部断面は6×4mm。23～27は、頸部から矢柄部分の断片。関は棘状関である。矢箟と桜皮が残る。28～34は茎の断片。

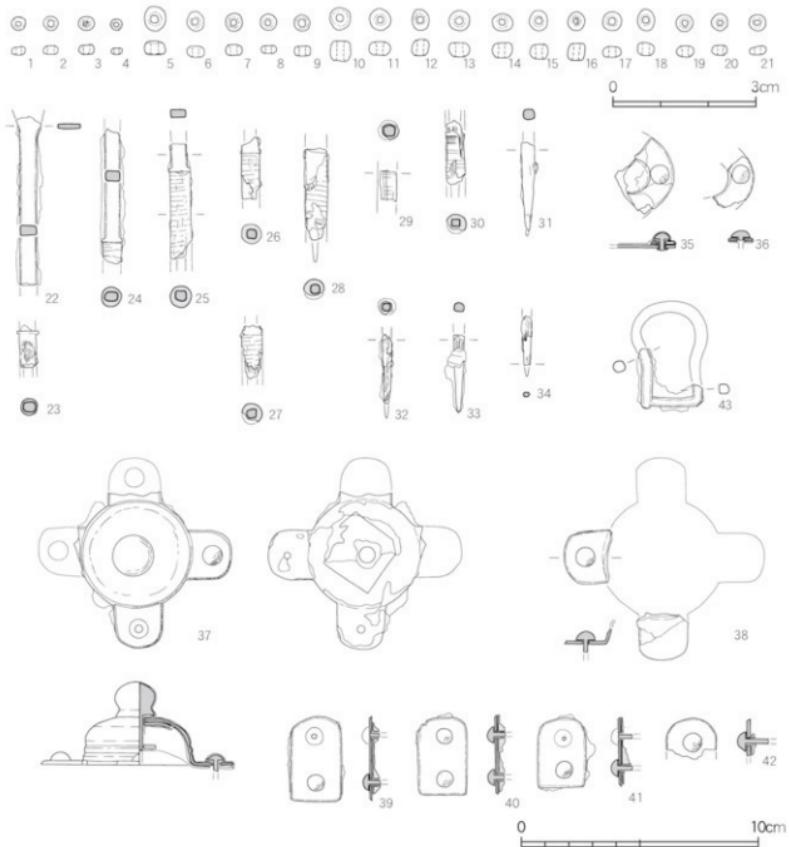
c 馬 具

馬具は、杏葉（あるいは鏡板）、辻金具、飾金具、鉢金具がある。飾金具3点とほぼ原形をとどめる辻金具1点以外は断片である（第22図35～43）。

杏葉片（第22図35・36 図版25） 半径2cmほどの円弧をえがく鉄地金銅張りの板状品がある。鉄地板と同形の幅1cmほどの鉄板を重ね、金銅板を巻いた後、頭部金銅装の鉄鋲でかしめてとめている。地板・紋様板とも厚さ1mmほどと薄い。36は地板を欠く。ともに花形容杏葉あるいは花形鏡板の破片か。

辻金具（第22図37・38 図版25） 37は鉄地金銅張りの辻金具。2脚を欠くもののほぼ全容がうかがえる。半球形の鉢部は、側面に2条の四線をめぐらせる。頂部には宝珠形の鉢が打たれており、鉢部の内面に突き出した鉢の軸には幅25mmの革帯が留められている。四方の脚部には各々鉄鋲1本が打たれている。鋲頭は銀張りあるいは金銅張りと思われるが、鉄錆におおわれて確認できない。脚部の裏面には革錆が付着する。全高3.5cm、鉢部直径4.7cm、復元さしわたし径8cm。これと同形と推定される辻金具脚部が2点ある（38）。

爪形飾金具（第22図39～42 図版25） 爪形の飾金具は、いずれも鉄地金銅張りで、頭部を金銅張り



第22図 2号墳出土装身具2・金属器 (1~21=1:1 22~42=1:2)

した鉄鋤2本が打たれる。39が長さ3.6cm・幅2.1cm、40が長さ3.3cm・幅2.2cm、41が長さ2.9cm・幅1.95cm。42は飾金具あるいは辻金具脚部の破片であろう。

鉄製鍔具(第22図43 図版25) 43は、鉄製鍔具の輪金。刺金のない型式である。

(花谷)

d 須恵器

第23図(1~8・13~21)はAグループ、第23図(9~12・22~25)はCグループ、第23図(26~29)と、第24図(30~43)はBグループである。

蓋杯(第23図1~25 図版26~28) 扁球形をした通有の蓋杯。杯身の受部径は13.4~14.2cm、立ち上がり高は0.9~1.2cmである。立ち上がりは多くが端部まで直線的に内傾するが、やや直立するもの(1・2・10・12)もある。底部は基本的に1/2ほどの範囲をヘラケズリ調整している。

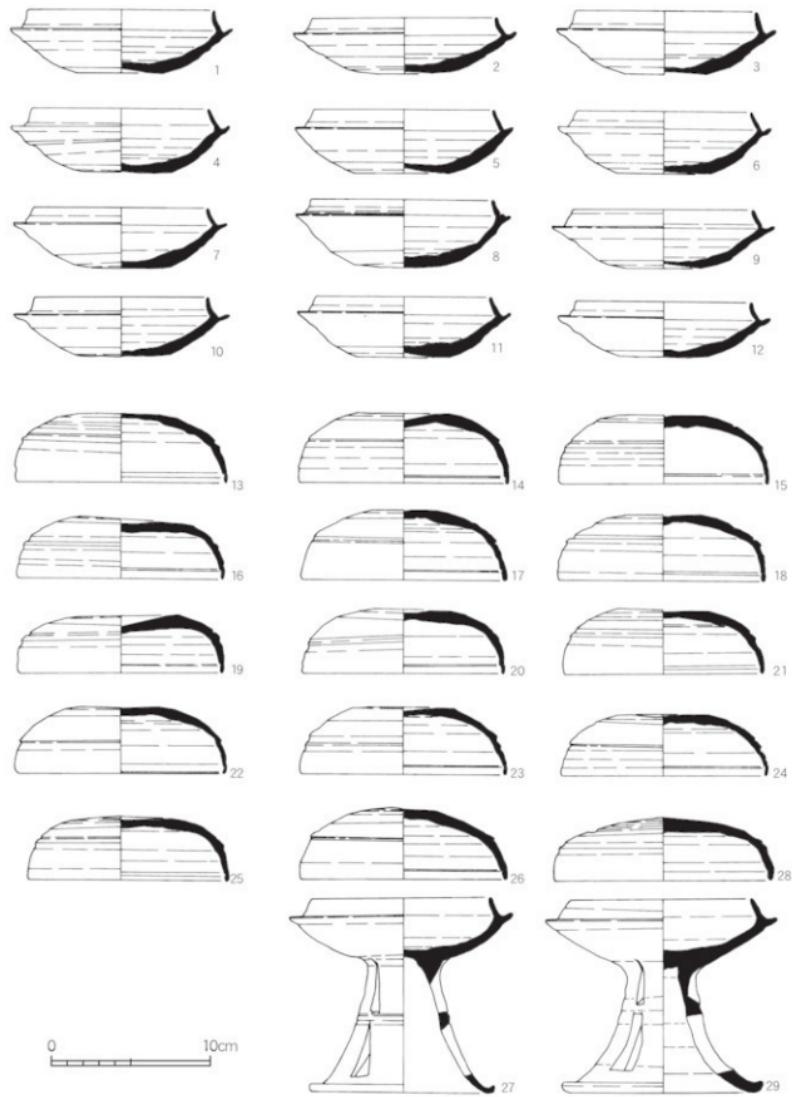
杯蓋は、口径12.4~13.2cm。口縁部と天井部との境には、2条の凹線をめぐらせたものが多い。なかに片方の凹線が全周しないもの(24・25)や、凹線が1条のもの(14・17・22)がある。口縁端部の内面には凹線をめぐらせるもの(18・21・25)と、凹線を入れた後に先端を薄くするもの(13・17・22・23)、そして端部の器壁を薄くして段状にするもの(14~16・19・20・24)がある。天井部はいずれもヘラケズリ調整である。

有蓋高杯(第23図26~29・第24図30~43 図版28・29) やや直線的な杯底部に、太い脚部がついた高杯。第23図の(26・27)と(28・29)は、焼成時の有蓋高杯と蓋のセット関係が判明したものである。26・27のセットは、他の土器と比べ明らかに焼成不良であり、28・29のセットは、有蓋高杯に蓋を載せると灰のかぶり方や、歪みの位置が一致する。

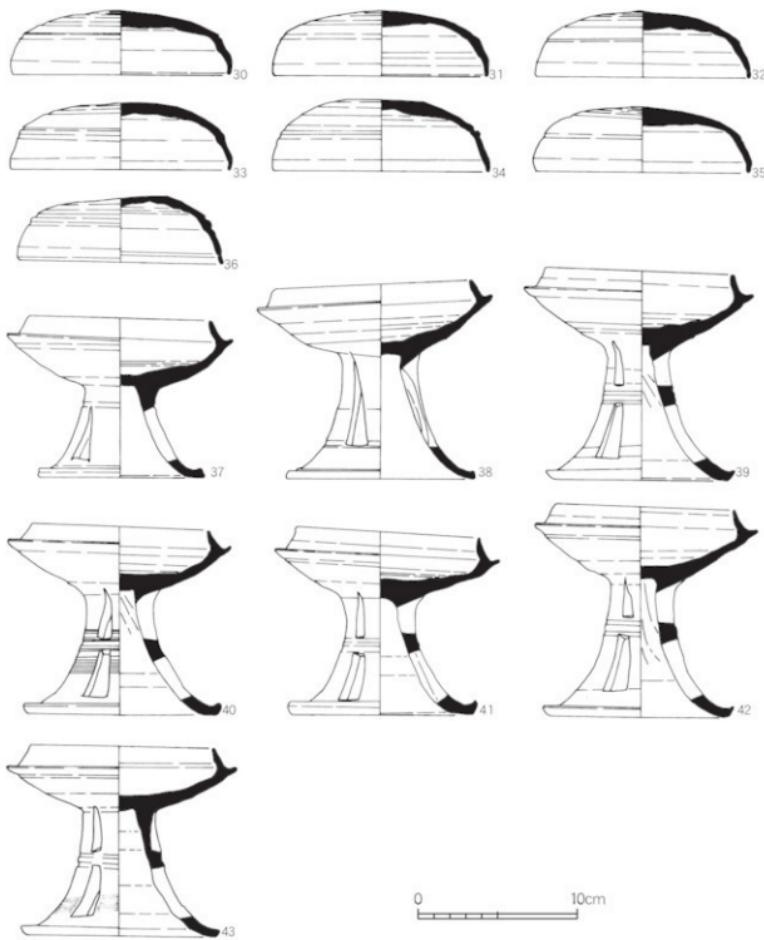
蓋(26・28・30~36)と杯蓋の形態を比べると、天井部は扁平で、天井部と口縁部とが明瞭に屈曲しており、その境の突帯はやや不明瞭といった違いがあるので明瞭に区別できる。口径は12.7~13.8cm。口縁部と天井部の境には2条の凹線をめぐらせたもの(33・34・36)や、凹線が1条のもの(26・28・30~32・35)がある。口縁端部の内面には凹線をめぐらせるもの(26・36)と、端部の器壁を薄くして段状にするもの(33・34)、そして凹線をいれないもの(28・30~32・35)とがある。天井部のヘラケズリ調整は丁寧である。2号墳の典型的な有蓋高杯の蓋は第24図30~33である。天井部は平たく、天井部と口縁部が明確に屈曲し、その境の突帯はやや不明瞭といったように、杯蓋とは明確な器形差が認められる。

有蓋高杯の脚部の透かしには1段3方向のもの(37・38)と、2段3方向のもの(27・29・39~43)とがある。1段3方向の透かしの形は三角形で、37は透かしの上に1条、38は透かしの下に1条凹線が入る。2段3方向の透かしの形は上下とも三角形(27・37・38)と、上段が三角形で下段が長方形(29・39~43)の2種類あり、29以外は透かしの間に2条の凹線が入る。脚部は37が高さ5.8cmで最も低く、それ以外は8cm前後ではほぼ同じ高さである。

(高橋)



第23図 2号墳周溝出土須惠器 1 (1:3)



第24図 2号墳周溝出土須恵器2(1:3)

III 築山3号墳

築山3号墳は3B区のほぼ中央に位置し、東側15mには1号墳、西側4mには4号墳がある。3号墳は地表下約0.6m、標高10.4mで確認された。

1 墳丘と周溝(第25・27図 図版9~11)

3号墳も墳丘盛土はまったく残っておらず、円形の周溝(SD3188)などを確認したにとどまるが、横穴式を内蔵していたと推定できる円墳である。周溝底の内側の立ち上がりで計測して、その墳丘径は15.6~16.2m。周溝の外径は19.2~19.4m。

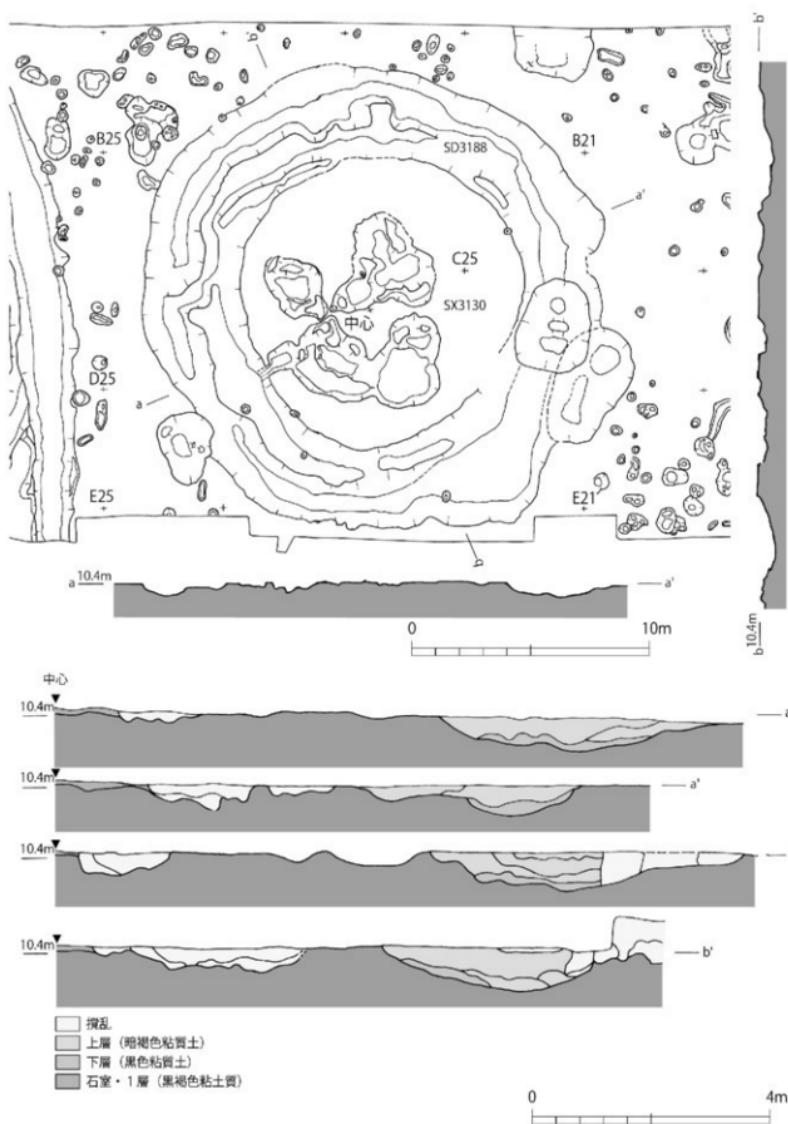
周溝SD3188は、全体を確認した。上幅3~5.3m、下幅0.2~3.0m、深さは0.4~0.85mで南西側だけ浅い。埋土は大きくは上下2層にわかれる。上層は暗褐色粘質土であり、出土遺物から古代から中世期の堆積層と判断した。下層は黒色粘質土で部分的にしか見つからず、また、堆積時期を確定できる遺物に乏しかった。上下層からは、ともに3号墳にともなう須恵器蓋杯・甌が出土した(第27図、図版30・31)。

2 横穴式石室(第26図 図版10・11)

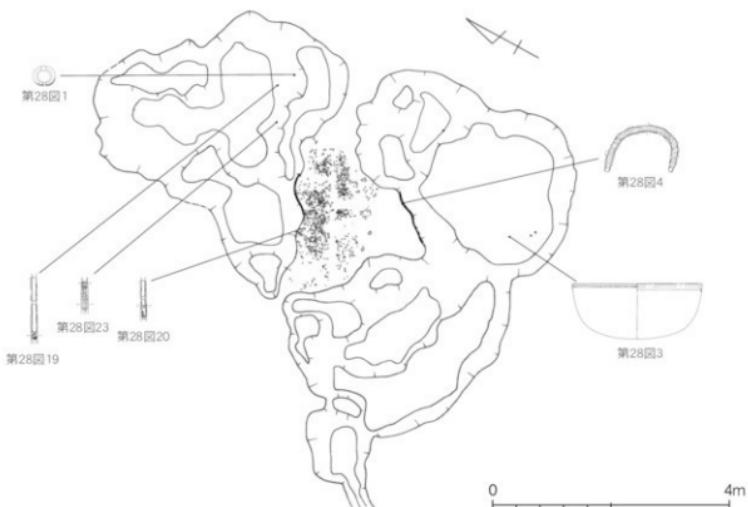
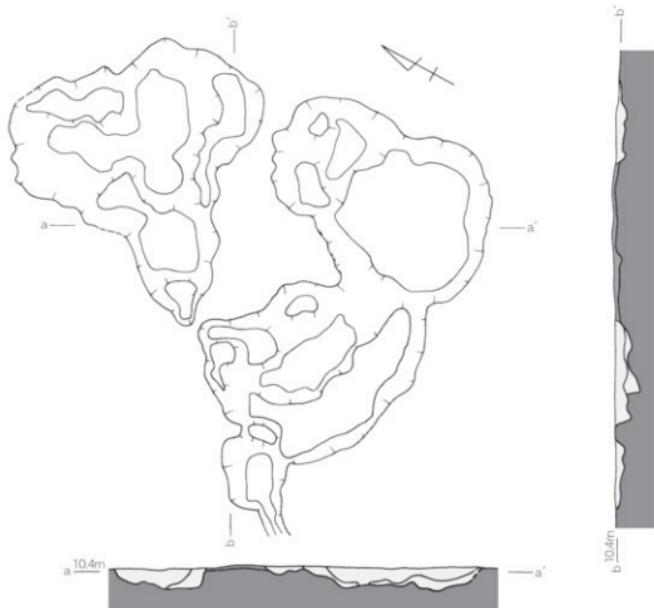
石室の構造と規模 3号墳墳丘のほぼ中央には南西一北東方向に長い土抗があった。横穴式石室にかかる遺構と考えて精査した結果、ほとんどが石室を破壊搅乱した土抗(SX3130)と判明した。土抗内からは凝灰質砂岩片が出土している。また、周溝西側には大型の自然石もあるので、3号墳の横穴式石室は、1号墳と同じように、凝灰質砂岩を側壁に積み上げ、大型の自然石を天井に架構した石室であった可能性がある。石室埋土の1層は縮まった黒褐色粘質土であり、大量の玉砂利が含まれているので、石室床面は玉砂利敷きだったであろう。

石室床面の北側と南側には、ほぼ直線を描く石室掘形が残存していた。これを側壁の抜き取り痕とし、3号墳の横穴式石室主軸を推定すると、N-37°-Eとなる。

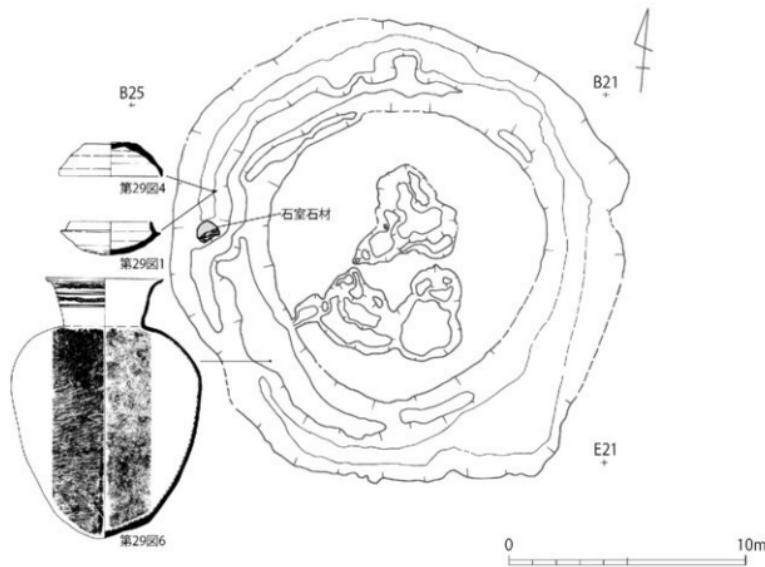
遺物の出土状況 横穴式石室搅乱土抗SX3130からは、銀環、銅鏡などが出土したが、副葬位置をとめるものはなく、散乱した状況であった。(高橋)



第25図 3号填平面図 (1:200) 及び土層断面図 (1:80)



第26図 3号墳石室平面図(1:80)及び遺物出土状況図(平面図1:80 遺物1:6)

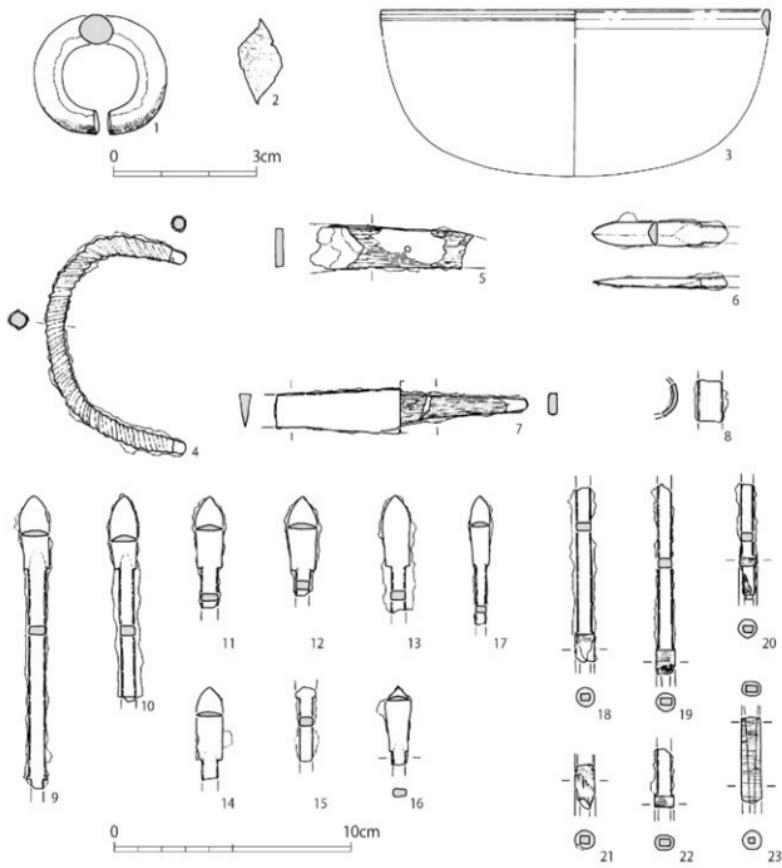


第27図 3号墳周溝遺物出土状況図 (平面図 1:200 第29図1・4=1:6 第29図6=1:20)

3 出土遺物

3号墳の副葬品は石室痕跡SX3130のほか、周囲の搅乱土坑から出土した。数は少ない。

装身具		工 具	
銀 環	1点	鋤	1点
容 器		刀 子	1点
銅 鉢		その他	
		菱形金薄板	1点
武 器		須恵器	
抜刀頭	1点	杯 身	1点以上
大 刀	1点(破片)	杯 蓋	4点以上
鐵 鎌	18点(破片)	甕	1点



第28図 3号墳出土装身具・金属器 (1・2=1:1 3~23=1:2)

a 装身具

銀 環 (第28図1 図版30) 直径28×25mmの銅芯銀箔巻き銀環。外周を銅錫が厚くおおっているが保存状態は良好である。開き部も錫におおわれるため、端面の銀板処理手法は観察できなかつたが、X線透過写真によると、端面にはわずかにふくらみがある(村上分類「端面形状b」)。環体の断面はわずかに橢円形で直径5.9×7.1mmである。現重量12.1g。土抗SX3130出土。

b 容 器

銅 錠 (第28図3 図版30) 残存長50.8mmの口縁部の破片が1点出土した。体部の破片は出土しな

かった。口縁端部は内面側が肥厚され、外面には3条の細い沈線がめぐっている。復元口径は16.4cm、体部の厚さは0.4mm。土坑SX3130出土。

島根県内の銅鏡出土は4例目である^③。本例は、県内出土例では最も口径が大きい大型品であり、口径や口縁端部外面の沈線は、埼玉県埼玉將軍塚古墳出土例[無台鏡A I a(毛利光1978)、丸底鏡Be 1(毛利光2005)]に近似する^④。

c 武器

振り環頭(第28図4 図版30) 振りを入れた鉄芯に銀箔を巻き付けた鉄地銀張りの半環形の大刀装具である。銀箔の合せ目は内側にある。柄頭に打ち込まれる両端部には銀箔が巻かれておらず、木質ないし鹿角質の付着物がある。長さ(高さ)9.2cm、幅5.8cm、直径8mm。

振り環頭は、島根県内では、今市大念寺古墳(野津1924、現存せず)と上塩冶築山古墳(松本編1999)に次いで3例目である。

これにともなうのか確証はないが、大刀茎の破片が1点ある(5)。

鉄 鏃(第28図9～23 図版30) 破片18点が出土したうちの、15点を図示した。

9～14は直角鎌身闊をもつ長三角形長頭鎌である。9は頭部から先を残す唯一例である。棘状闊で、片丸造りの鎌身部は長さ3cm、頭部長は8.8cm、現存重量18.5g。16は鎌身部がやや圭頭形に近く、17は細身の長三角形である。ともに頭部がやや細い。18～23は、頭部から茎部にかけての破片で、矢柄が残っている。

d 工 具

鏸(第28図6 図版30) 弱いながらも刃部の反りが認められるので、鏸とした。刃部の断面は三角形である。刃部長4.5cm、刃部幅1cm。

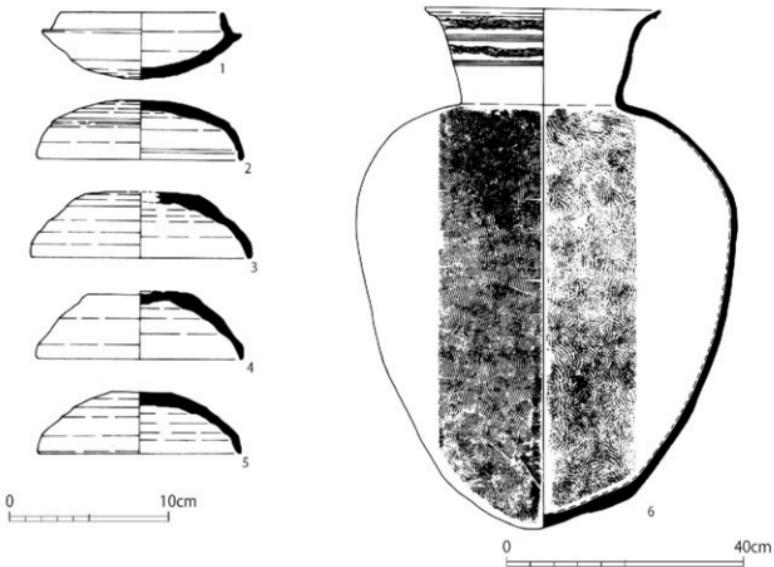
刀 子(第28図7・8 図版30) 切先を欠損する。現存長10.7cm、茎の長さ5.3cm。これにともなう柄縁の鉄製金具がある(8)。

e その他

菱形金薄板(第28図2) 菱形(ないし木葉形)をした金薄板の切金である。対角線長で18.0mm×10.0mmの大きさで、厚さは0.1mm、重さ0.04g。孔などはない。

用途は不明だが、2007年10月に大韓民国扶余の王興寺塔跡から発見された舍利莊嚴具(西暦577年埋納)のなかに、蓮弁形の雲母箔を貼りあわせた蓮華形装飾品があり、その雲母箔の間には菱形をした金薄板の切金が挟み込まれていた。あるいは、そのような装飾品の部品なのかもしれない。

(花谷)



第29図 3号墳周溝出土須恵器 (1~5=1:3、6=1:8)

f 須恵器

第29図2～4は周溝出土、5は石室出土の杯蓋である。

蓋 杯(第29図1～5 図版30) 通有の蓋杯である。杯身の受部径は12.5cm、立ち上がり高は1.1cmである。立ち上がりはやや内傾している。底部は1/2ほどの範囲をヘラケズリで調整している。

杯蓋は、口径12.6～13.7cm。口縁部と天井部との境には、凹線が1条のもの(2)と凹線を入れないもの(3～5)がある。口縁端部の内面には凹線をめぐらせるもの(2)と凹線をいれないもの(3～5)がある。天井部はヘラケズリ調整をしているもの(2)と、それをしていないもの(4)がある

壺 (第29図6 図版31) 倒卵形をした壺。口径54cm。頸部の文様構成は上から波状文、2条の凹線、波状文、2条の凹線である。体部外面には、擬格子叩き痕、内面には同心円文あて具痕が残る。

(高橋)

IV 築山4号墳

築山4号墳は3B区のほぼ中央に位置し、東側4mには3号墳があるのに対し、西側からは古墳が見つかっていない。現時点で、築山古墳群の最西端に位置する。4号墳は、地表下約0.3~0.5mで確認された。標高は10.6mである。

1 墳丘と周溝(第30~34図 図版12~17)

墳丘盛土はまったく残らないが、円形にめぐる周溝(SD3153)と外周溝(SD3162)を確認した。よって4号墳は円墳である。周溝底内側の立ち上がりではかると、4号墳の墳丘径は21~21.7m。周溝の外径は23.5~23.9m。外周溝の外径は32m。

周溝は、南端部が一部調査区外にある以外、ほぼ全体を確認した。上幅は1.4~3m、下幅は0.2~1mである。深さは0.6~1.2mで、一定であった。

周溝の埋土は大きく上下2層に分かれた。上層は暗褐色粘質土で、古代末から中世期の堆積層である。下層は黒色粘質土で、堆積時期を確定できる遺物に乏しかった。下層は2号墳と同じく周溝全体で確認できた。上層出土の古代末から中世の土器は、小片のため図化できなかった。図化できたのは、古墳時代の須恵器と土師器である。

周溝西側の出土地Aからは、須恵器の蓋杯、有蓋高杯、無蓋高杯、趣、長頸壺、堤瓶、甕。土師器は高杯、短頸壺が出土した(第31・32図)。周溝北側の出土地Bからは、須恵器の脚付椀、壺、甕が出土し(第31・33図)、同じく北側の出土地Cからは、須恵器の堤瓶、平瓶、壺が出土した(第31・34図)。しかし、いずれの須恵器・土師器も、出土状態から全て流れ込みと判断した。

外周溝は、南北端が調査区外にある以外、ほぼ全体を確認した。上幅は1.1~2.2m、下幅は0.3~1mあり、北側で広く、南側で狭い。深さは0.3~0.7mで、北側が浅く南側が深い。

外周溝の埋土は大きく上下2層に分かれた。上層は明黒色粘質土で、古代末~中世の堆積層である。下層は黒色粘質土で、西側外周溝全体で確認できたが、堆積時期を確定できる遺物に乏しかった。上層出土の古代末から中世の土器は、小片のため図化できなかった。下層からは、古墳時代の須恵器と土師器が出土した。

須恵器は蓋杯、土師器は高杯が出土した。図化できたのは須恵器の杯身のみである。いずれの土器も、出土状態から流れ込みと判断した。

周溝の内側に同心円状の溝SD3175とSD3176を確認した。いずれも周溝埋土の上層に掘り込まれており、後世のものと思われる。出土遺物はなかった。1・2号墳でいう内溝とは性格を異にする。

2 横穴式石室

石室の構造と規模(第35・36図 図版18・19) 4号墳墳丘のほぼ中央には南西—北東方向に長い土坑があった。横穴式石室にかかる遺構と考えて精査した結果、ほとんどが石室を破壊攢乱した土坑(SX3140)と判明した。

土坑(SX3140)の中央、やや北東よりで石室床面に敷かれた玉砂利が出土した。残存していた範囲は縦1.7m×横0.65m、厚みは約0.15mである。その下、約10cmの厚さで整地土(明褐色粘質土)があり、地山となる。これらのことから石室の築造方法は、一段掘りくぼめた墓坑の中に石室石材を据え、その内側に整地土を敷いた後に玉砂利をおき床とした、と推定される。

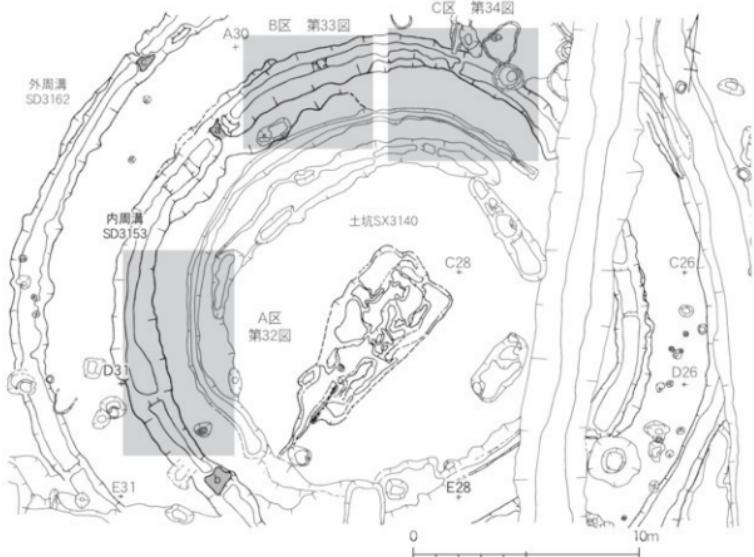
この玉砂利より北東側に、横穴式石室奥壁の抜取り痕と思われる土坑SX3177があり、北西側には側壁の抜取り痕と思われるSX3179がある。さらに南側には軸石の抜取り痕と思われるSX3178がある。

SX3177からSX3178までの距離は約6mであり、玄室の長さはおよそこの数値に近いものであったと思われる。

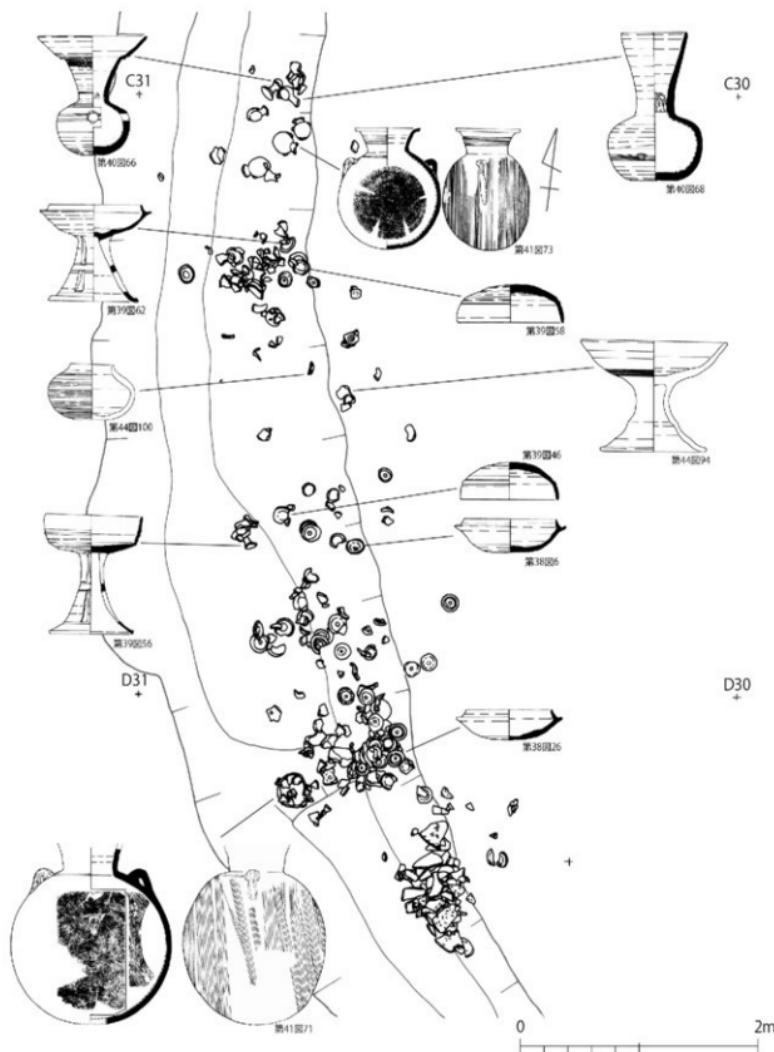
玄室の幅は、SX3179と玉砂利をはさんで反対側にある地山堀残し部分の高まりとの距離で推定することができる。この高まりが側壁の裏側にあるとすると、SX3179との距離が約4mとなり、石室石材の厚み等を勘案しても玄室の幅はおよそこの数値に近いものであったと思われる。

これらから4号墳の横穴式石室主軸を推定するとN-33°-Eとなる。

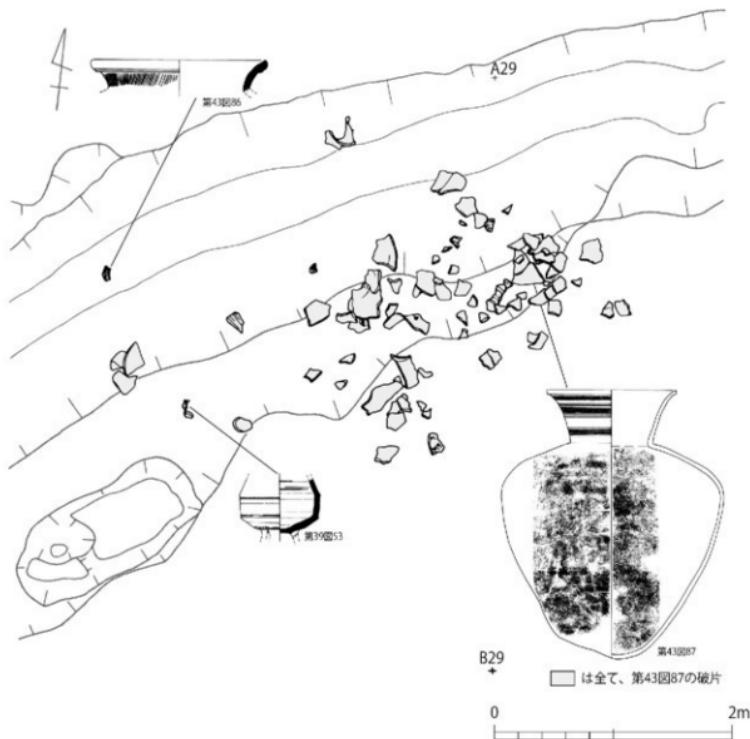
SX3178の南西側にも地山が掘り残された高まりがある。位置からして、この西側に羨道があったものと考える。



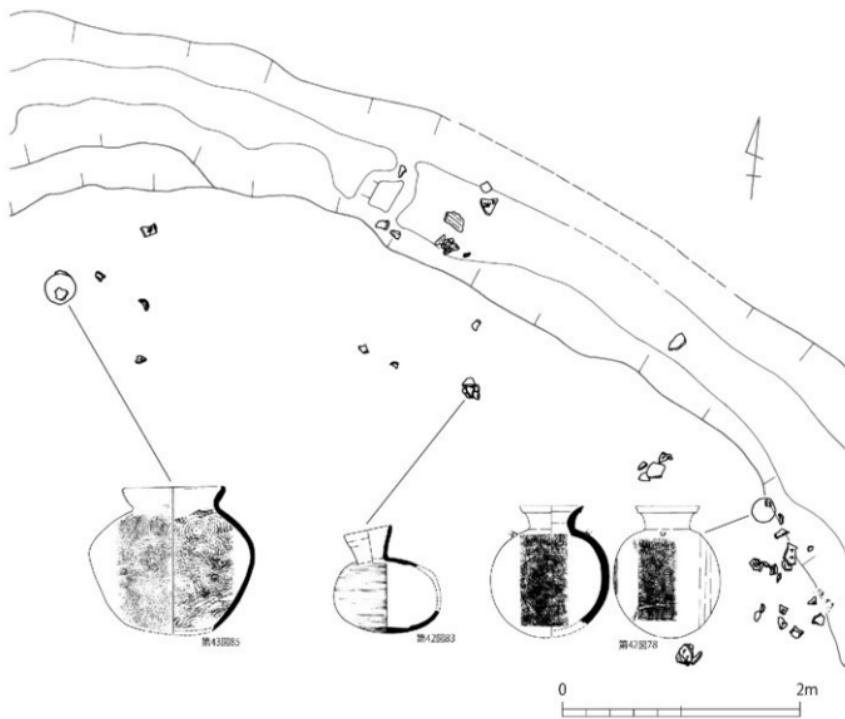
第31図 4号墳周溝出土須恵器範囲図(1:200)



第32図 4号墳周溝A区出土遺物状況図 (平面図 1:40 第41図71・73= 1:8 その他1:6)

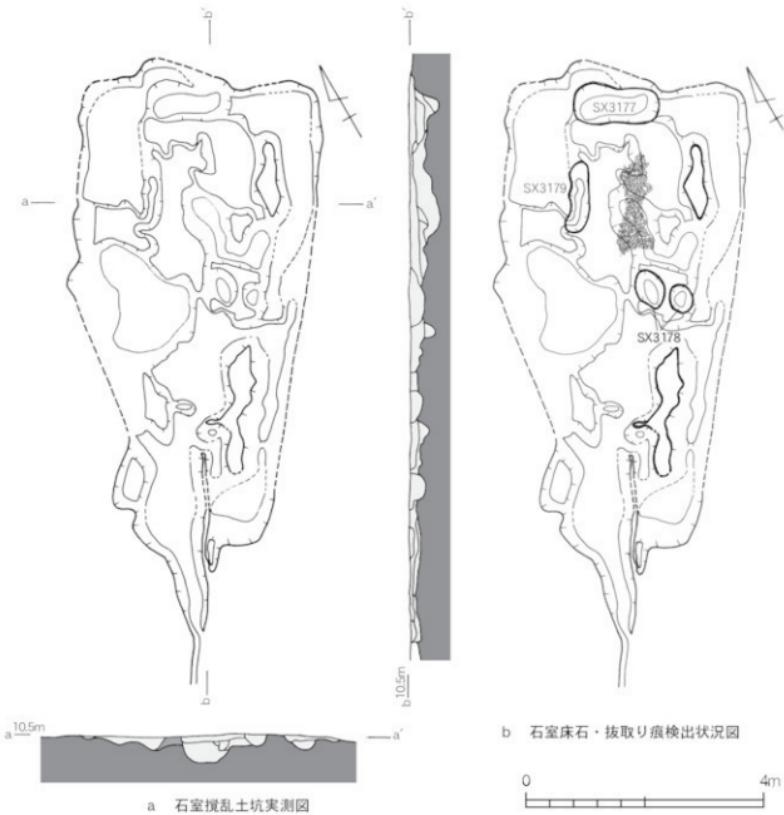


第33図 4号填周溝B区出土遺物状況図 (平面図 1:40 第43図86=1:6 第43図87=1:16 第39図53=1:6)

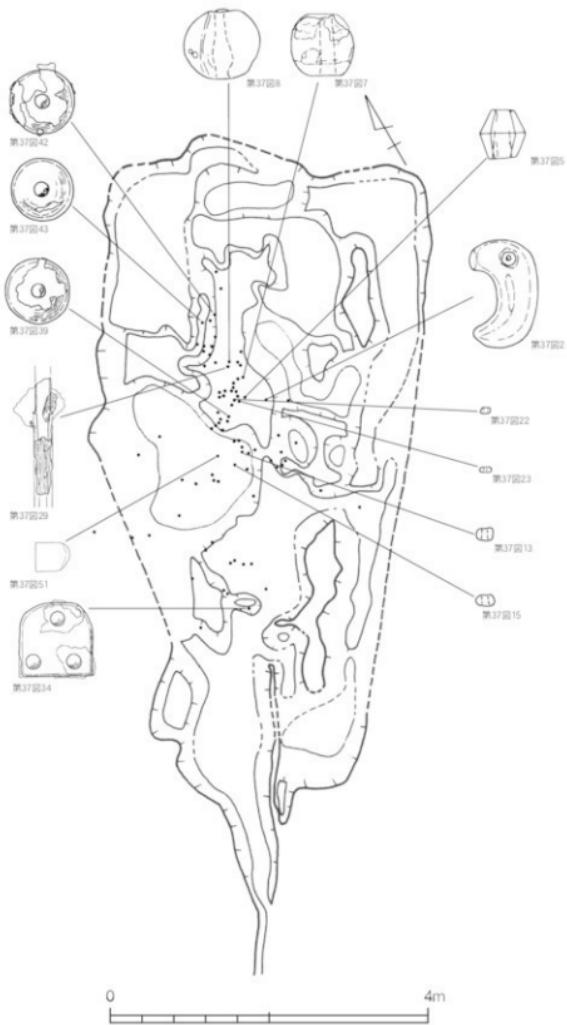


第34図 4号墳周溝C区出土遺物状況図 (平面図 1:40 土器 1:8)

遺物の出土状況 横穴式石室擾乱土坑SX3140からは、勾玉、鉄鎌、馬具などが出土したが、副葬位置をとどめるものではなく、散乱した状況であった(第36図)。
(高橋)



第35図 4号填横穴式石室関係実測図 (1 : 80)



第36図 4号墳石室出土遺物状況図 (平面図 1:60 金属器 1:2 玉 1:1)

3 出土遺物

4号墳の副葬品（装身具・武器・馬具・鉄斧以外の工具）は、すべて石室攪乱土坑SX3140から出土した。須恵器・土師器・鉄斧は周溝出土である。内訳は以下である。

装身具		須恵器	
水晶勾玉	2点	杯 身	30点以上
水晶切子玉	4点	杯 蓋	22点以上
ガラス蜻蛉玉	1点	脚付椀	1点
ガラス丸玉	3点	無蓋高杯	4点
ガラス小玉	17点	有蓋高杯	4点
武 器		翫	1点
鉄 鎌	5点(破片)	長頸壺	3点
馬 具		短頸壺	1点
辻金具	1点	提 瓶	12点以上
爪形飾金具	4点	平 瓶	1点
半球形飾金具	12点	有蓋短頸壺	1点
銛 具	1点	壺	2点
工 具		甕	5点以上
刀子	4点(破片)	土師器	
鉄製刀子柄縁金具	1点	高 杯	8点以上
鉄 斧	1点	短頸壺	1点

a 装飾品

水晶勾玉(第37図1・2) 2点出土した。1は頭部がやや丸みを帯びるが、2は全体がコ字形である。ともに片面穿孔。図の裏面側に割れ円錐がある。

水晶切子玉(第37図3～6) ほぼ同形同大、断面六角形のものが4点出土した。6は一端を欠損する。穿孔手法は勾玉と同様で、片面には貝殻状に割れた面(割れ円錐)をとどめている。

ガラス蜻蛉玉(第37図7) 不透明な濃紺色に3ヶ所の明緑色ガラスを嵌め込んだ蜻蛉玉である。片面に欠損はあるが、ほぼ原形をうかがい知ることができる。

ガラス丸玉(第37図8～10) 完形で不透明な濃紺色のものが1点ある。径16.1mmで、孔は途中で大きくなっている。このほか、破片だが透明な緑色のもの(9、復元径12mm)と透明な紺色のもの(10、復元径9mm)がある。いずれも巻き付けによると推定される。

ガラス小玉(第37図11～27) いずれもごく小さいガラス小玉で、最も大きい11で直径4.3mm、25～27は直径1.7～1.8mmしかない。色調は透明感のある紺色(11)、淡青色で不透明(12)、黄緑色で不透明(13・14・20～24)、黄色不透明(15・25・26)、濃青色で不透明(16～19)、濃青色半透明(27)の各種がある。

11・12がソーダ石灰ガラスの大賀分類B D II型で、それ以外はアルミソーダ石灰ガラスで大賀分類B D III型である。2号墳のガラス小玉よりも小型でアルミソーダ石灰ガラスの製品が占める割合が高い。

b 武 器

鉄 鐵 (第37図28~32 図版32) 棘状閻をもつ長頭鐵の断片が5点出土した。鐵身部はなかった。

c 馬 具

辻金具 (第37図33 図版32) 鉄地金銅張りの辻金具脚部が1点出土した。半円形の短い脚部に3鉢が並ぶ。金銅製の資金具がともなう。

爪形飾金具 (第37図34~37 図版32) 幅・長さとも3cm前後の鉄地金銅張り爪形金具が3点ある。いずれも3鉢留めで、鉢頭は金銅張りである。裏面に革帶の痕跡がある。35はこれらと同形の鉄製品。地板だけが残ったのだろうか。中央に鉄鉢の痕跡がある。

半球形飾金具 (第37図38~49 図版32) 鉄地金銅張りの半球形金具で、頂部に頭部金銅張りの鉄鉢が打たれている。ほぼ全形をとどめるもの6点、一部欠損するもの4点があり、いずれも直径2.5cm前後、高さ1.5cmほどである。いずれも裏側に皮革質の痕跡があり、馬具の革帶に装着した飾金具である。茨城県風返稻荷山古墳の出土状況からみて、面繫の飾金具である(霞ヶ浦町遺跡調査会2000)。38には欠損がない。鉢脚の先に3mm角ほどの座金が残っており、鉢脚には革帶を留めた痕跡がある。このほか、鉢頭部分だけのもの2点がある。

鉸 具 (第37図50) 鉄製鉸具の輪金と推測される小破片がある。

d 工 具

銀製刀子柄頭金具 (第37図51 図版32) 円頭形の柄頭金具。長さ14.3mm、断面は梢円形で長径12.1mm、短径0.88mm。重さ1.33g。銀薄板で筒を作り、それを杏仁形にしたのち、頂部に丸みをつけた杏仁形の銀板をつける。接合部は銀鑑づけである。

刀 子 (第37図52~54 図版32) 52は刃部を欠損する。両闇の鉄製刀子で、柄木と鉄製の柄縁金具が一部、残っている。柄縁金具の上から刃部の脊にかけて皮革質が付着する。鞘であろうか。現存長6.7cm、茎長4.6cm。

53は刀子の切先部分、52は刃部の断片であろうか。ともに表面に木質が付着している。

55は鉄製柄縁金具と柄木の一部が残る破片。柄木の状態からすると、52よりは大型の刀子と推測される。柄縁金具は幅10.5cmで、その表面には皮革質がわずかに付着する。島根県内では、放レ山古墳(出雲市)と平ガ廻横穴墓(雲南市(旧木次町))に金銅装刀子があるが、銀製の刀子装具は初出である。

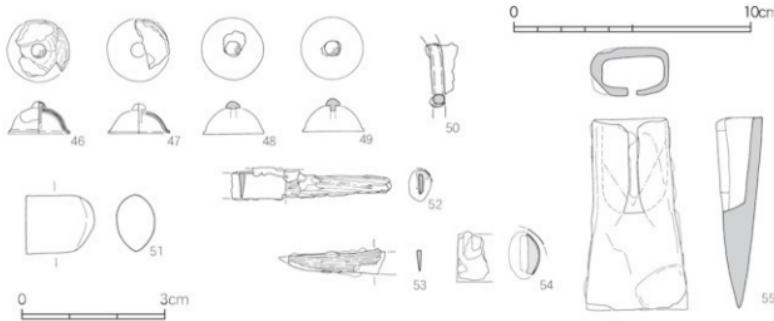
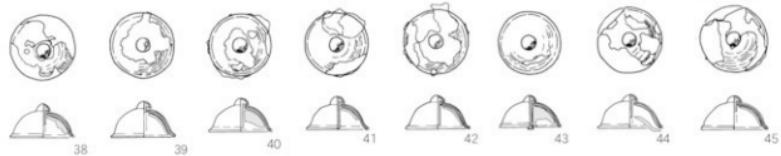
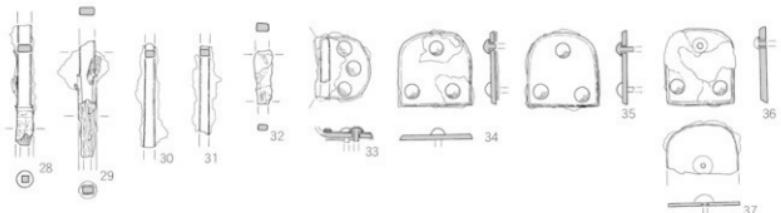
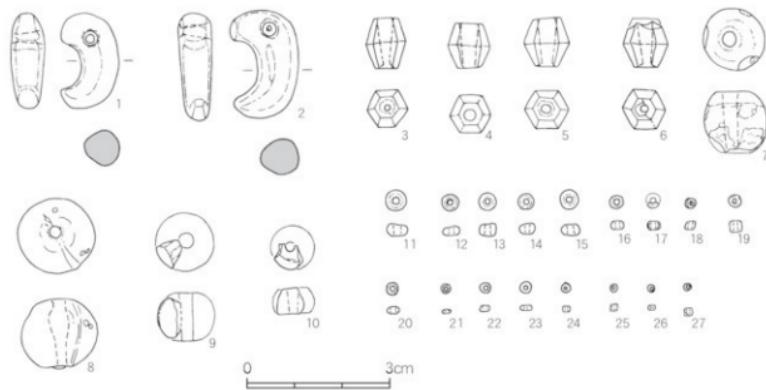
鉄 斧 (第37図55 図版32) 袋部のある通有の鉄斧。全長8.1cm、刃幅4.3cm、厚さ2cm、重さ128g。袋部の平面形は長梢円形だが、その内側に先端V字形の空洞部がある。斧柄の先端が尖っていたか。

(花谷)

e 須恵器

須恵器蓋杯は第38図30のみ外周溝出土、その他は周溝出土である。

蓋 杯 (第38・39図1~52 図版33~37) 通有の蓋杯である。杯身受部径は(30)が11.8cmと小さい、それ以外は13.2~14.1cm、立ち上がりも(30)は0.1cmと低く、それ以外は0.7~1.4cmである。立ち上がりは多くが内傾するが、直立するもの(7)や短小なもの(30)もある。底部は基本的に1/2ほどの範囲を



第37図 4号墳出土装身具・金属器 (1~27・51=1:1 11~55=1:2)

ヘラケズリで調整されるが、底部中央にヘラケズリが及ばないものがある(4・14・19・23・25・27・29・30)。

杯蓋は、口径11.9~13.2cm。口縁部と天井部との境には、2条の凹線をめぐらせたものが多い。その他は、凹線が1条のものである(32・33・34・37・40・44・45・47・50・52)。口縁端部の内面は、凹線をめぐらせるもの(32・39・40・44・47・48)と、端部の器壁を薄くして段状にするもの(33・34・51)がある。その他は凹線をいれない。天井部は基本的にヘラケズリ調整だが、天井部中央にヘラケズリが及ばないものがある(33・40・42・44・46・47・52)。

脚付椀(第39図53) 口縁部がすぼまる小型の椀に脚部がついた形の脚付椀。杯部外面には櫛描き列点文がめぐる。脚部には3方向に三角形の透かしがある。

無蓋高杯(第39図54~57 図版37・38) 屈曲して大きく開いた杯部をもつもの(54)と、ほぼ直立する杯部をもつもの(55~57)がある。杯部外面は、刺突文をめぐらすもの(54)と、櫛描き列点文をめぐらすもの(55~57)がある。脚部の透かしは2段4方向のもの(54)と2段3方向のもの(55・56)とがある。いずれも透かしの形は上段が三角形、下段が長方形で、透かしの間に2条の凹線がはいるが、56のみ下段透かしの下にも凹線がある。脚部は54が高さ9.3cmとやや低く、55・56は10.2cmで同じ高さである。**有蓋高杯**(第39・40図58~65 図版38) 蓋杯にやや高い脚部のついた形の高杯。蓋(58~61)は杯蓋とほぼ同様の形態だが、天井部のヘラケズリ調整が丁寧な点で杯蓋との区別ができる。口縁端部内面には凹線をめぐらせるもの(59)と、凹線をいれないもの(58・60・61)がある。

有蓋高杯の脚部は2段3方向透かしで、上段が三角形で下段が長方形である。透かしの間には凹線がある。脚部の高さは8.0cm前後でほぼ同じ高さである。

翫(第40図66 図版38) 口頸部がやや高く、かつ大きく開いた翫。頸部には波状文と凹線1条があり、体部には2条の凹線がめぐる。

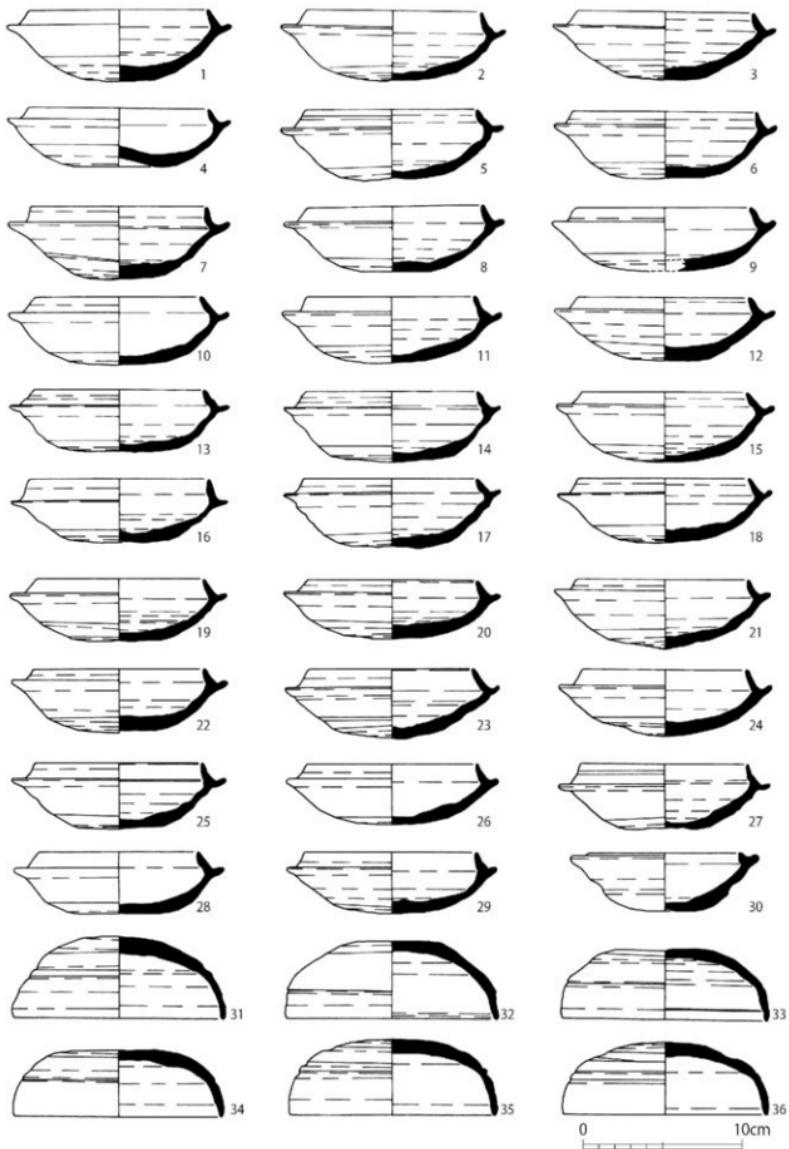
長頸壺(第40図67~69 図版39) 底部がやや丸底のもの(67・69)と、平底のもの(68)がある。67だけ体部には2条の凹線と波状文がある。器高は69が10.1cmと小さく、67は17.9cm、68は18.5cmと大きい。**短頸壺**(第40図70) 肩部が張る壺。肩部にはカキメ調整が、肩部と体部の境には凹線2条と櫛描き列点文がある。

提瓶(第41・42図71~82 図版39・40) 体部全体が丸いもの(71・73~75・78)と背面がやや平たいもの(72・76・77・79・80~82)がある。口縁は外反するもの(71~79)と、直立するもの(80~82)がある。把手の形態は環状を呈するもの(71~74・80)と、鉤状のもの(75)、把手の孔が潰れているもの(76・77)、円形の粘土粒を貼り付けたもの(79・81・82)がある。

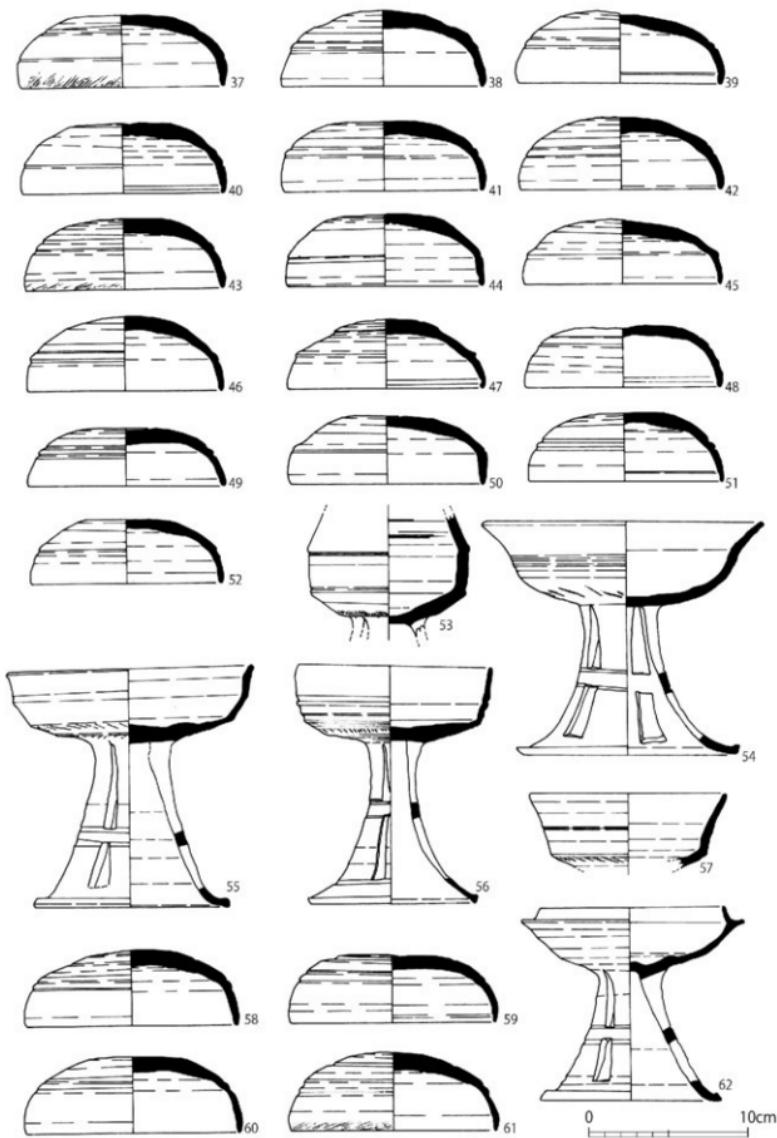
平瓶(第42図83 図版41) 口縁は直立し、体部がやや丸い平瓶。体部上面から底部までカキ目を施している。

有蓋短頸壺(第43図84 図版41) 体部がやや丸い壺。体部には凹線3条がある。カキ目調整は体部と口縁下端にある。蓋は出土していない。

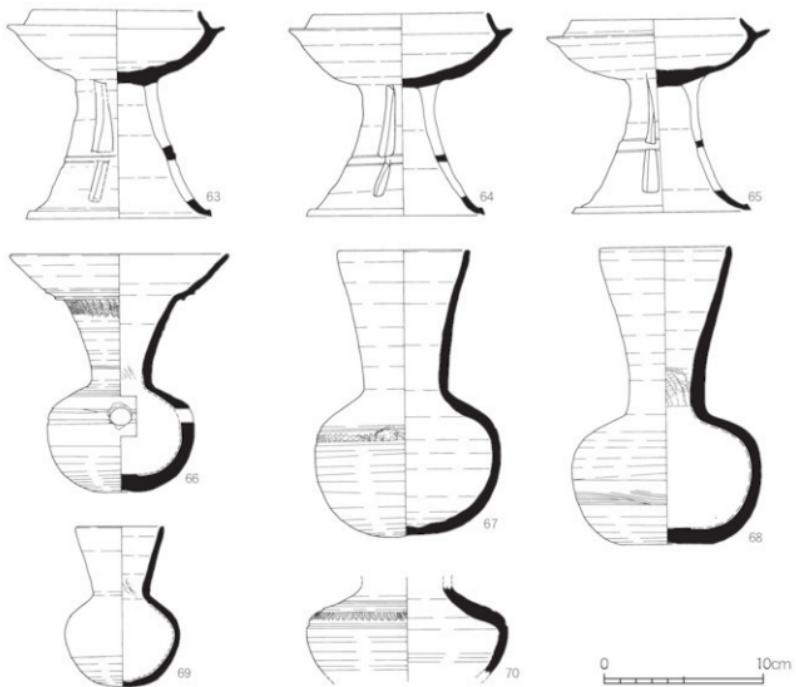
壺(第43図85・86 図版41) 口縁がやや内湾するもの(85)と外反するもの(86)がある。86は口縁端部を丸く仕上げた後、凹線を施している。また、85は口縁と体部にカキ目がある。86は頸部に叩き板を押し当てた痕がある。



第38図 4号墳周溝・外周溝出土須恵器 1 (1 : 3)

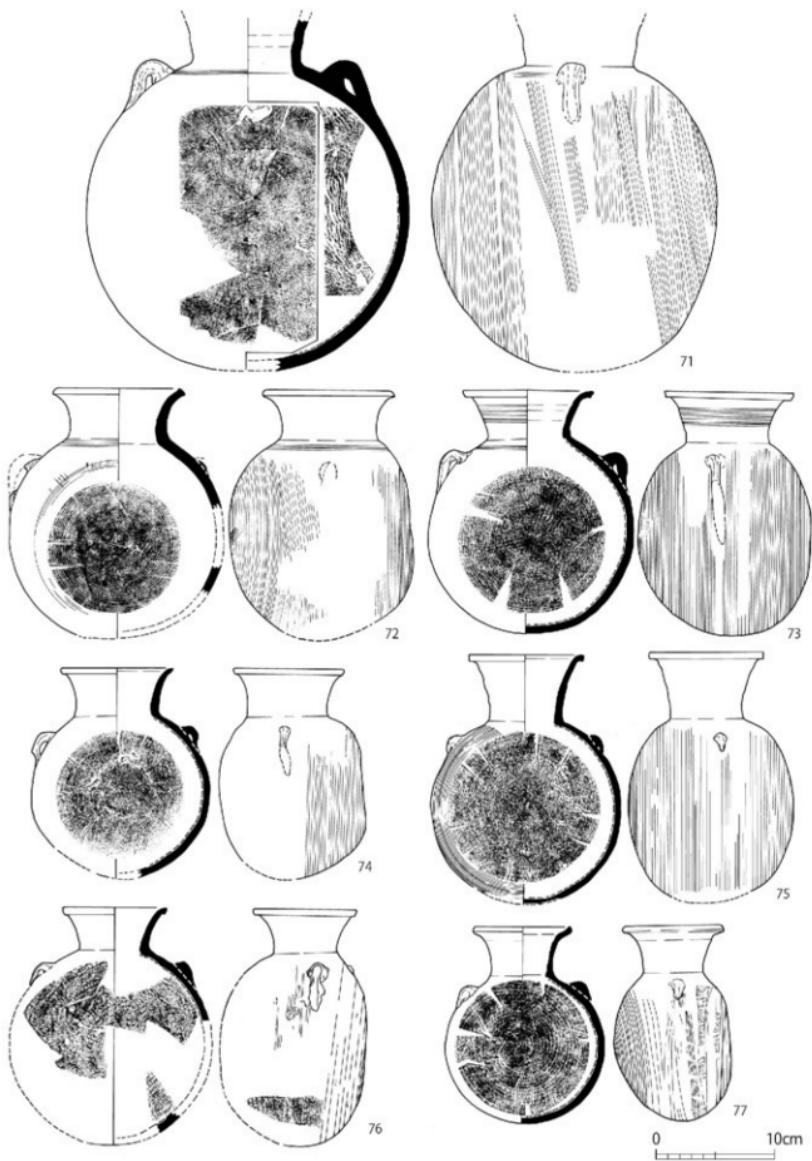


第39図 4号墳周溝出土須恵器2 (1:3)



第40図 4号埴周溝出土須恵器 3 (1 : 3)

壺（第43図87～91 図版41・42）87の口径は43.1cm。頸部の文様構成は上から、波状文、2条の凹線、波状文、2条の凹線である。体部外面は擬格子叩き痕、内面は同心円文あて具痕が残る。88の口径は19.7cm。頸部の波状文は2回の施文による。体部外面は擬格子叩き痕の後カキ目、内面は同心円文あて具痕が残る。89の口径は35.3cm。口縁端部には櫛描き列点文がある。頸部の文様構成は上から、櫛描き列点文、2条の凹線、波状文、2条の凹線である。体部外面は平行叩き痕、内面には同心円文あて具痕が残る。90の頸部の文様構成は上から、1条の凹線、刺突文、2条の凹線、刺突文、3条の凹線である。91の口径は44.0cm。頸部の文様構成は上から、波状文、3条の凹線、波状文、3条の凹線、波状文、1条の凹線である。



第41図 4号墳周溝出土須恵器4 (1:4)



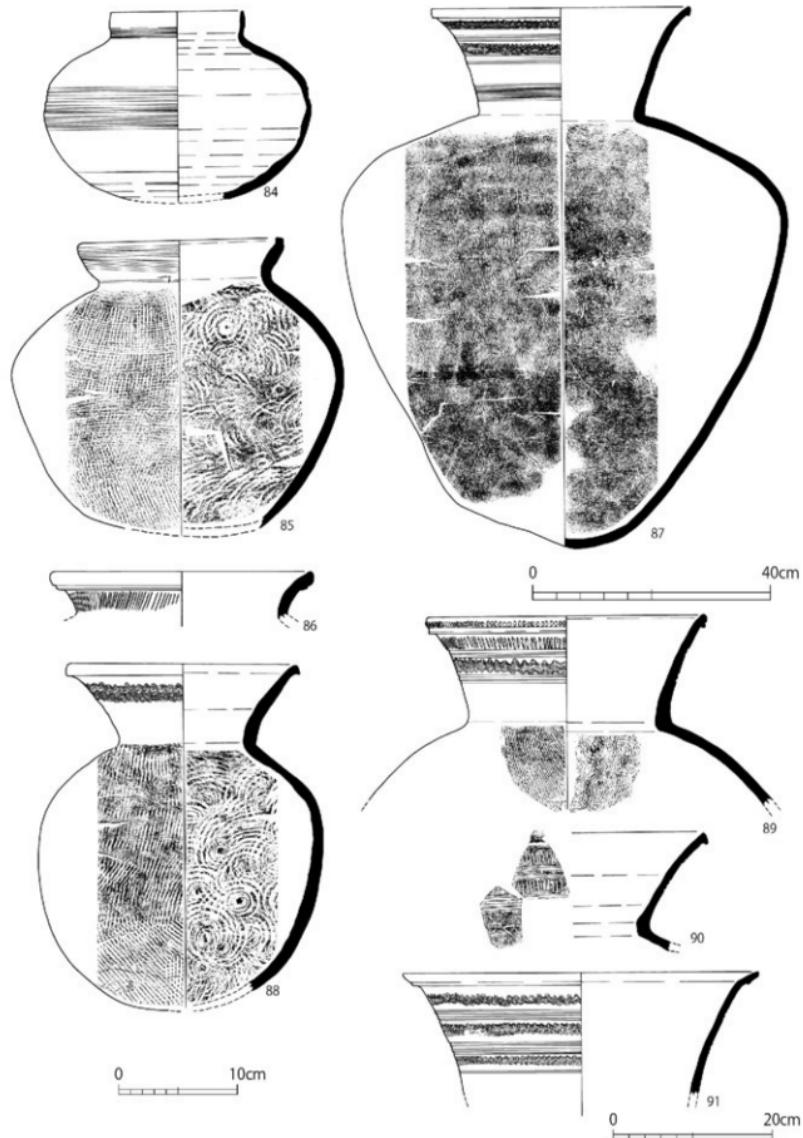
第42図 4号墳周溝出土須恵器 5 (1:4)

f 土師器

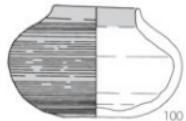
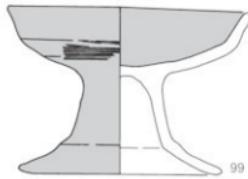
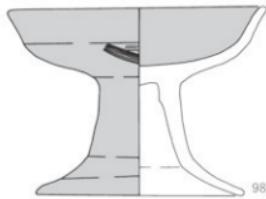
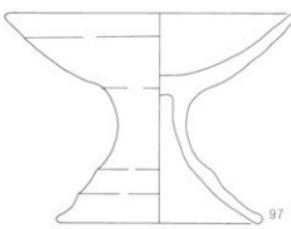
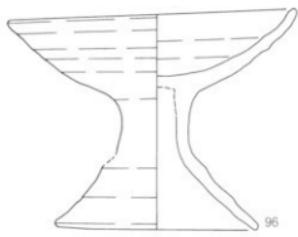
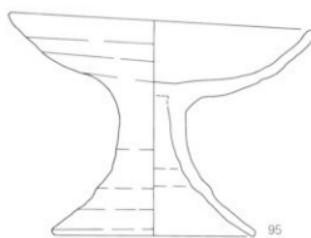
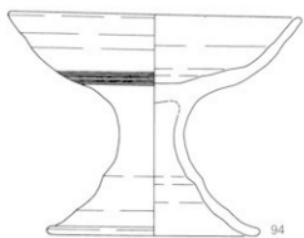
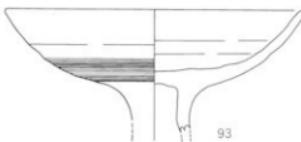
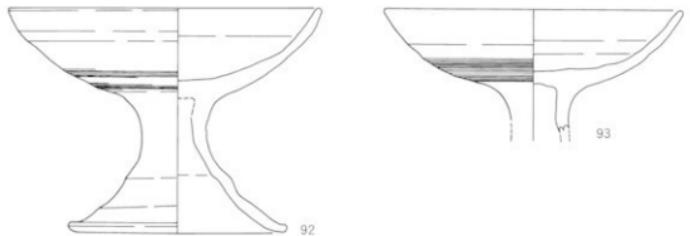
高 杯 (第44図92~99 図版43) 脚部に段があるもの (92・94~97) と段のないもの (98・99) がある。杯部は内湾しながら大きく開くもの (92~97) と、内湾気味に立ち上がり、途中で内側に屈曲する (98・99) がある。98・99の杯部内外面と脚部の外面には赤色顔料が塗られている。

短頸壺 (第44図100 図版43) 体部がやや橢円形の壺。口径は5.2cm。体部にはカキ目がある。体部外面と口縁内面に赤色顔料が塗られている。

(高橋)



第43図 4号墳周溝出土須恵器6 (84~88=1:4 87=1:8 89~91=1:6)



第44図 4号填周溝出土土師器(1:3)

V 築山7号墳

築山7号墳は、3A区、2区、1B区の各調査区にまたがっており、一部は既に報告済みであるが、一連の構造と判明したので再報告する。周溝SD3180とした1B区の溝は『築山遺跡I』の「11号区画道路部」SD04（同書107・108頁、図版40）。外周溝とした1B区の溝は『築山遺跡I』の「11号区画道路部」SD01（同書102～104頁、図版38）、2区の溝は『築山遺跡II』のSD01（同書40頁、図版3・11）に該当する。北側3mには6号墳、古城山丘陵を挟んで西側約40mには2号墳がある。また、北西の上塩冶築山古墳とは直線距離にして約75m離れている。7号墳は地表下約0.6m、標高10.1mで確認された。

1 墳丘と周溝（第45図 図版20）

調査した範囲からは墳丘盛土は確認できず、円形の周溝（SD3180）などを確認したにとどまる。周溝底の内側の立ち上がりではかると、7号墳の墳丘径は22.8～24m。周溝の外径は26.6m。

周溝は3A区と1B区で確認した。上幅は1～3m、下幅は0.3～1.1m、深さは約0.2mと浅い。

周溝の埋土は黒褐色粘質土の1層で、堆積時期を確定できる遺物に乏しかった。この層からは、7号墳にともなう須恵器甌が出土した。また、1B区の周溝直上層からは須恵器提瓶や、小片のため図化できなかつたが、2個体分の甌が出土している。

周溝の外側には同心円をえがく外周溝（SD3181）がある。外周溝の外径は38m、上幅は1.6～2.2m、下幅は0.4～1.2m、深さは約0.4m。埋土はII区で5層、1B区で3層にわかつた。この層から7号墳にともなう土器はないが、1B区の1層から須恵器高台付杯が出土している。この土器は周溝の埋没時期を示すものであろう。

2 出土遺物

甌（第45図1） 口縁端部は外反する。口径50.4cm。頸部の文様構成は上から波状文、3条の凹線、波状文、2条の凹線である。体部外面は、擬格子叩き痕、内面は同心円文のあて具痕が残る。口縁の一部に粘土を貼り付けた痕跡がある。これは土器製作時に亀裂がはいり、その修復をした痕跡と考えられる。また、頸部には穿孔途中的穴（径10mm）がある。

提瓶（第45図2） 把手は環状を呈する。体部内面には同心円文のあて具痕が残る。

高台付杯（第45図3・4） 口縁は底部からやや外傾しながら、直線的に立ち上がる。3の口径は10cm、4は15cm。高台はいずれも底部端に貼り付けられている。（高橋）

VI 包含層の遺物

横 瓶（第46図1～3 図版44） 1の体部はやや球形。体部外面は擬格子叩き後カキ目、内面は同心円文のあて具痕が残る。2号埴直上より出土。2の体部はやや梢円形。体部外面は擬格子叩き後ハケ、内面は同心円文のあて具痕が残る。2号埴直上より出土。3の体部はやや球形。体部外面は擬格子叩き後カキ目、内面は同心円文のあて具痕が残る。破片は2号埴直上に集中していたが、1号埴直上からも出土している。

壺（第46図4～7 図版44） 4の体部はやや角張っている。口縁下端部に凹線をいれ、突帯を表現している。体部外面は擬格子叩き後カキ目、内面は同心円文のあて具痕が残る。4号埴直上より出土。5の体部はやや球形。体部外面は擬格子叩き痕、内面は同心円文のあて具痕が残る。また、体部外面の叩き目を一部ナデ消している。2号埴直上より出土。6の体部はやや角張っている。体部外面は擬格子叩き後カキ目、内面は同心円文のあて具痕が残る。1号埴と2号埴の中間から出土。7の体部は倒卵形である。体部外面は擬格子叩き後カキ目、内面は同心円文のあて具痕が残る。2号埴直上より出土。

甕（第47図8～9） 8・9の頸部の文様構成は上から、波状文、2条の凹線、波状文、2条の凹線である。9の体部外面は擬格子叩き痕、内面は同心円文のあて具痕が残る。8・9とともに2号埴直上より出土。

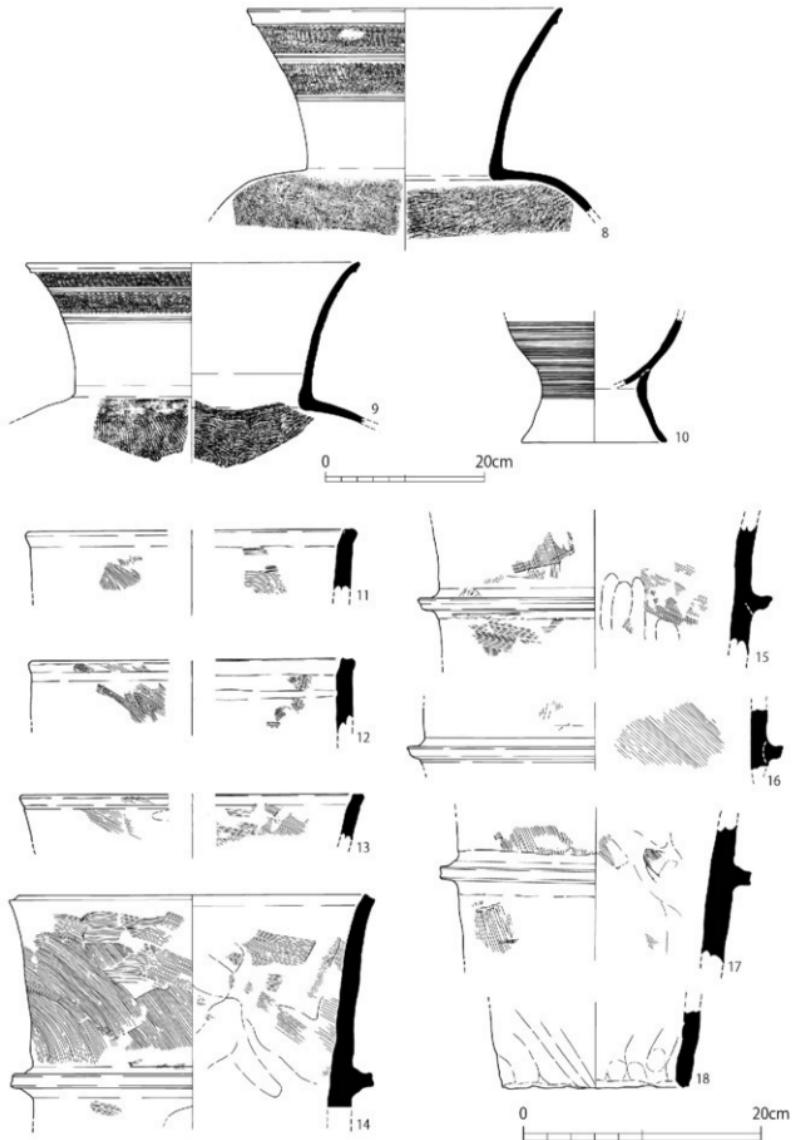
脚付壺（第47図10 図版44） やや球形の体部に外反する脚部がついた脚付壺。体部から脚部にかけてカキ目がある。壺の内面には同心円文のあて具痕が残る。胎土が他のものとは明らかに異なる。2号埴直上より出土。

円筒埴輪（第47図11～18） いずれも1号埴の北に位置するA19グリッドから出土。11・12の口縁部は外方向に屈曲している。端部は強いナデにより窪んでいる。外面はナナメハケが確認できる。内面はハケの後に口縁端部付近のみヨコナデを施している。13の口縁端部は強いナデにより窪んでいる。外面はナナメハケ、内面はハケを施している。14の口縁端部は強いナデにより窪んでいる。胸部には円形スカシが確認できる。タガの断面形はM字状である。外面はナナメハケが確認できる。内面はヨコ～ナナメハケ後、口縁下半部以下にナデを施す。15のタガ断面は、上部をやや突出させている。タガの下の胸部はヨコ～ナナメハケを施している。内面はナナメハケのちナデを施している。16のタガ断面は、15と同じである。外面は磨滅しておりハケ方向は不明である。内面はナナメハケを施している。17のタガ断面形はM字状である。外面はナナメハケ、内面はナナメハケの後ナデを施している。18の底部外面には縦方向の棒状工具痕が残り、内面は棒状工具のあて具痕をナデ調整で消している。底端部の断面形はU字状になる。

（高橋）



第46図 包含層出土須惠器 1 (1:6)



第47図 包含層出土須恵器 2・埴輪 (8~10=1:6 11~18=1:4)

註

- 1) 丸玉と小玉の区別は、「東山古墳群II」(京都府立大学文学部考古学研究室編、中町文化財報告25、兵庫県中町教育委員会、2001年)で「径が0.7cm、厚みが0.5cm程度のものを丸玉、それ以下のものを小玉」(同書133頁)とした分類に従う。大賀分類は(大賀2002)参照。
- 2) 出雲市内の古墳出土大刀で、柄間に刻み目入り銀線を巻いた例は、上塙治築山古墳(円頭大刀、松本編1999)、放畠山古墳(圭頭大刀、大谷・松尾1999)、刈山5号墳(大刀型式不明)、上塙治横穴墓群32支群6号横穴墓(大刀型式不明)について5例目である(大谷・松尾2004)。
- 3) 本例以外は、大塹西遺跡2号墳(隠岐の島町、無台鏡A I a・平底、径10.8cm)、上塙治横穴墓群第23支群5号横穴墓(出雲市、無台鏡A I a、径8.5cm)、明神古墳(大田市仁摩町)。
- 4) 復元図も埼玉将軍塚古墳例による。ただし、丸底か平底かは不明である。

参考文献

- 野口成美「東山古墳群出土耳環の特徴」京都府立大学文学部考古学研究室編『東山古墳群I』中町文化財報告20、中町教育委員会、1999年、163~165頁。
- 村上 隆「東山古墳群から出土した耳環の分類と分析」京都府立大学文学部考古学研究室編『東山古墳群II』中町文化財報告25、中町教育委員会、2001年、237~239頁。
- 大賀克彦「日本列島におけるガラス小玉の変遷」「小羽山古墳群 小羽山丘陵における古墳の調査」清水町埋蔵文化財調査報告書V、福井県清水町教育委員会、2002年、127~145頁。
- 大谷晃二・松尾充晶「鳥根県 装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧(改訂版)」『鳥根考古学会誌』第20・21集合併号、鳥根考古学会、545~572頁、2004年。
- 松本岩雄編「上塙治築山古墳の研究」鳥根県古代文化センター調査研究報告書4、鳥根県古代文化センター、1999年。
- 大谷晃二・松尾充晶「出雲平野の主要後期古墳とその副葬品」松本岩雄編「上塙治築山古墳の研究」鳥根県古代文化センター調査研究報告書4、鳥根県古代文化センター、1999年、205~211頁。
- 杉秀宏「古墳時代の鐵礫について」楢原考古学研究所論集第8号、吉川弘文館、1988年、529~644頁。
- 角田 徳幸・西尾 克己・田根 裕美子「鳥根県埋蔵文化財調査報告書」第12集、鳥根県教育委員会、1986年。
- 野津左馬之助「鳥根県内の古墳」『鳥根県史』第4巻、鳥根県内務部鳥根県史編纂係、1924年。
- 守岡正司 1998 『上沢II遺跡・孤懸谷古墳・大井谷城跡・上塙治横穴墓第7・12・22・23・33・35・36・37支群』斐伊川 放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV、鳥根県教育委員会・建設省出雲工事事務所。
- 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌』第64巻第1号、日本考古学会、1978年、1~27頁。
- 毛利光俊彦「古代東アジアの金属製容器II(朝鮮・日本編)」奈良文化財研究所史料第71冊、2005年。
- 横田登・野津研吾「大塹西遺跡発掘調査報告書」磯地区統合小学校建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、隠岐の島町土地開発公社・隠岐の島町教育委員会、2006年。
- 霞ヶ浦町遺跡調査会「風返幡荷山古墳」霞ヶ浦町教育委員会、2000年。
- 三原一将ほか『築山遺跡I』出雲市教育委員会、2005年。
- 三原一将ほか『築山遺跡II』出雲市教育委員会、2007年。
- 田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ、1966年。
- 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店、1981年。
- 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集、鳥根考古学会、1994年、39~82頁。
- 花谷 浩「上島古墳出土遺物の再調査報告」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集、出雲市教育委員会、2007年、1~32頁。

第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

I 遺構出土の遺物

当該調査区での弥生時代の遺構は、3E区内で1基のみ検出された。

SX3198(第48~50図 図版45・46)

SX3198は3E区のE-51・52グリッド内、標高8.1mで検出した土坑である。南側は調査区外へと延び、西側は擾乱によって壊されているが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われ、N=8°-Wである。現状で、南北長1.2m、東西長1.3m、深さ25cmを測る。

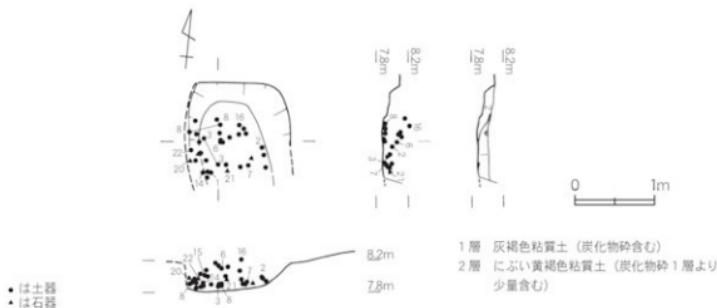
覆土は基本的に炭化物碎を含む2つの層で、炭化物碎の少ないにぶい黄褐色粘質土(2層)が堆積したのち、灰褐色粘質土(1層)が堆積する。

出土遺物は、弥生土器がコンテナ半箱分・石器が中袋1袋分である。

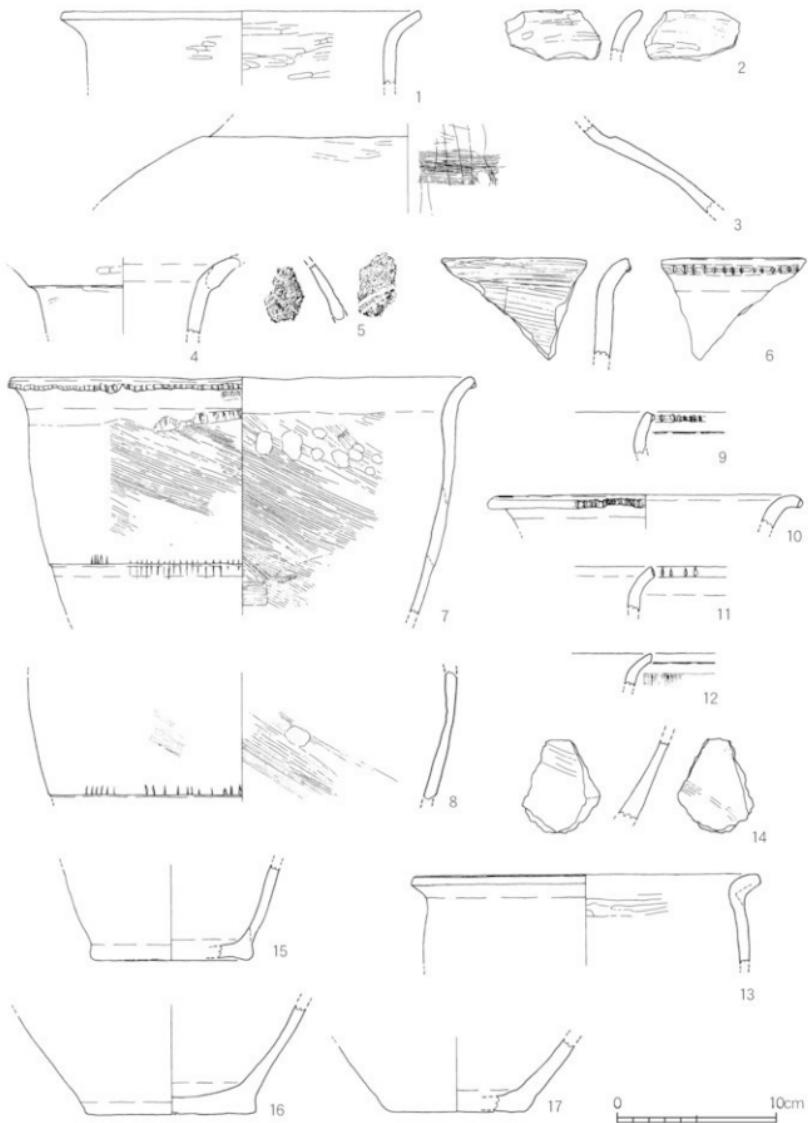
1~5は壺である。1・2・4は口縁部で、1は直立した頸部から口縁が外反する。2は外反する口縁部の下端に段の痕跡が観察される。4は開くように立ち上がる頸部から口縁部の境にミガキにより段が作られ、口縁部は外反する。3は肩部で、頸部との境にミガキによる段が作られている。5は胴部破片で、ヘラ描きによる沈文線が施される。

6~14は甕である。6は口縁下端部に小さな突帯を貼り付けたのち、刻目を施している。7は口縁部は小さく外反し、口縁下端部に小さな突帯を貼り付けたのち刻目を施している。また体部中央付近に、ヘラによる段を作りそこにも刻目を施す。8は7と同一形態の胴部で、ヘラにより段を作りそこへ刻目を施している。9~13は口縁部である。10は大きく外反するが、他のものは小さく外反する。9は口縁下端部にナデにより擬突帯を作り刻目を施し、口縁部やや下にはナデによる小さな段を作る。10も口縁下端部に刻目を施す。11は風化が著しいが口唇部に刻目の痕跡が観察される。12・13には刻目は無い。13は口縁部が分厚くや粗雑な作りのため、縄文土器の系譜の可能性を考えられる。14は胴部破片で、内面に煤が多く付着していたため、年代測定分析(AMS法)を行った¹⁾。

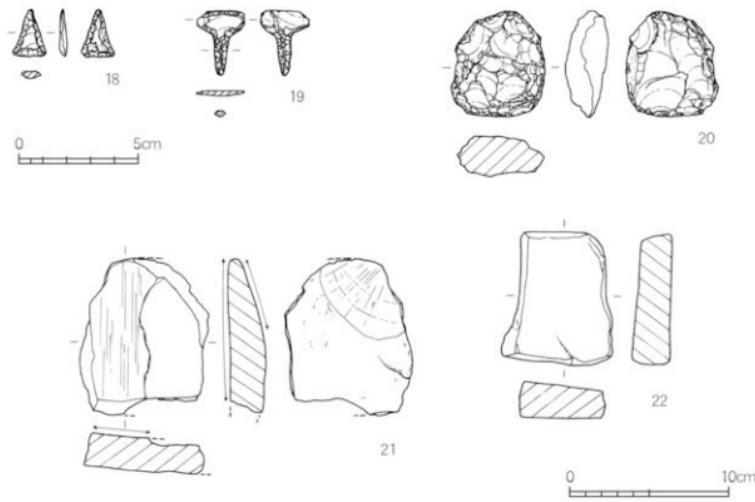
15~17は底部である。16・17は平底、15は上げ底ぎみの平底で、体部との境がくびれており若干



第48図 SX3198遺構図(1:60)



第49図 SX3198出土遺物 1 (1 : 3)



第50図 SK3198出土遺物2 (18・19=1:2、20~22=1:3)

16・17より縄文的である。また被熱のためか器面が荒れている。

18~22は石器である。18はガラス質安山岩製の平基無茎式の石鎌である。19は黒曜石製の石錐で、平らなつまみが付く。20はサヌカイトの核である。当該遺構からはガラス質安山岩製の剥片1点と碎片が24点出土した。また、碎片は安山岩製が2点、凝灰岩製が1点、黒曜石が7点出土している。21は砥石、22は砥石の可能性のある石器で、2点とも砂岩製である。

以上、出土した土器から、当該遺構は弥生時代前期前半のものと考えられる。

II 包含層の遺物

縄文・弥生時代の遺物 (第51~71図 図版47~60)

築山遺跡3D・3E区では、西側へ地形が下がり谷地形となる境界付近を調査し、その落ち際(谷部分)では、縄文時代晩期中葉～弥生時代前期前半の遺物包含層を検出した。ここでは、その遺物を中心に、3区全体から出土した縄文・弥生時代の遺物について記載する。また築山遺跡1区で、縄文時代後期初頭の遺物包含層及び縄文時代終末突堤文期～弥生時代前期後半の遺構を検出している関係上、後期の遺物は1区寄りの東側から出土しているものが多い。

以下、土器(1~252)、石製品(1~37)の順に掲載した。縄文土器は、有文土器・無文深鉢・深鉢胴部・精製浅鉢・粗製浅鉢・底部・突堤文土器に分類し、それぞれ古いと思われるものから順序だてている。また深鉢の胴部は、条痕調整・ケズリ調整・粗雑なナデ調整を基本順位として、外面調整に従って掲載した。

土 器

3 D・3 E区から出土した当該期の土器はコンテナ4箱分である。3 A～3 C区から出土した当該期の土器はコンテナ半箱分である。

1は縄文時代後期の縁帶文土器で、深鉢の口縁部である。波状口縁の頂部にあたり、内傾する口縁部外面には、原体RLの縄文が施されたのちに縄文を磨り消すように渦巻文を施している。内面屈曲部では砂粒子が右から左へ移動するのが観察される。2は縄文時代後期末～晩期初頭の深鉢の口縁部で、外面には、右から左へ押し引きながら施された2条の四線文がある。

3～56は縄文時代晩期中葉新段階の有文土器である。無文土器と比較すると、器壁が薄い傾向にある。

3～23は口縁部直下に内面から未貫通の連続刺突文が施された深鉢である。11以外は口縁部が外反するもので、11は砲弾形を呈するものである。内外面の調整には条痕及びナデが行われ、基本的に粗製土器である。内面からの刺突により、3～6は外面に明瞭な瘤状の突起が作られ、7・8は小さな突起が作られ、9～18はわずかに突出し、19～23は突出しないもの。刺突の突き具合及び瘤状突起への意識は退化していく傾向を示している。また刺突具及び施文方法として、円柱状の棒状工具を利用したもの、先端の尖った棒状工具を斜め刺しまたは回転させ押しつけたもの、棒状工具を斜めに押しつけたもの、竹管を利用したものまた引きずって施文したもの、指頭による指ナデ状のものなどが観察された。

以上は、いわゆる孔列文土器と指摘されてきたものである²⁾が、最近島根県内では類似資料³⁾が増加していることから、新たな見解が示されている。それは、孔列文土器ではなく、その影響下で作られた文様のひとつではないかという見解⁴⁾であり、本報告もそれにしたがっている。

24は内湾する浅鉢口縁部と考えられるものである。これにも口縁部直下に棒状工具により回転させつつ施された刺突痕が2ヶ所確認できる。

25～47は口縁端部に刻目が施された深鉢である。器形は口縁部が外反するもの10点(25・27・28・37・39・40・42・45～47)、砲弾形を呈するもの13点(26・29～36・38・41・43・44)に分類できる。内外面の調整には条痕が減り、ナデ及びミガキが行われる。粗製土器のほかに精製土器にも刻目は施されていることがわかる。刻目は、深く刻んだもの(25・30)、上方から刻んだもの(27・29・32～34・36・37・40～44・46・47)のうち41～47は小さな刻目、上方から刺突するように施されたもの(26・28・31・35・38・39)に大まかに分けることができた。

また、42の外反する口縁部には焼成後の穿孔が1ヶ所施される。46の外面頸部には連続刺突文が施されている。47は刻目の施された直下にヘラ描きが行われている。左側に平行する2本線、右側に平行する3本線が、それぞれ頂点を同じくして、左側の2本線を右上から左下方向に描き、それを切るように、右側の3本線が左上から右下方向に描かれている。

48～56はそのほかの文様を有する土器である。48は口縁部が外反するもの、50は胴部で屈曲し口縁部が外半していくと思われ、器形的には48と同じである。54は砲弾形で、ほかは胴部破片のため不明である。

48は波状口縁で、口縁端部には平坦面を作り、その頂部には押さえによる小さな2つの楕円形をリ

ボン状にみせている。外面には波状口縁の頂部から下方へ縦方向の押引文が施されている。内面には口縁にそって横方向の押引文が施されている。49は48と文様原体が同じと思われ、同一固体と考えられる胸部破片である。外面には頸部と胸部の境界に横方向の押引文が施されている。このような押引文は吉備の宍帯文期直前、晚期中葉新段階に相当する谷尻式⁵⁾に特徴的な文様である。ただし、谷尻式では外面にのみ文様を施しており、内面に施すのは、山陰での特徴であると指摘されている⁶⁾。

50は頸部と胸部の境界に刺突文が施されている。51は2条の沈線により1条の突帯を作り、その上位にV字状のヘラ描きがなされている。52は47と似た構成でヘラ描きが行われているが、52は左側が後である。53は平行するヘラ描き3本線が斜めに施されている。54は口縁部直下に小さな刺突文が施され、その下に小さな穿孔がなされている。55は方形の刺突文、56は竹管による刺突文が施されている。

57～65は絪文時代晚期中葉～後葉の無文深鉢の口縁部である。64の口縁部は短く外反するが、基本的に器形は砲弾形を呈する。65は薄手で、粗雑ではあるが外面にもミガキが行われていることから、有文土器または浅鉢の可能性も考えられる。

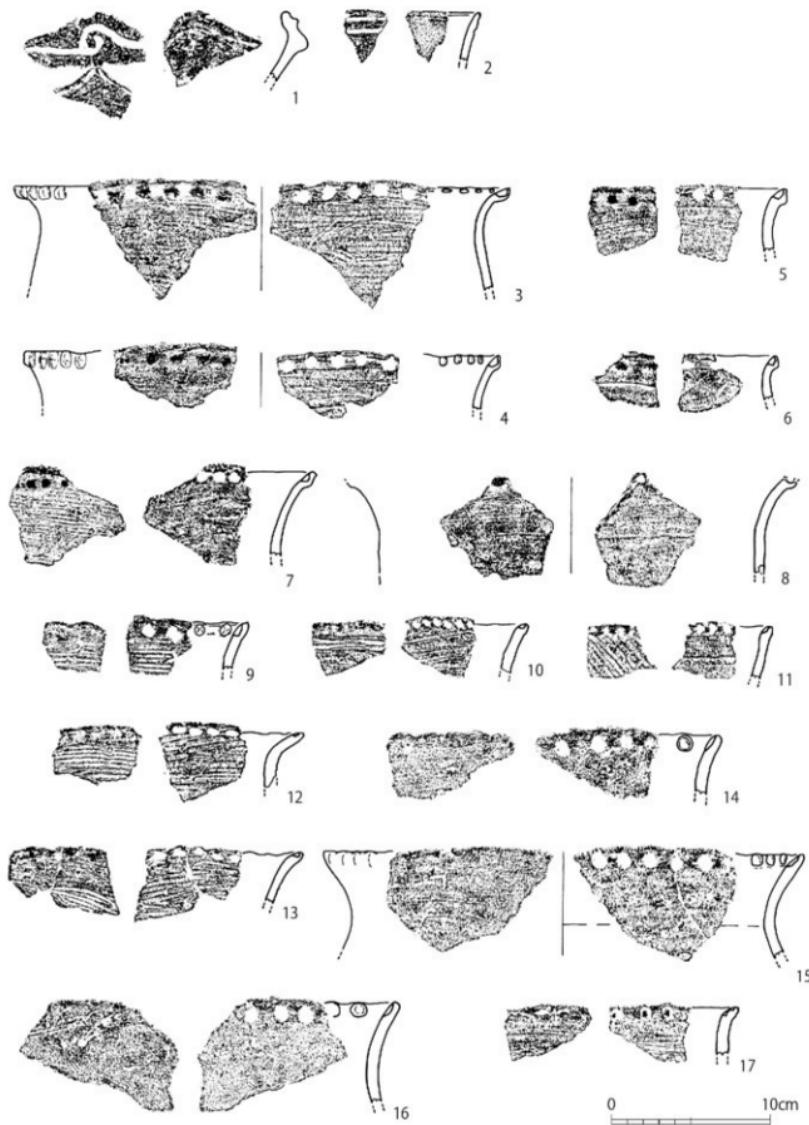
66～156は絪文時代晚期中葉～後葉の深鉢の胸部である。

66～81は外面調整が貝殻条痕で、66～68は内面も条痕調整のもの、68～73は内面調整が基本的にナデのもの、74～76は内面調整がヨコナデのもの、77～81は内面調整が基本的にミガキのものである。また、69の内面調整は条痕のうちにナデが行われている。体部中央で屈曲する73の外面は上半が2枚貝条痕調整、下半がナデ調整である。77の内面には接合痕が明瞭に残っている。79は外面が条痕調整のうちナデ調整も行われている。体部の途中で外面調整が変わる81は上半がミガキ調整、下半が2枚貝条痕調整である。

82～107は外面調整が基本的にケズリのもので、ケズリは砂粒子の移動が右から左及び下から上へと観察されるものがほとんどである。82は内面調整がケズリののちヨコナデを行っている。また内面には糊圧痕らしきものがひとつ観察される。83～85は内面調整がナデのもの、86～89は内面調整がヨコナデのもの、90は内面調整がミガキのものである。91～107はケズリ調整のうちにナデ調整などを行ったものである。107の外面調整は屈曲する上半部が粗雑なミガキ調整、下半部がケズリ調整である。89は外面破片下端部には粘土貼付け面が観察される。100のナデ調整に使用された原体は板小口である。106の内面には縦方向に約5mmの幅で内容物が垂れた痕跡が2条観察される。

108～149は外面調整が粗雑なナデのもので、砂粒子の移動がケズリ調整と同じ方向で観察されるものが半数にのぼる。108は内面調整が2枚貝条痕、109～122は内面調整がナデ、123～128は内面調整がやや粗雑なヨコナデ、129～142は内面調整がヨコナデ、143・144は内面調整が丁寧なナデ、145～149は内面調整がミガキである。113・123の内面には接合痕が明瞭に観察される。119の内面には斜め縦方向のヘラ当たり痕が認められる。120・149の外面下端部、145の内面上端部には粘土貼り付け面が観察される。126の外面調整の原体は巻貝かニナ貝ではないかとの指摘を受けている⁷⁾。139の内面調整は単位の細かいヨコナデである。

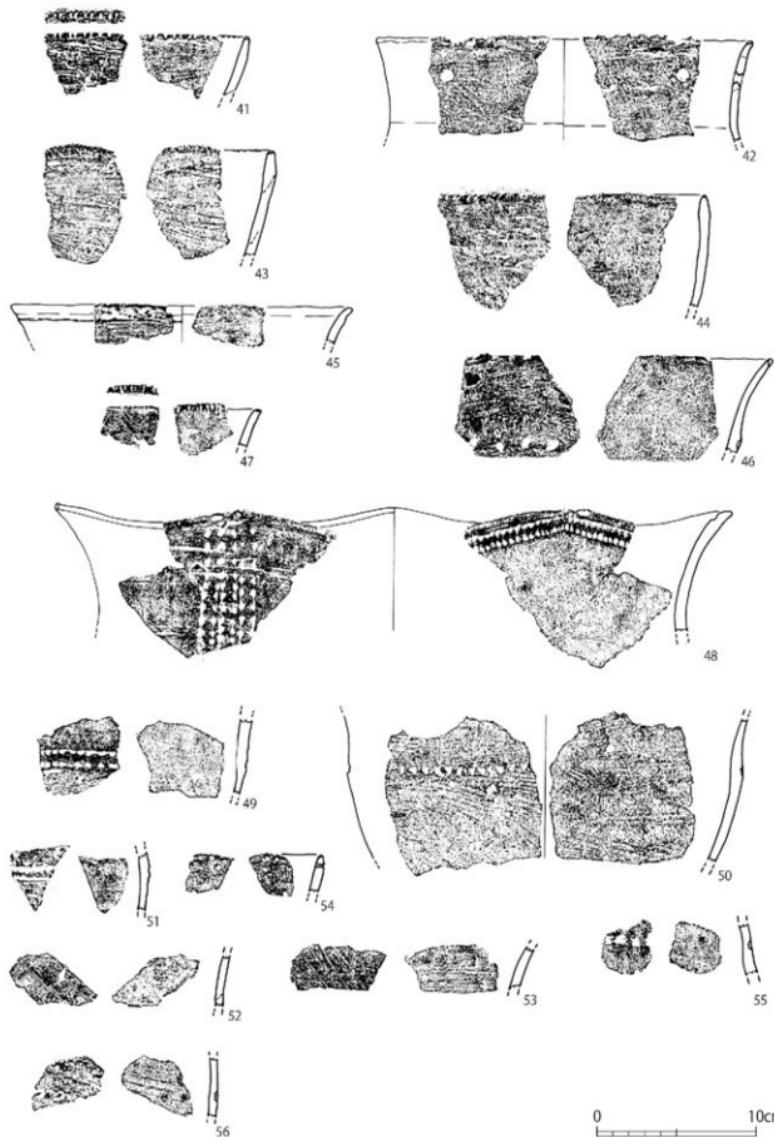
150～156は外面調整が前3者に含まれなかったものである。外面調整が、150・151はやや粗雑なナデ、152は粗雑なナデのうち所々ミガキ、153・154はナデ、155は粗雑なミガキ、体部がゆるやかに屈曲す



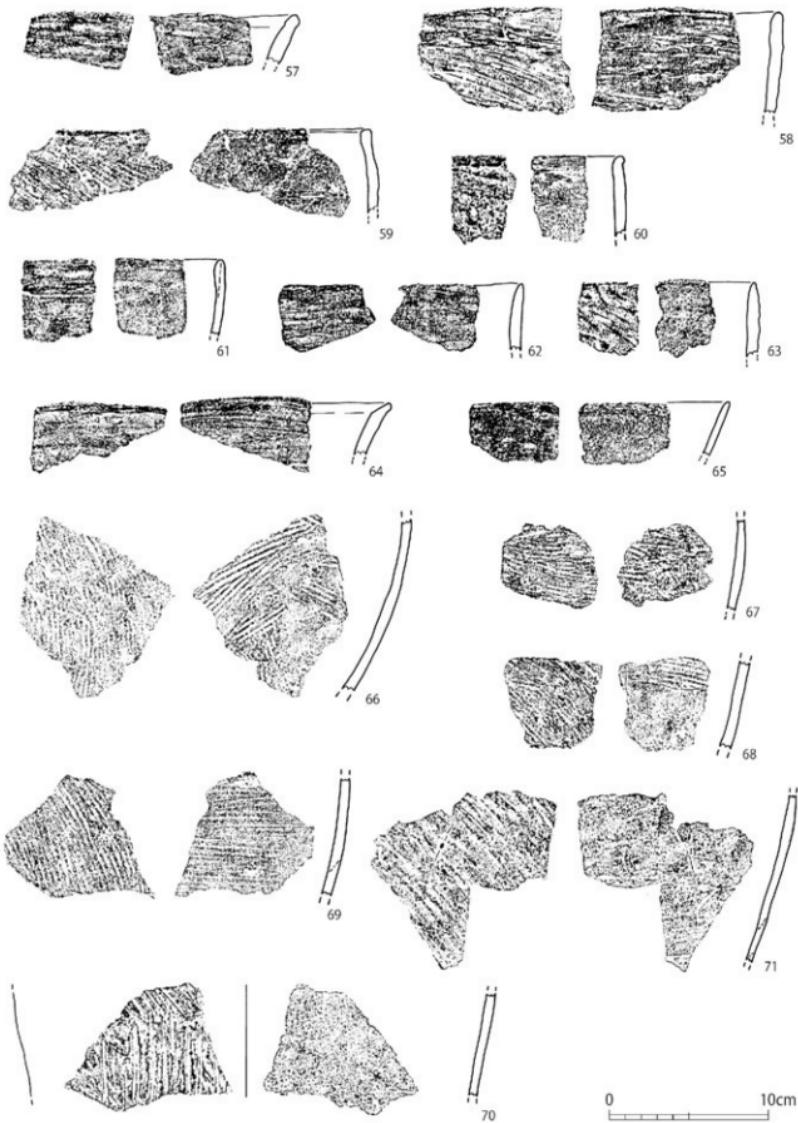
第51図 包含層出土縄文土器 1 (1:3)



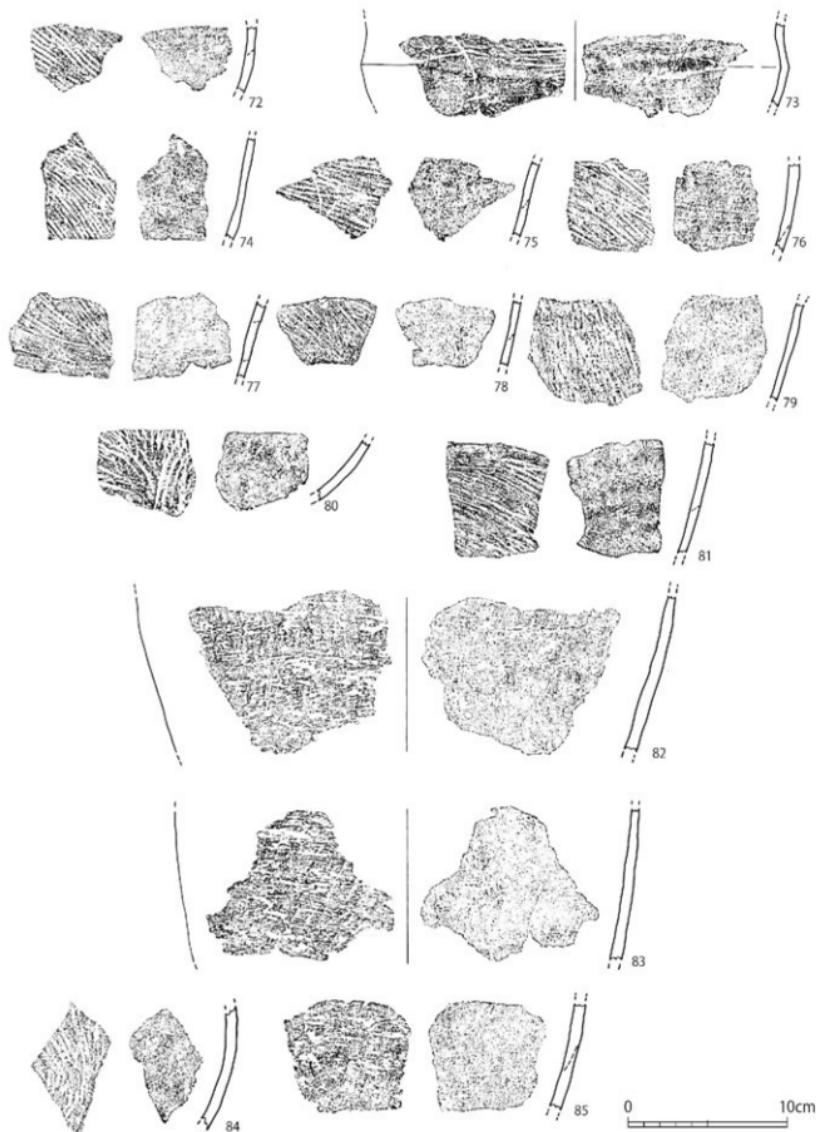
第52図 包含層出土縄文土器 2 (1 : 3)



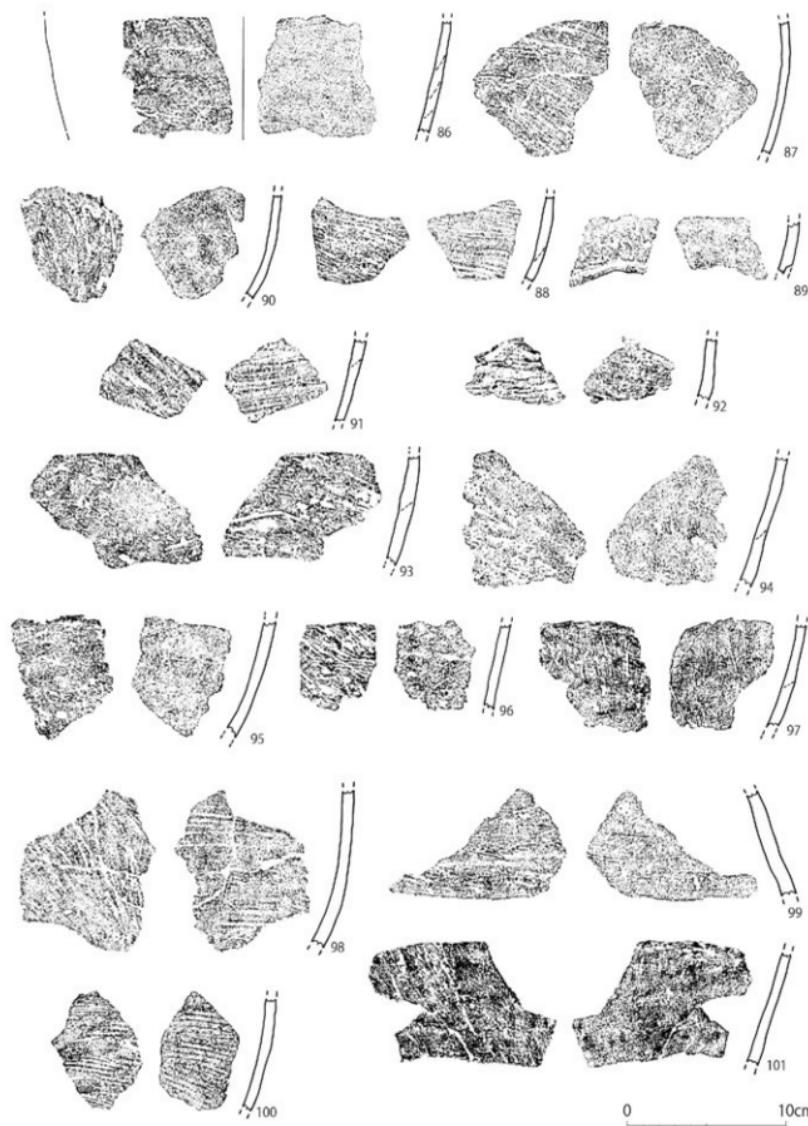
第53図 包含層出土縄文土器 3 (1:3)



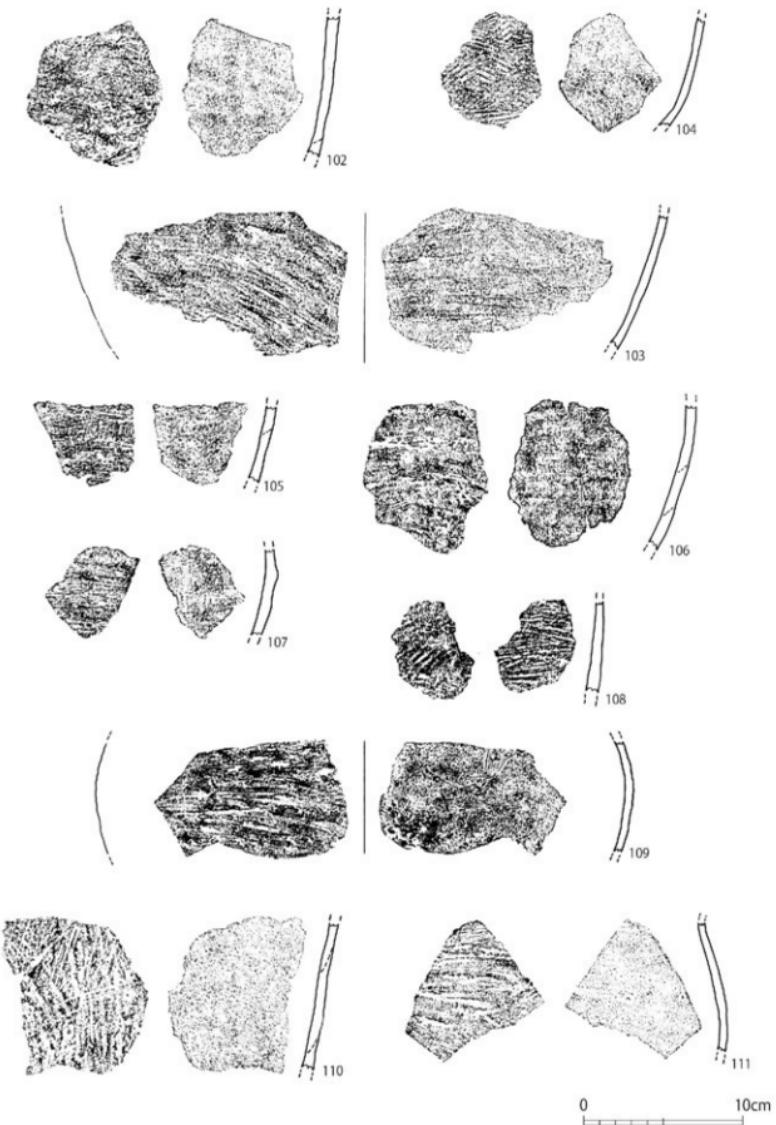
第54図 包含層出土縄文土器4 (1:3)



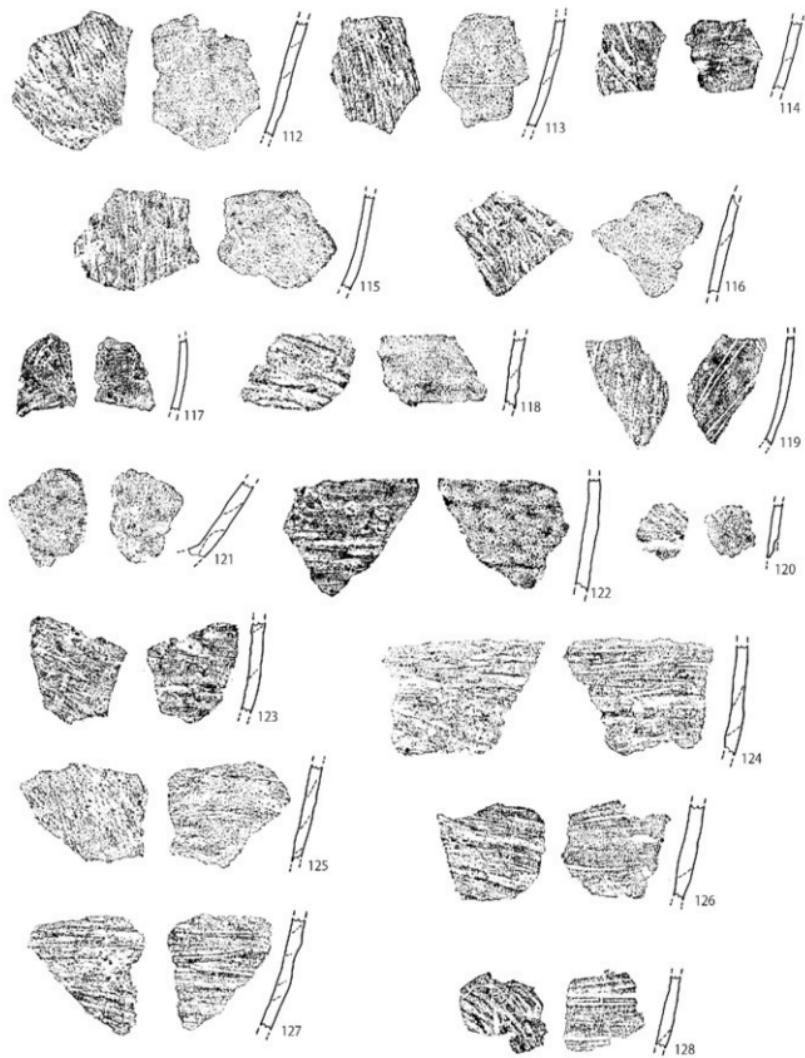
第55図 包含層出土縦文土器 5 (1:3)



第56図 包含層出土縄文土器 6 (1:3)

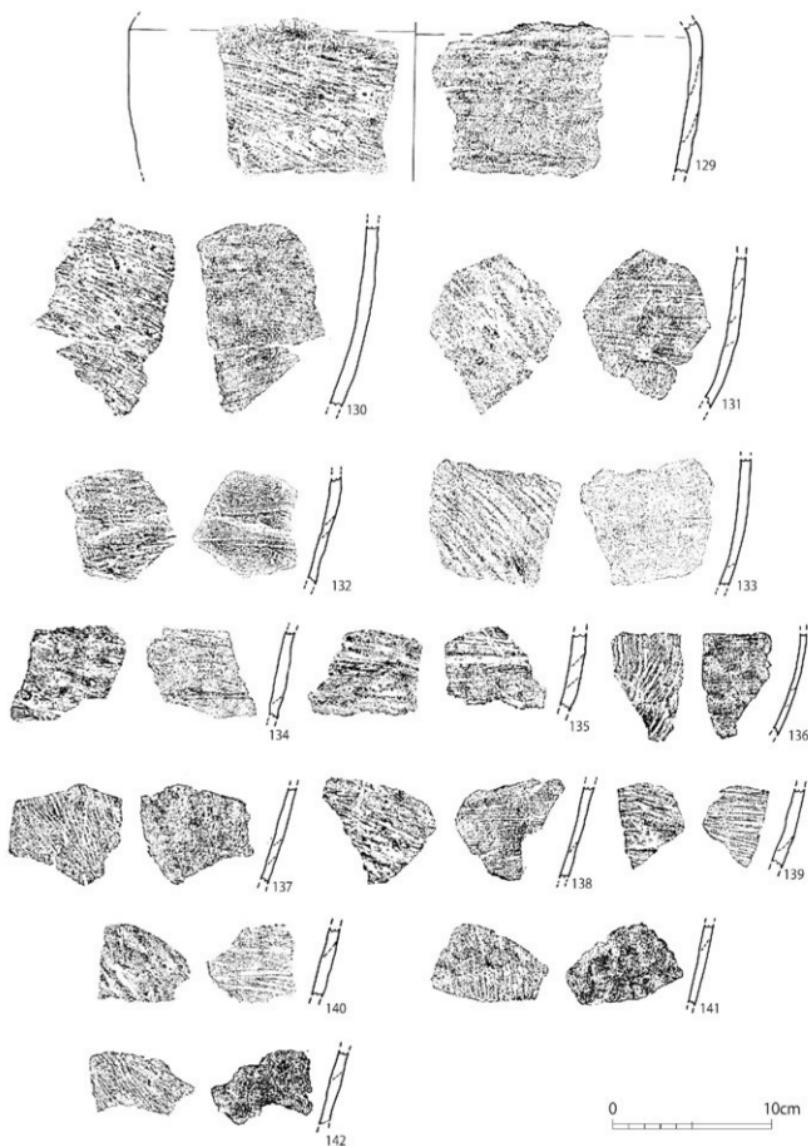


第57図 包含層出土縄文土器 7 (1:3)

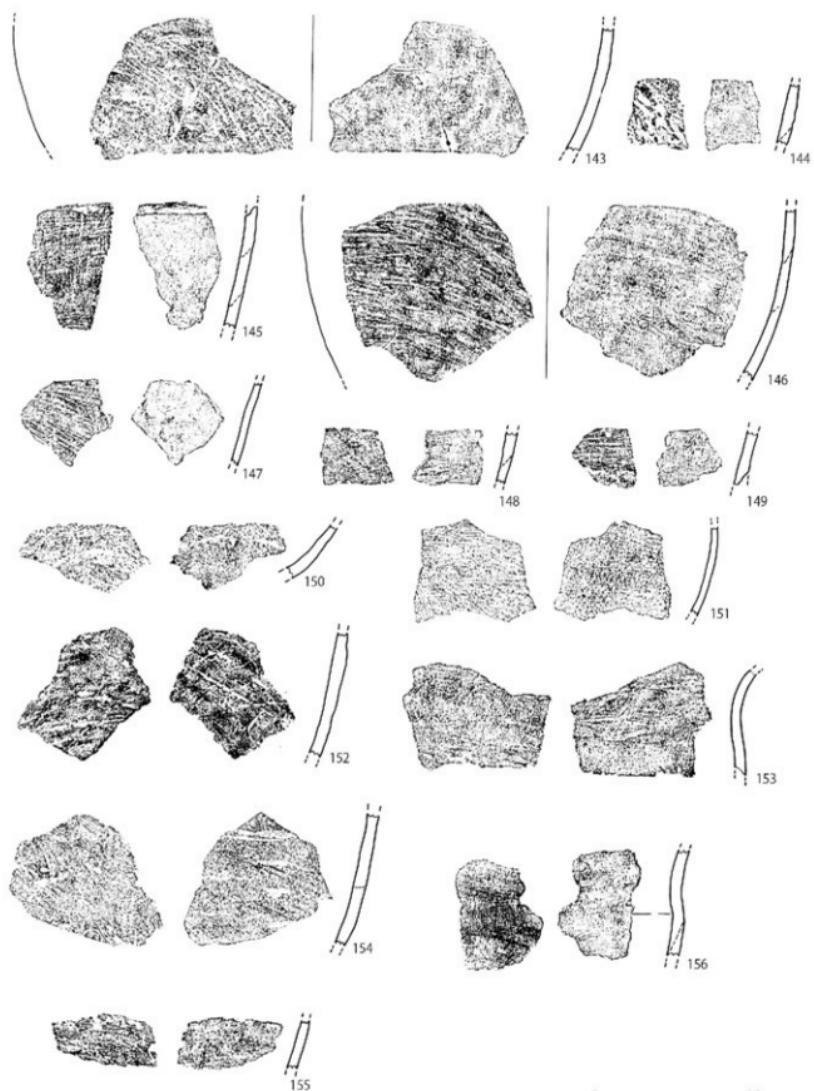


0 10cm

第58図 包含層出土縄文土器 8 (1:3)



第59図 包含層出土縦文土器9 (1:3)



第60図 包含層出土縄文土器10 (1 : 3)

る156はミガキである。内面調整は、156以外基本的にナデで、156は粗雑なミガキである。151の内面は上半部が基本ヨコナデ、下半部が基本タテナデ、原体は板小口と思われる。154の内面には接合痕が明瞭に観察される。

157～197は縄文時代晩期中葉～後葉の精製浅鉢である。

157～163は球体を呈する器形のものである。157は縮まった直立した頸部から壺と思われるが、内外面ともミガキ調整が行われ精製土器であるため、あえてここへ掲載した。外面の頸部と体部の境界にはミガキ原体による粗雑な沈線が1条施されている。158～162は体部中央が張り出す器形をしており、158～160の外面屈曲部から上半部と下半部ではそれぞれ調整を変えている。また158は屈曲部のやや上に1条の沈線が施されている。161の内面には粘土貼り付け面が観察される。163は小型の浅鉢で、前記したものと同様に体部中央が張り出しが、その上下には段を作り出している。下の段から底部にかけては条痕調整が観察されるが、ほかは風化が著しく調整は不明である。

164・165は方形を呈すると考えられる浅鉢の口縁部である。164は山形口縁、165は平らな口縁で、端部には平坦面をもち、破片下端部にわずかに屈曲部が残存する。166は皿形の浅鉢で、体部は浅く取まるようである。167・168は口縁部に突起をもつもので、167は突起を有するへの字状の口縁部で、頸部からやや外反するように頸部が立ち上がる。実際の突起数は不明である。外面頸部と体部の境界にはミガキ調整と同じ原体による沈線が施され、内面口縁部直下にはミガキ調整と同じ原体による沈線が施されている。168は167とは逆位の突起を有する山形波状口縁の上半部である。口縁部はやや肥厚し厚くなるが、突起部の口端部は内外面から押し潰してやや薄くなっている。肩が張り出し屈曲するプロポーションを呈し、外面頸部及び内面口縁部直下にはミガキ調整による段が作られている。

169～175・197は口縁部が大きく屈曲するものを掲載した。169～171は口径を復元することができた。口縁部が屈曲部から若干内傾きみに立ち上がる169、直立きみに立ち上がる170・172・174・175、大きく外反する171・173・197とバラエティーに富む。口唇部は矩形のもの(170)、内面に段をつけるもの(169・171・172)がある。この器形の特徴は、屈曲部を境に上半部と下半部において同じミガキ調整及び丁寧なナデ調整を行っているものと、下半部にケズリ調整を行う171・174・175、条痕調整を行う197がみられることがある。しかし内面調整はすべてミガキであることと焼成が同じであることから精製土器として扱った。

176～185は前記した器形の範疇にある精製浅鉢の口縁部と考えられる。177は破片下端部の内外面にナデによる段または凹線が施され、178は内面に屈曲部の接合痕が観察される。口唇部は矩形のもの(176)、内面に段をつけるもの(179・182・183)、外面に段をつけるもの(181)、内面に沈線を施すもの(180)がある。180の口唇部の刻みのようなキズは焼成後のものである。184・185は山形口縁を呈するもので、184の口縁部内面にはミガキによる幅広の凹線が施されている。

186～190・194～196は口縁部が小さく屈曲するものを掲載した。186は緩やかな波状口縁を呈するもので、口縁部は短く外反する。187～190は短い口縁部が外傾するもので、体部の内外面に屈曲をもたせ、口端部は肥厚するものである。194～196は前記した浅鉢と比較すると体部が浅く広がり、口縁部が短く外反するものである。

191・192は小型の浅鉢である。191は小さな山形口縁を呈し、現状で焼成後の穿孔が1ヶ確認できる。

192は直立した口縁部の直下に1条の突帯文を貼り付け、口唇部を外側に引き出して擬2条突帯としたものである。193は精製浅鉢の胸部である。

198～208は縄文時代晩期中葉～後葉の粗製浅鉢である。198は波状口縁を呈し、外面には口縁部に粗雑なナデによる段と頸部に粗雑なミガキ状による段を施し、内面口縁部にも粗雑なミガキによる段を施している。199は体部中央から外反する口縁部を有し、途中で更に屈曲外反するものである。200～205・207は口縁部が内湾するボル状を呈するものである。200は小型、202はやや幅広のタイプである。201の内面は煤吸着により黒化している。202・205の外面には煤が付着している。

209～220は縄文時代後期～晩期後葉の深鉢の底部である。209・210は平底で、211～220は丸底及び尖底のものである。平底は後期のもの、丸底及び尖底は晩期のものであろう^⑧。

221～229は縄文時代晩期中葉～後葉の浅鉢の底部で、全て平底である。深鉢の平底との違いは、丸底状に作られた外回りに粘土を貼り付けて幅の広い平底に作ることによる。そのため221・226・228などのように、若干高台状を呈すものもある。

230～241は縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前半の突帯文土器である。これらは、刻目をもつ230～237と、刻目をもたない239～241に2分することができる。

前者は、口縁部が外反する深鉢の形態を呈するもので、口縁部直下に突帯文を貼り付け、口唇部と突帯に刻目を施している（Aタイプ）。突帯文はそれぞれ個性があり、230・231は本体と一緒に化したように下からせり上げたような貼り付け方をしている。突帯文の刻目も231・233・235はV字状、234はD字状（右側を大きく斜めに切り取っている）、232は小O字状である。236・237は前5者と比較すると突帯文が小さく突帯にのみ刻目を施したものである（Bタイプ）。また234は土器の色調・胎土・成形方法などに弥生的特徴をもつものである。

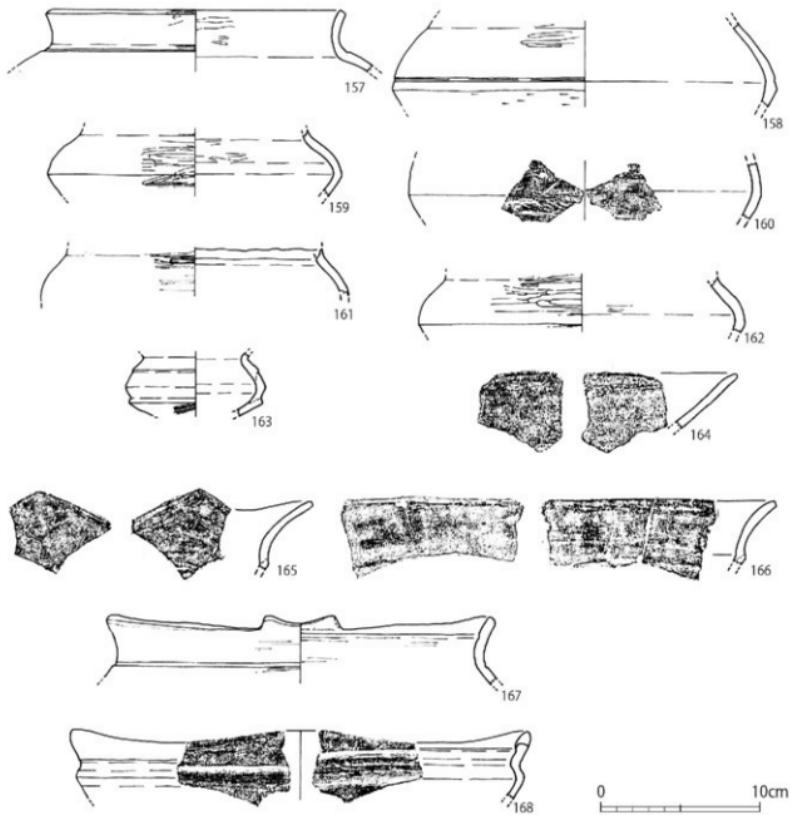
後者は、無刻目（Cタイプ）で、口縁部が鋸先状またはL字状を呈する厚手のもので、頸部から体部は屈曲して丸みをもつ壺に近い形態を呈している。3点とも外面及び口縁部に黒斑が観察される。238は口縁部外面に突帯の剥がれ落ちた接合痕が観察されるものである。口縁部が直立した深鉢の形態を呈するが、A・Bタイプとも若干違うようである。242は突帯部分の口縁部の破片である。突帯部には上下からの指押さえと正面からの横位の指押さえが交互に施されている。

以上、突帯文土器をA～Cタイプに分類したが、Aタイプは突帯文土器の最古タイプ、Cタイプは突帯文土器の最新タイプと考えられ^⑨、そこに明らかな時期差が生じるようである。その間を取り持つのがBタイプであるが、3区ではその出土量は少ない。またCタイプは、縄文的な深鉢の形態をとっていない。当該遺跡から1km南東に位置する三田谷1遺跡^⑩では、最古から最新までの突帯文土器が多く出土している。無刻目のものでも縄文的な深鉢の形態を呈しており238に近いものがほとんどである。当該遺跡のCタイプの系譜は不明といわざるをえない。

243～252は弥生時代前期前半の弥生土器である。

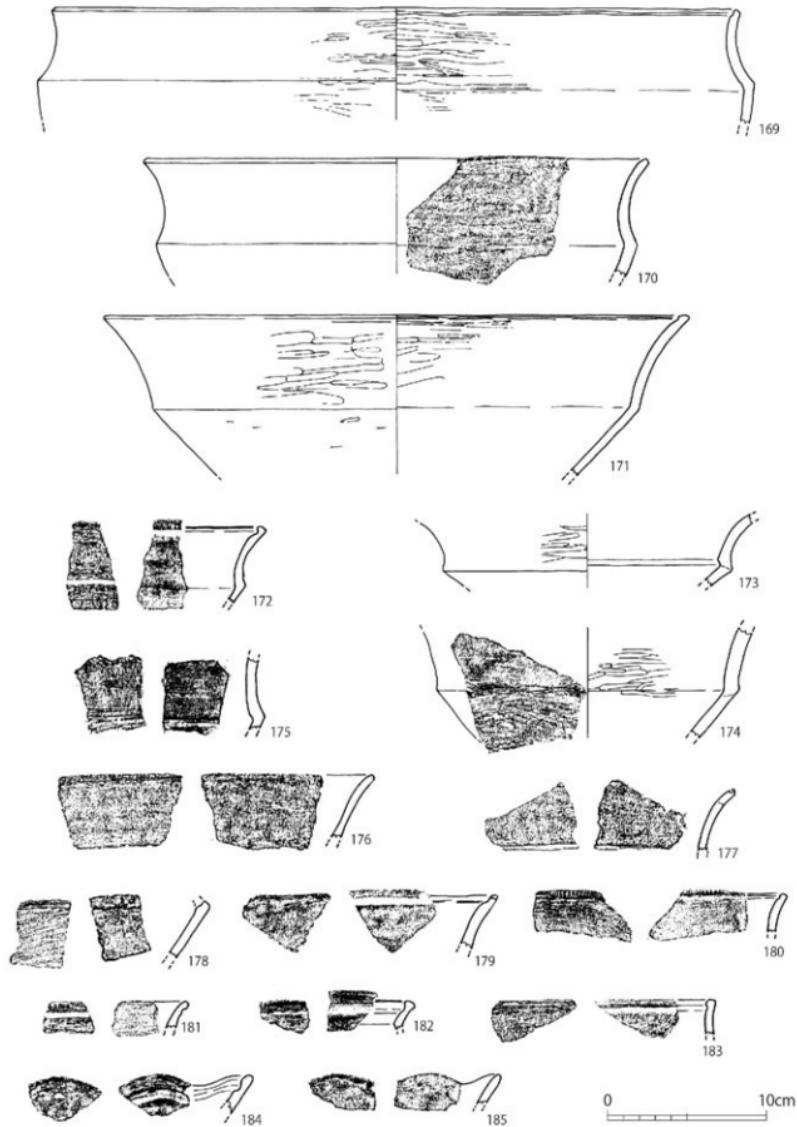
243は人面付土器である。器種不明の口縁部の破片で、人面が施された部分のみが残存していた。垂れ下がった両眉と鼻筋が通りやや膨らみをもつ鼻を貼り付けて表現したものである^⑪。

244は、壺と考えられる胸部破片である。外面にハケ目調整（弥生的）、内面に2枚貝条痕調整（縄文的）を施した縄文弥生折衷タイプの異例のものである。また内面にはおこげのような付着物がある。

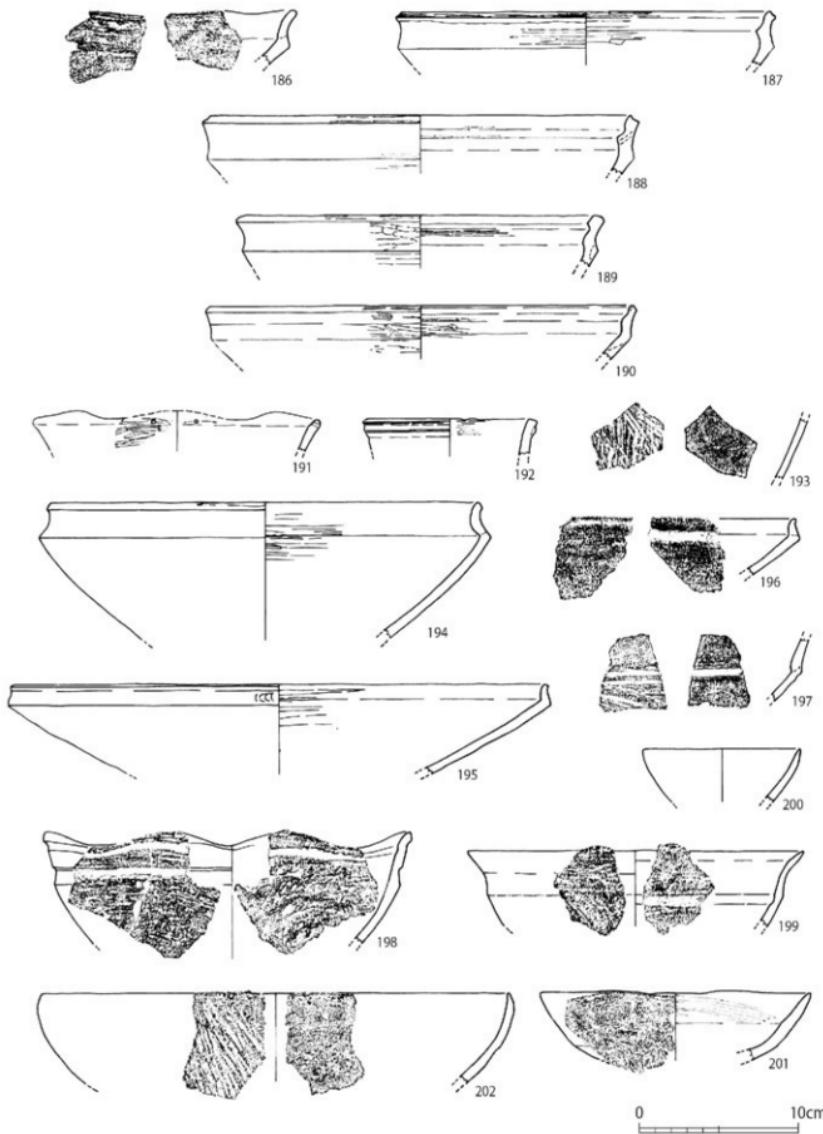


第61図 包含層出土縄文土器11(1:3)

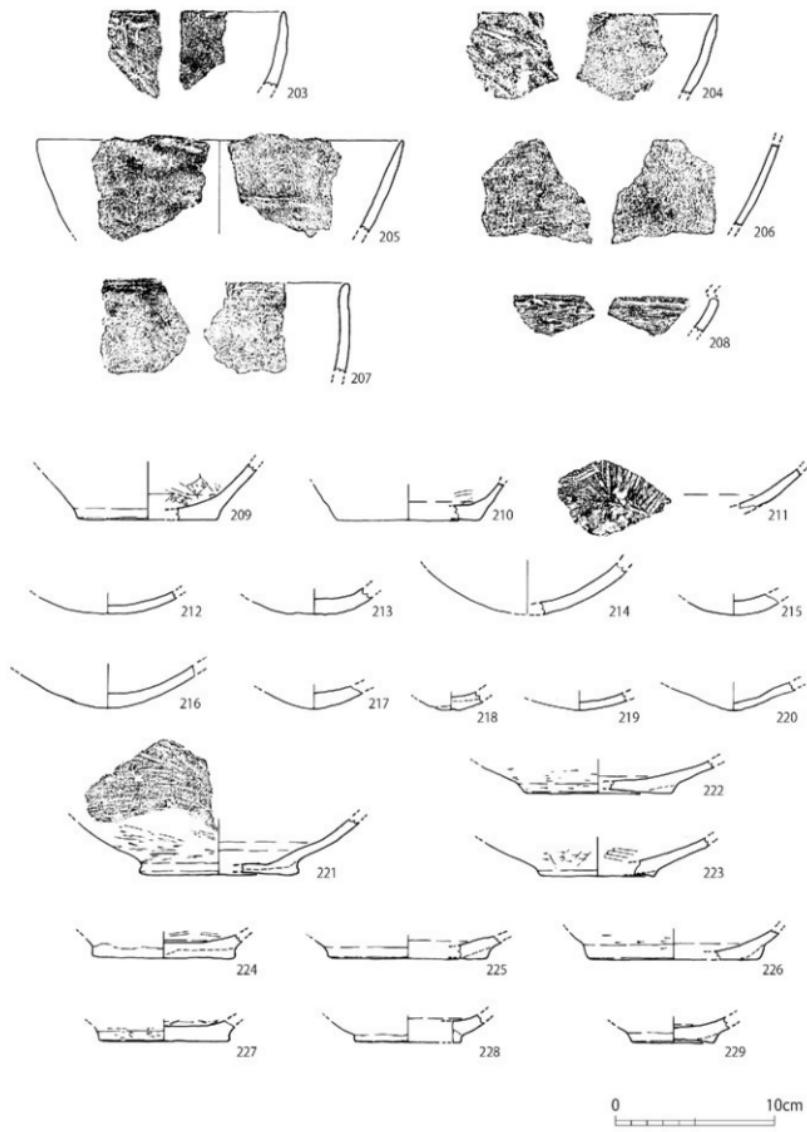
245は壺の胴部で、外面にはヘラ描きによる重弧文が施されている。246～252は壺である。246～249は口縁部であるが、短く外反している。246は頸部に1ヶ所穿孔らしき痕跡が観察される。249は口端部が断面矩形を呈し、口唇下端部に刻目が施されている。また体上半部にはナデにより段が作られ、その角にも刻目が施されている。250～252は胴部破片で、250はハケ状工具による押さえで段を作っている。



第62図 包含層出土縄文土器12 (1 : 3)



第63図 包含層出土純文土器13(1:3)



第64図 包含層出土縄文土器14 (1 : 3)

石製品

3 D・3 E区から出土した当該期の石器はコンテナ1箱分である。3 A～3 C区から出土した当該期の石器は大袋1袋分である。

1～3は石鎌である。1は黒曜石製で、基部は平滑であるが若干抉りを入れているため凹基無茎式の範疇にしておく。2・3はガラス質安山岩製の五角形平基無茎式のものである。4～6は石鎌未成品である。3点ともガラス質安山岩製で、4・5は石鎌の形状になりつつあるが、6はまだ厚みも素材面も残したものである。

7は流紋岩製の磨製石器で、両側縁は明瞭な稜により面を作り出している。

8～10はガラス質安山岩製の楔形石器である。特に8・10は下縁辺部に9は上縁辺部に潰れ痕が観察される。

11・12は剥片で、11が黒曜石製、12がガラス質安山岩製で、共に小型石器と同じ材質であるため、これらは石器素材の可能性も考えられる。

13・14は安山岩製のスクレイパーである。13は基部に刃潰しを施し、表面の自然面と摺理面で剥離した裏面とが銳利な刃部を作り出している。14は小型であるが裏面の摺理面と表面からの剥離面とが銳利な刃部を作り出している。

15・16は大型蛤刃石斧の15は刃部、16は基部である。共に塩基性片岩製である。これら2点は、3 D・3 E区からの出土ではなく、3 C区のA～D-39～41グリッド付近からである。

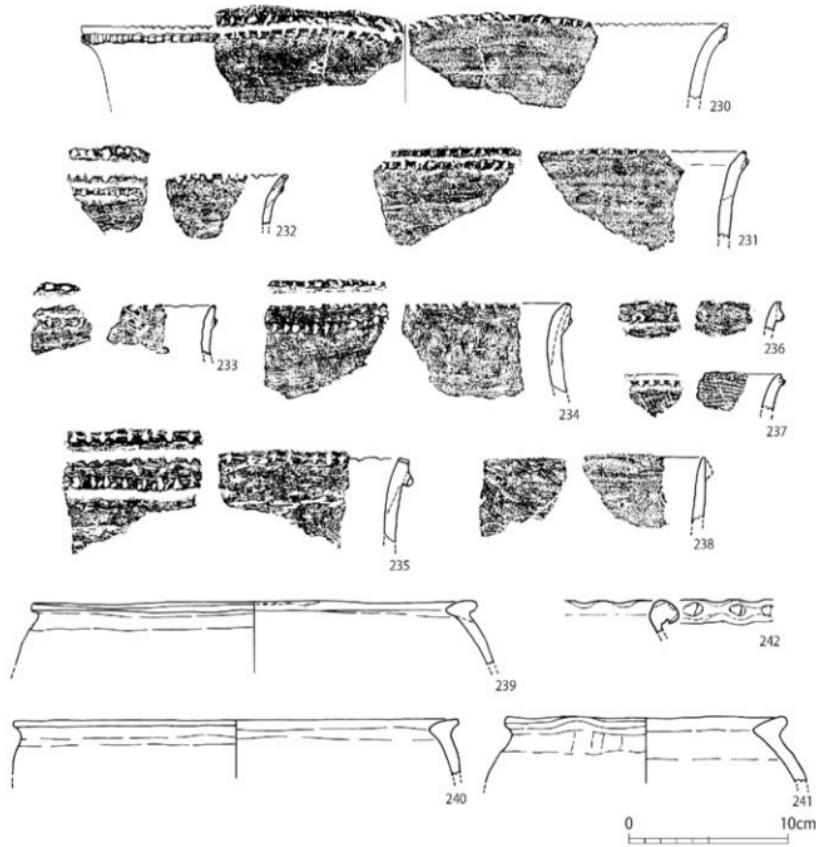
17～25・27～32は打製石斧である。石材は、安山岩11点、流紋岩3点、玄武岩1点で、安山岩がほとんどを占めている。形態は撥形(17～22)・短冊形(23～25・29・31)・不明(27・28・30・32)に大きく分類でき、刃部は尖刃(17・20・22・29・30・32)と直刃(21・24・25・31)に2分できるが、尖刃は撥形に、直刃は短冊形に多いようである。特に撥形としたものは、刃部付近から側縁部へ張り出し刃部が尖刃となるもので、本来の撥形とは違う。特に17は薄手で鋤鍛先のような形態をみせるが、22のように側縁部への張り出しが小さく厚みのあるものもある。これらは使用方法の相違と思われる。また17・20・22・24・25の刃部付近には光沢を帯びた磨耗痕が観察される。26は打製石斧の未成品である。

33は流紋岩製の大型石庖丁と考えられるもので、基部は欠損していて全体の形状は不明であるが、刃部は両面調整により作り出されている。

34・35は磨敲石である。平坦2面を研磨し、周縁は敲打を行い、その境目は明瞭である。

36・37は台石である。36は使用面が磨滅しており、37は使用面に敲打したような痕跡と側面に被熱による黒化が観察される。

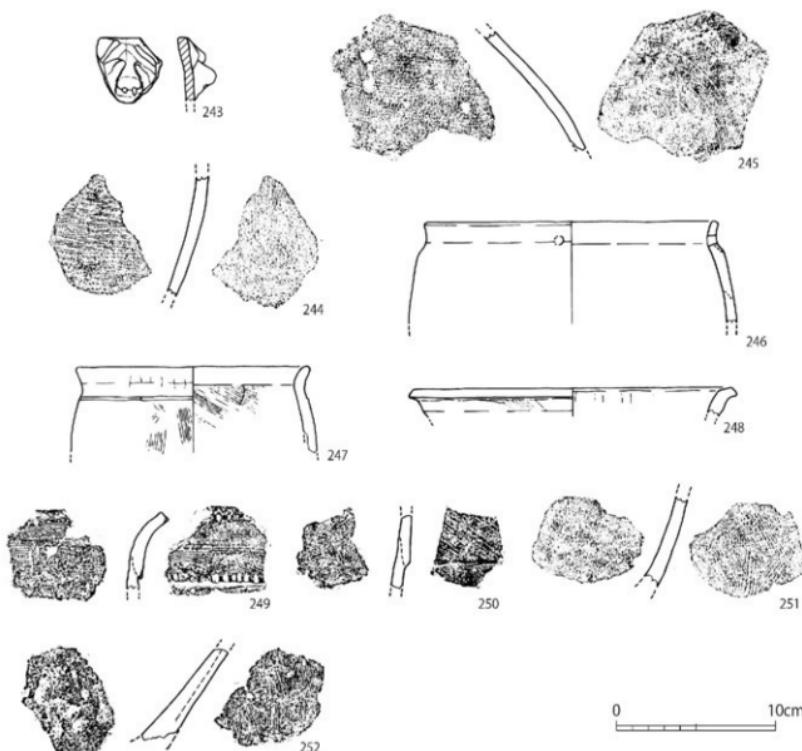
当該調査区からは、掲載できなかった剥片・碎片などが、他の調査区と比較して多く出土している。全体にわたっては、碧玉・瑪瑙の残核・剥片・碎片が27点出土しているが、包含層出土であるので時期は特定できない。また3 D・3 E区からは安山岩・ガラス質安山岩¹²⁾・黒曜石・瑪瑙の剥片・碎片が36点出土している。瑪瑙(1点)以外は、掲載した石器と同一石材である。このため、近辺でこれらの石器が作られていた可能性がある。



第65図　包含層出土縄文土器15(1:3)

註

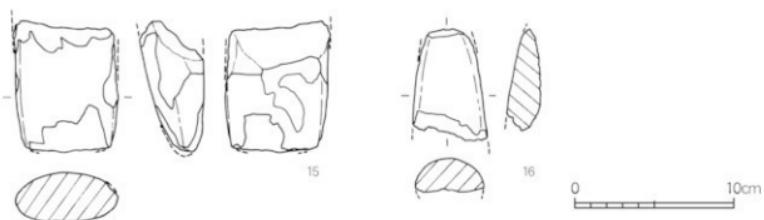
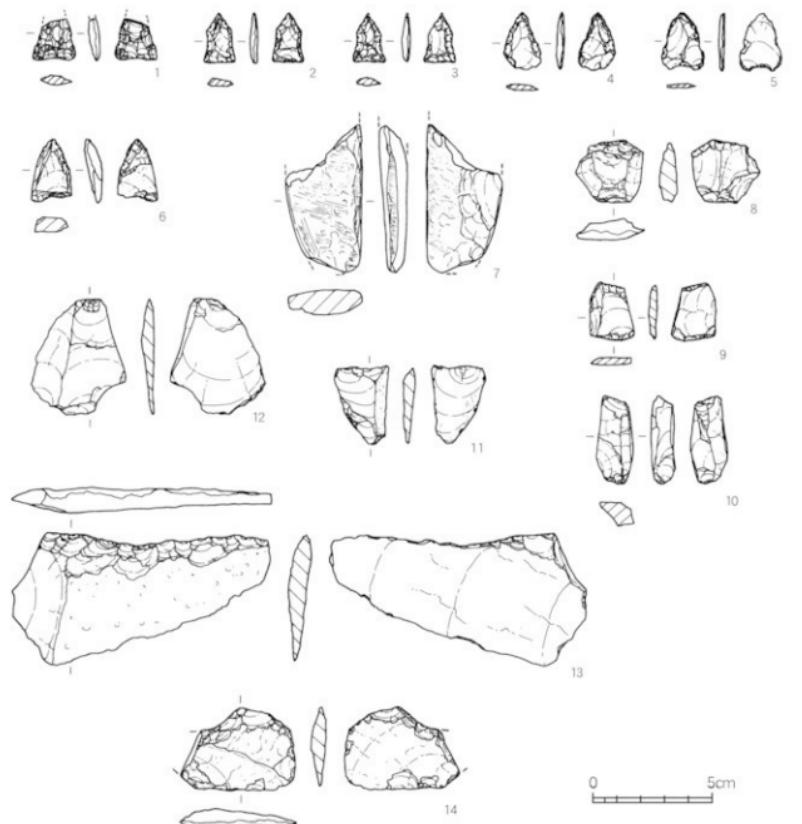
- 1) 3D・3E区から10点の試料を分析に提出したが、当該試料のみが不純物無く、結果を得ることができた。第4章参照。
- 2) 片岡宏二「島根県出土の孔列土器についてー板屋Ⅲ遺跡出土の孔列土器を中心にしてー」『板屋Ⅲ遺跡(付編)ー志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』1998年 島根県教育委員会
片岡宏二「弥生時代 波来人と土器・青銅器」1999年 雄山閣出版
岡田憲一・千葉幸「二重口縁土器と孔列土器」『古文化談叢』第55集2006年 九州古文化研究会
- 3) 『朝駒川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V(海崎地区3)』1989年 島根県教育委員会
『朝駒川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書III』1990年 島根県教育委員会



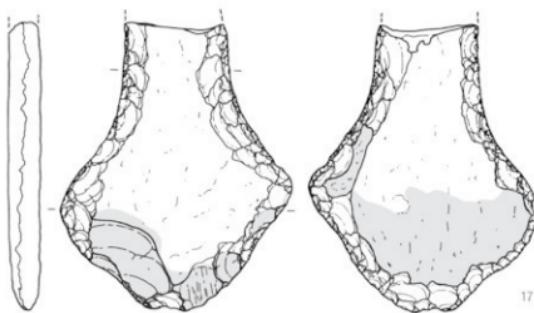
第66図 包含層出土弥生土器（1：3）

- 「朝鶴川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書IV」1992年 島根県教育委員会
 「板屋Ⅲ遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5」1998年 島根県教育委員会
 「三田谷Ⅰ遺跡(Vol.1)」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V」1999年 島根県教育委員会
 「三田谷Ⅰ遺跡(Vol.3)」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX」2000年 島根県教育委員会
 「神原Ⅱ遺跡(3)」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書18」2003年 島根県教育委員会
 「原田遺跡1区」「尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4」2004年 島根県教育委員会
 「原田遺跡(2)ー2区の調査ー」「尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8」2006年 島根県教育委員会 など
 4) 岩田憲一・千葉幸二「重口縁土器と孔列土器」『古文化論叢』第55集 2006年 九州古文化研究会
 5) 平井勝「岡山における縄文晚期突尖土器の様相」『古代吉備』第10集 1988年
 6) 島根県埋蔵文化財調査センターの柳浦俊一氏からのご指摘
 7) 島根県埋蔵文化財調査センターの柳浦俊一氏からのご指摘
 8) 島根県埋蔵文化財調査センターの柳浦俊一氏からのご指摘
 9) 「縄文時代晚期の山陰地方」『第16回中四国縄文研究会 発表資料』2005年 中四国縄文研究会

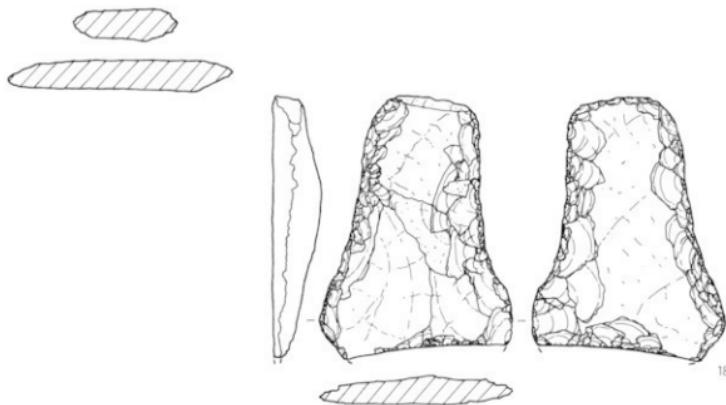
- 10)「三田谷Ⅰ遺跡 Vol. 3」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX』2000年 烏根県教育委員会
- 11)米田美江子「築山遺跡出土の人面付土器」『烏根考古学会誌 第25集』2008年 烏根考古学会
- 12)ガラス質安山岩には所謂サヌカイトと思われるものも含んでいるようだが、分析しなければ明確にはできないと
いう指摘を中村唯史氏からいただいている。



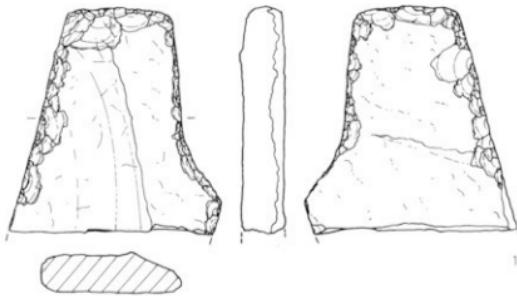
第67図 包含層出土縄文・弥生石器 1(1~14=1:2、15~16=1:3)



17



18

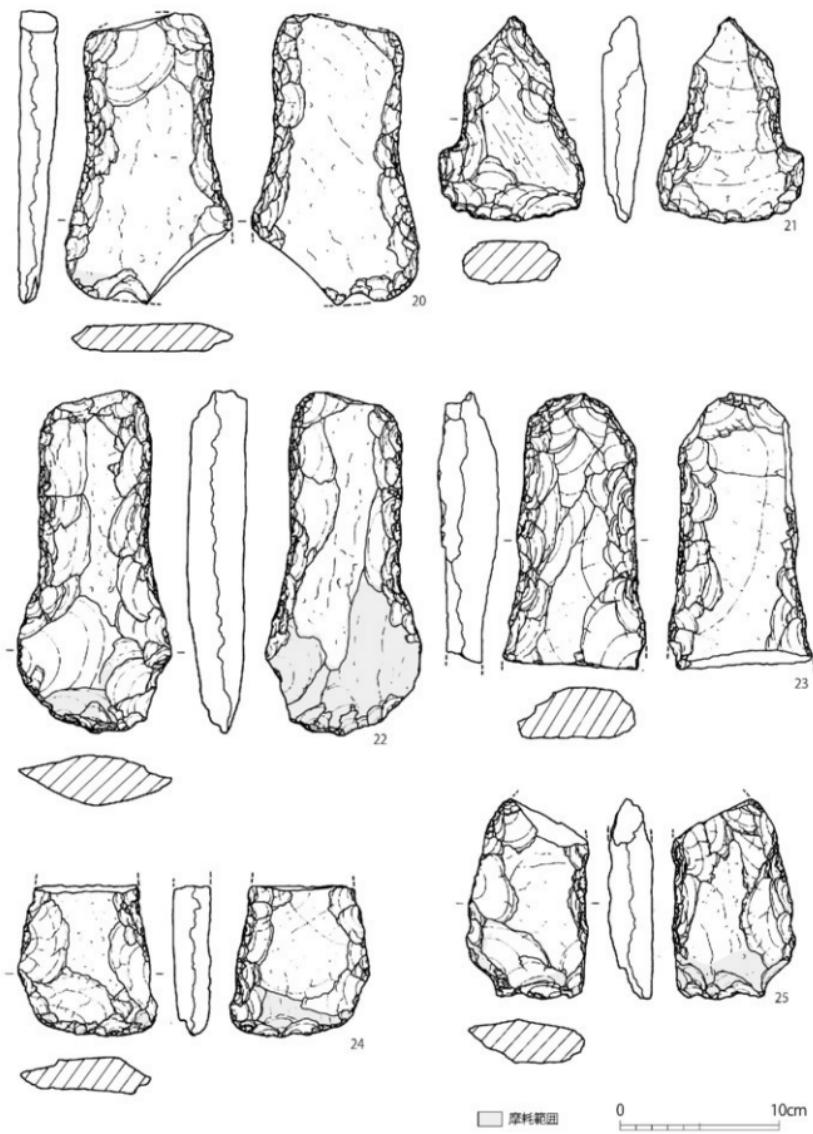


19

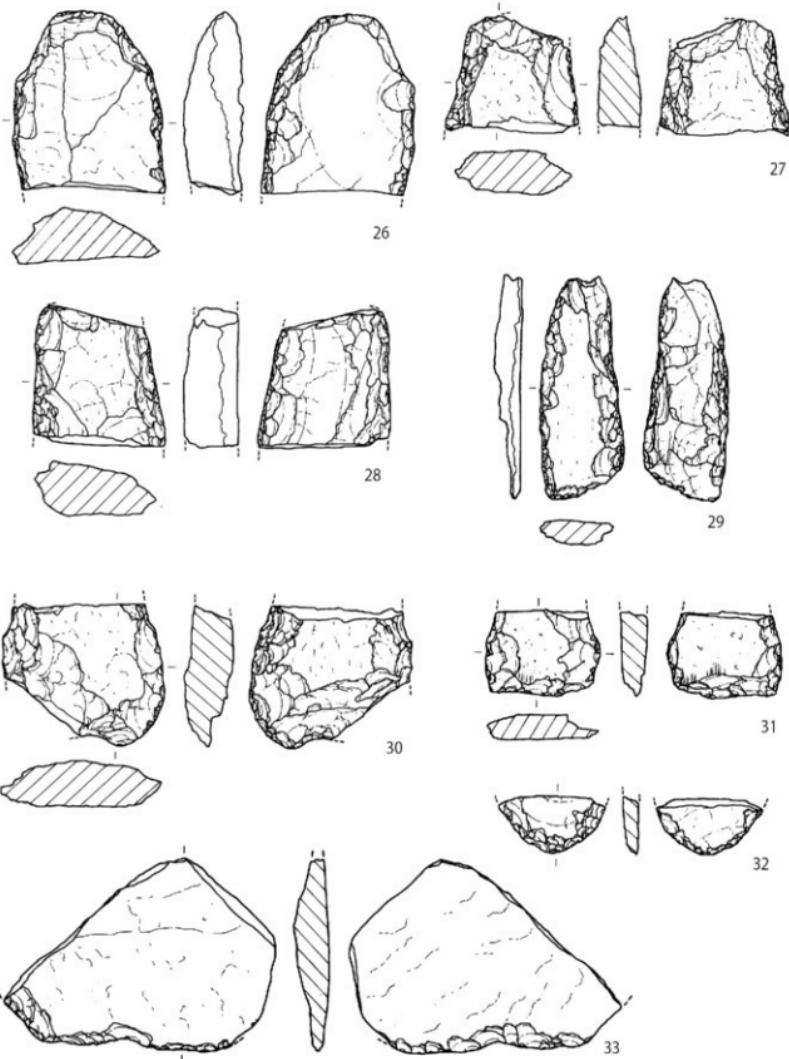
■ 摩耗範囲

0 10cm

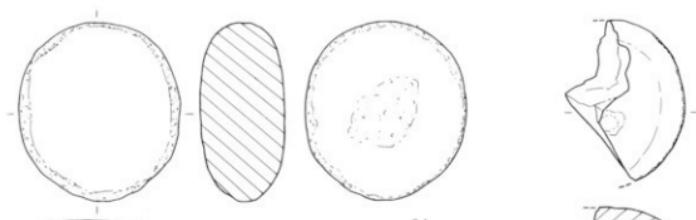
第68図 包含層出土縄文・弥生石器2(1:3)



第69図 包含層出土繩文・弥生石器 3 (1 : 3)



第70図 包含層出土縄文・弥生石器4 (1:3)



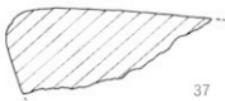
34



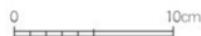
35



36



37



第71図 包含層出土縄文・弥生石器 5 (1:3)

第4節 古代・中世の遺構と遺物

I 遺構とその遺物

(1) 堀立柱建物跡

SB3030(第72図)

C13・14グリッドに位置する。築山1号墳・2号墳周溝上で確認した掘立柱建物である。東面と南面の柱列を確認できないが、2×3間の建物になると推測される。確認できる建物の規模は桁行5.5m、梁行4.8mで、平面形は長方形である。建物の主軸方位はN-76°-Wである。柱穴の形態は円形か不整な楕円形を呈し、直径0.9~1.2m深さ0.7~0.6mである。柱穴の標高は9.7~9.9m。

出土遺物は、赤彩土器(1)・土師器(2・3)・須恵器(4~7)・鉄製品(8~10)である。1は杯で、体部は回転ナデ、底部外面は未調整。底部外面を除きわざかに赤彩を施す。9世紀後半の須恵器の形状に類似する。2は杯の底部で、ヘラ切りによる切り離してある。3は高台付杯の底部。高台は底部外縁につき、9世紀後半から10世紀の須恵器の形状に類似する。4・5は杯蓋。ともに口縁端部をわざかにつまむ。4は内面が平滑で、赤色顔料が付着することから、転用硯の可能性がある。高広IV B期。6は杯の底部。回転糸切りで、灰黄色を呈する。7は水瓶か。高台が外側に開き、体部は丸みを帯びる。8・9は断面四角形で、8は釘、9は鑿か。10は断面円形で、用途不明。

遺構の時期は、出土遺物から9世紀後半~10世紀とみられるが、中世以降の可能性もある。

SB3046(第73図)

A B16・17グリッドに位置する。築山1号墳周溝上で確認した2×2間の掘立柱建物。建物の規模は、桁行4.6m、梁行4.0mで、平面形は正方形に近い。建物東南隅には南北2.3m東西0.8mの張り出し部が取り付く。張り出し部は庇となる可能性もあるが、簡略な中門廊とみられる。建物の主軸方位はN-2°-Wである。柱穴の形態は円形で、直径0.5~0.8m深さ0.2~0.5mである。柱穴の標高は9.9~10.1m。

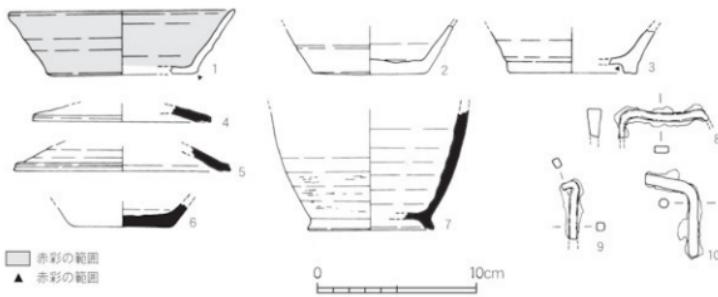
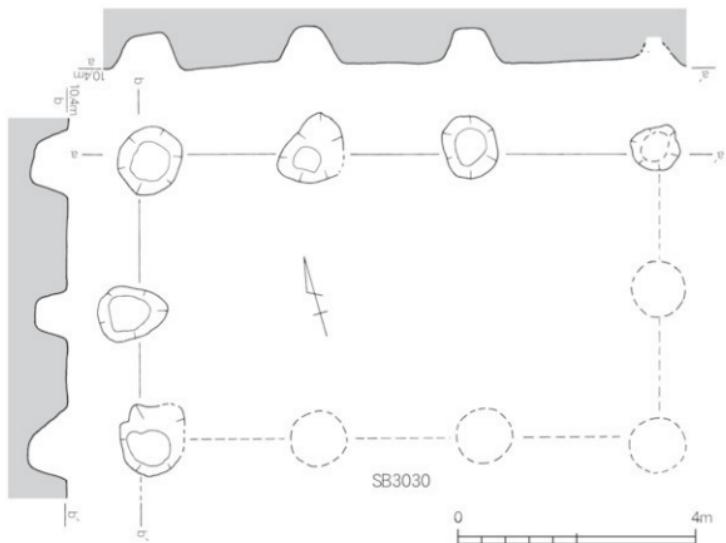
出土遺物は、土師質土器(1)・銅錢(2)である。1は杯で、底部は回転糸切りの後にナデを施す。2は開元通宝(初鋤年621年)。背面は無文、径2.4cm重さ2.29g。建物南東隅の柱穴P3046-11から出土したもので、地鎮として埋納された可能性がある。開元通宝は築山遺跡包含層や大井谷II遺跡からも出土する¹⁾。

遺構の時期は、中世とみられる。

SB3067(第74図 図版65)

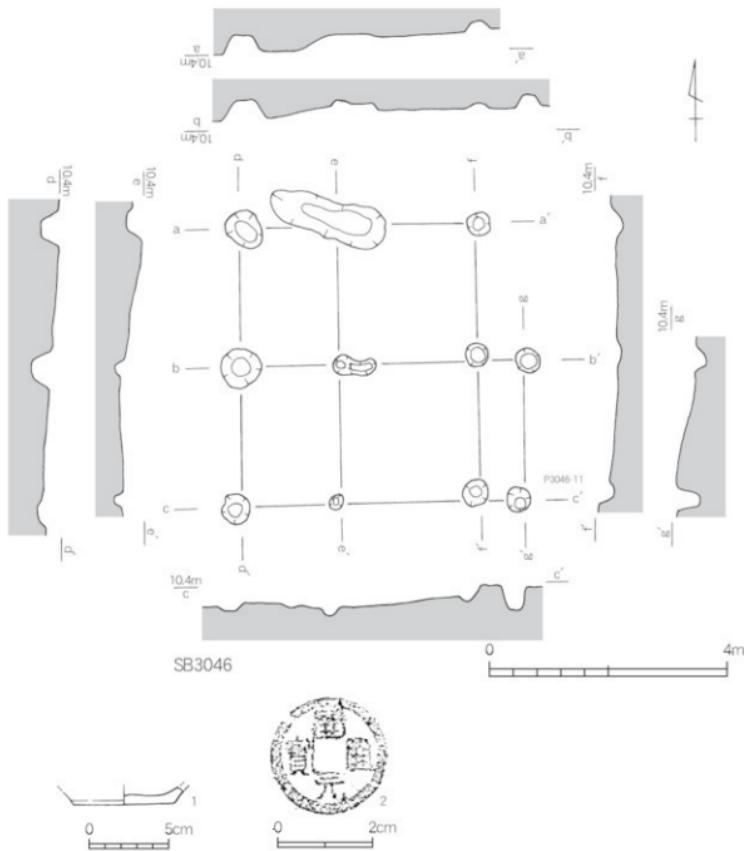
B17・18グリッドに位置する。築山1号墳周溝上で確認した2×2間の掘立柱建物。建物の規模は、桁行4.4m、梁行4.3mで、平面形は正方形。建物の主軸方位はN-7°-Eである。柱穴の形態は円形か不整な楕円形で、直径0.6~1.0m深さ0.4~0.6mである。柱穴の標高は9.9~10.1m。P3067-1(北西隅)・9(南東隅)に相当する遺構は攪乱のため確認できない。

出土遺物は、赤彩土器(1~4)・須恵器(5)・鉄製品(6)である。1~4はすべて底部外面を除き赤彩を施す。1は杯で、外傾しつつ直線的に立ち上がる。底部は指押えの後ナデ調整を施す。形状は9~10世紀の須恵器に類似する。2は底部。底部周縁からやや内湾し立ち上がる。底部はヘラ切



第72図 SB3030の遺構とその遺物(遺構1:80 遺物1:3)

りか。1・2の底部外面は、ともに被熱による油煙の付着や表面の変色が見られる。3・4も底部。3は2と同様に底部周縁を内湾させ、底部と体部の境を明瞭にする。底部は指押え、外縁のみ後にナデ調整を施す。見込み面には赤色顔料塗布のハケ目が明瞭に残る。4は2・3と同様に底部外縁を内湾させる。底部はヘラ削りによる平滑な面をつくり、墨書を施す。文字は「吉」。5は高台付皿。底部回転糸切り。高台は底部外縁に取り付く。体部は外傾しつつ立ち上がり、口縁端部で外反する。端部に凹線をめぐらす。見込み面は平滑な器面で、全体に薄く墨が残存する。その形状から10世紀代の



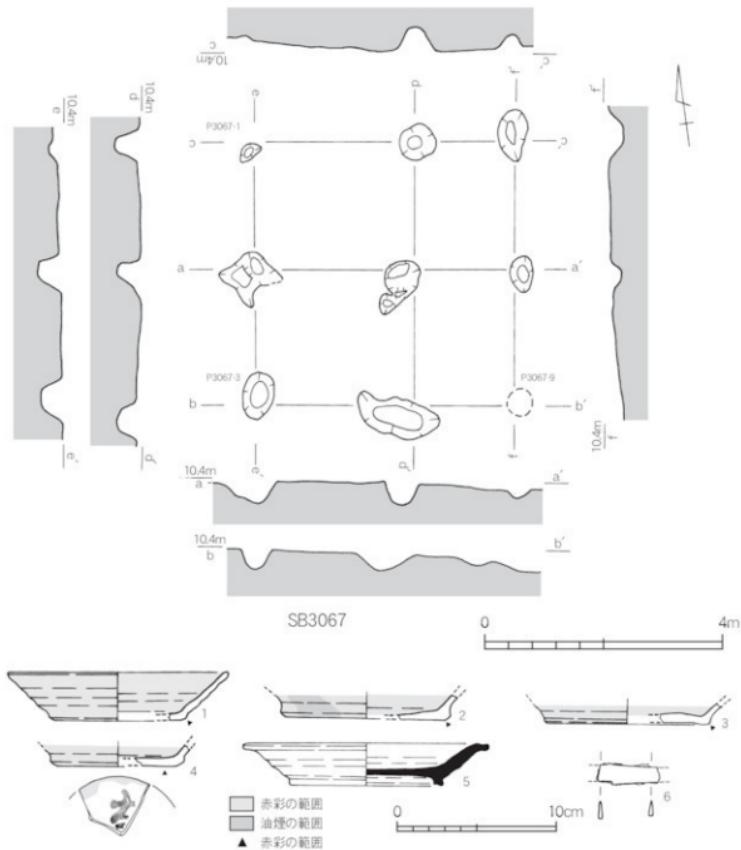
第73図 SB3046の遺構とその遺物(遺構1:80 遺物1=1:3、2=1:1)

ものとみられる。6は刀子か。

遺構の時期は、5かP3067-3の底面より出土することから、10世紀前後と考えられる。

SB3081 (SD3084・SD3085) (第75図 図版61)

D・E19グリッドに位置する。桁行は更に南へ延び、 2×1 間以上の建物になると推測される。確認できる建物の規模は桁行2.6~2.4m梁行4.9mで、平面形は長方形を呈する。建物の主軸方位はN-5°-Eである。柱穴の形態は円形か不整な楕円形で、直径0.4~0.6m深さ0.5~0.6mである。柱穴の標高は9.6~9.9m。

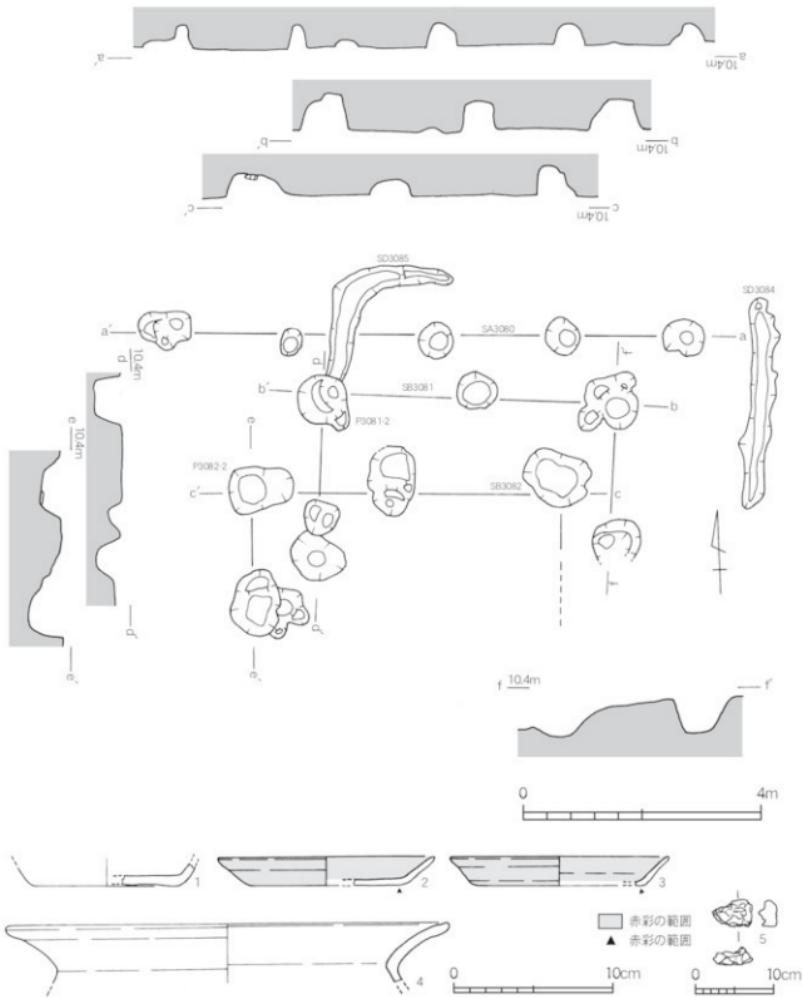


第74図 SB3067の遺構とその遺物(遺構1:80 遺物1:3)

また、本遺構に伴うとみられる区画溝SD3085・SD3084を確認した。SD3085はP3081-2から延びる溝で、L字状に曲がる。規模は、長さ南北2.1m東西2.1m幅0.4m深さ0.2mである。SD3084はSB3081から東へ2.4m離れた南北溝で、主軸方位をSB3081と同じくする。規模は、長さ3.6m幅0.4m深さ0.2mである。

出土遺物は、土師器(1)である。1は底部ヘラ切りで、器壁が薄い。赤彩を施さない。色調・胎土は土師質に近いが、須恵器の焼成不良のものに類する可能性もある。

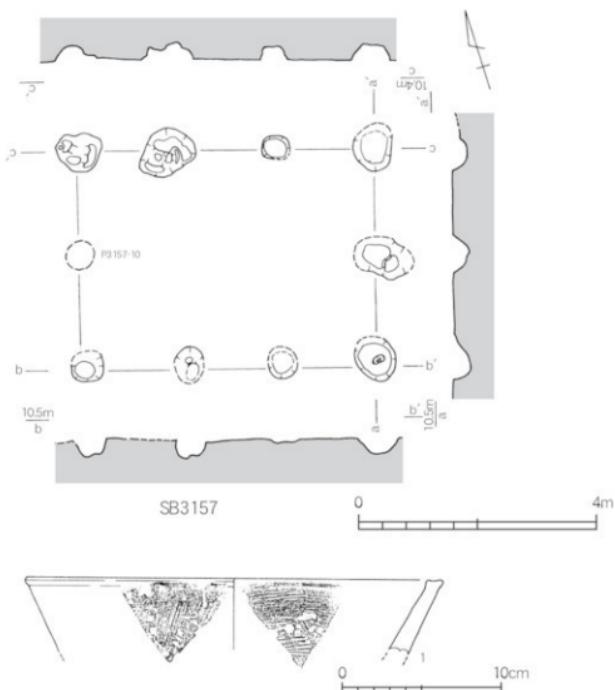
遺構の時期は、SB3082との関係を考慮すると、8世紀後半～9世紀と考えられる。



第75図 SA3080・SB3081・SB3082・SD3084・SD3085の遺構とその遺物(遺構1:80 遺物1~4=1:3、5=1:6)

SB3082(第75図 図版61)

D・E19グリッドに位置する。桁行は更に南へ延び、 2×1 間以上の建物になると推測される。確認できる建物の規模は桁行2.1m梁行4.3mで、平面形は長方形を呈する。建物の主軸方位はN-3°



第76図 SB3157の遺構とその遺物(遺構1:80 遺物1:3)

—Eである。柱穴の形態は不整な円形か隅丸方形を呈し、直径0.6~0.8m深さ0.4~0.5mである。柱穴の標高は9.7~9.9m。北西隅のP3082-2の底面には礎板石が確認される。

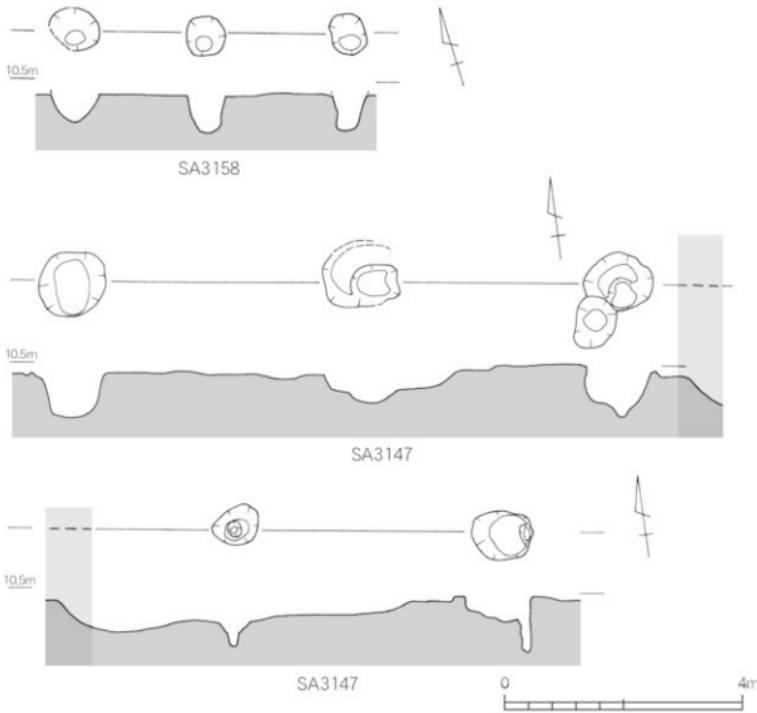
出土遺物は、赤彩土師器(2・3)・土師質甕(4)・鉄滓(5)である。2・3は皿。ともに底部外面を除き赤彩を施す。2は、体部は回転ナデ、底部は指押えの後にナデ調整。2・3は立ち上がりが丸みを帯びることから、8世紀後半とみられる。4は口縁部。回転ナデ調整。大きく外反し、口縁端部をわずかにつまむ。外面に炭化物が付着する。5は椀型鍛冶滓。36g。

遺構の時期は、8世紀後半~9世紀と考えられる。

SA3080(第75図 図版61)

D19グリッドに位置する東西に並ぶ柱穴列。SB3082の梁行と方位(N-87°-W)と同じくする。柱列の規模は、長さ8.5mで、柱間距離が西側から2.0、2.4、2.1、2.0mである。SB3082からは、北へ2.6m離れる。柱穴の形態は円形か不整な隅丸方形を呈し、直径0.4~0.6m深さ0.3~0.4m。

出土遺物は、赤彩土師器の小片のみである。



第77図 SA3158・SA3147の遺構 (1 : 80)

遺構の時期は、SB3082との関係から8世紀後半～9世紀と考えられる。しかしながら、第5章「まとめ」第3節において述べるように、SA3080は2003年度上塙治築山古墳トレンチ調査³²で確認された礎石建物SB01と主軸方位を同じくし、その中軸線上に位置することから、SB01が機能したと思われる12～13世紀代の遺構である可能性も残される。遺構からの出土遺物は8世紀後半～9世紀の年代観を示すが、後述するように遺構周辺の包含層には同時期のものが多くみられることから、廃絶時に遺構内へ流入した可能性も否定できない。したがって、先掲のSB3081・SB3082にも同様の可能性があるが、ここでは遺物の年代観に従いたい。

SB3157(第76図 図版61)

A33・34グリッドに位置する。建物の規模は3×2間の掘立柱建物。建物の規模は、桁行7.1m梁行3.6mで、平面形は長方形を呈する。建物の主軸方位はN-75°-Wである。柱穴の形態は円形か不整な楕円形で、直径0.4～0.7m深さ0.1～0.3mである。柱穴の標高は9.9～10.2m。P3157-10に相当する遺構は、後世の攪乱のため確認できない。